

F D

2022年度
北海道医療大学 F D研修報告書
〈基本編・テーマ編〉

学生を中心とした
教育をすすめるために

北海道医療大学 全学F D委員会

<テーマ編>

北海道医療大学全学FD研修

学生を中心とした教育をすすめるために

-要支援学生への新たな学修サポートシステムの構築について-

はじめに	59
実施概要（趣旨など）	60
参加者名簿	61
レクチャー	
① 「学修が十分でなく、学業不振になっている学生へのサポート」 歯学部長 古市 保志	70
② 「学修時間は確保しているが、学修方法に課題のある学生へのサポート」 薬学部 中川 宏治	85
③ 「合理的配慮が必要な学生への効果的な支援体制」 リハビリテーション科学部 下村 敦司	102
④ 「メンタルに課題を抱える学生へのサポート」 心理科学部 金澤 潤一郎	127
ワークショップ（プロダクト）	
1グループ（テーマ1）	152
2グループ（テーマ2）	154
3グループ（テーマ3）	156
4グループ（テーマ4）	158
ワークショップ（感想）	162
FD委員感想	169
総合評価	171

全学 FD 研修 [基本編]

「学生を中心とした
教育をすすめるために」
-ユニバーシティ・アイデンティティーを考える-

期 日：令和 4 年 4 月 4 日（月）

会 場：当別キャンパス [ZOOM 開催]

はじめに

北海道医療大学 全学 FD 委員長
荒川俊哉

全学 FD 研修会基本編が4月4日に開催されました。本研修は新任の先生を対象に、これから本学で教育に係わる上で、本学の理念・目標・方針を理解していただき、これから始まる教育に役立てていただく事を目的としております。午前中は、まず浅香学長より「医療系総合大学教員として使命と目標～新医療人育成の北の拠点を目指して～」の後講話を頂きました。引き続き、全学 FD 委員のリハビリテーション科学部の鎌田委員より、「当大学の理念・目標・方針に基づく授業～基本的な確認事項について～」と題して、講義スキルに関するレクチャーを行っていただきました。そして午後からは、それらを踏まえて、本学の「ユニバーシティ・アイデンティティ」に即した教育法はどのようなものかを議論していただきました。本年度は、初めて海外からの教員3名にも参加していただき（3名とも本学の大学院の修了生です）、英語のワークショップも生まれ、グローバルな視点での本学の未来をディスカッションする事ができました。

毎回、新任の先生からは、他の大学でのご経験、また医療実務でのご経験を踏まえた、新鮮な視点で本学の「ユニバーシティ・アイデンティティ」をご提案いただいておりますが、今回はそれに加えて、異なる文化的な背景からの多様な視点での「ユニバーシティ・アイデンティティ」を知ることができました。これからの本学の発展に大変有意義な研修会でした。ご参加いただいた皆様に御礼申し上げます。

令和4年度 全学FD研修<基本編>

メインテーマ：「学生を中心とした教育をすすめるために」

*サブテーマ：「ユニバーシティ・アイデンティティを考える」

主 催：北海道医療大学全学FD委員会

日 時：令和4年4月4日（月） 10：00～16：00

会 場：Zoom

参加対象者：2022年度新規採用(4月1日付)教員及び

2021年度中途採用(4月2日付以降)教員：計18名

運 営 委 員：令和3年度の全学FD委員

FD委員長：歯学部 荒川教授

FD委員：薬学部：泉教授 小島教授、歯学部：會田教授

看護福祉学部：塚本教授、守田教授、心理科学部：百々教授、今井准教授

リハビリテーション科学部：鎌田教授、医療技術学部：藏満教授、坊垣教授

全学教育推進センター：佐藤准教授、近藤准教授

歯科衛生士専門学校：大山専任教員

講 師：浅香学長、鎌田教授 (FD委員)

事務担当：高見学務部長、日下教務企画／IR課長、細川IR課員、橋本教務企画課員

【趣旨】

本学の教職員一人ひとりが自主性・創造性を発揮することにより「学生中心の教育」並びに「患者中心の医療」を推進しつつ、「21世紀の新しい健康科学の構築」を追究することが本学の行動指針である。その実現のためにFD研修会を開催し、教授法の開発改善を行うとともに「教育力」を高めることを本研修会の趣旨とする。

【目標】

- 1) 本学の教育の三方針、アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーを理解し、本学の「ユニバーシティ・アイデンティティ」とは何かを考える。
- 2) 講義を行う上での様々な注意点や留意点を理解する。

【研修形態】

- 1) 能動的体験型研修とする。
 - 2) 肩書なしの対等な意見交換をする。
 - 3) 建設的な意見交換から建設的対応策を生み出す。
-

【スケジュール概要】

時間	内容	担当者
9:50	参加者集合	
10:00	開会	【進行：荒川委員長】
10:00-10:10	《開会挨拶とオリエンテーション》 ・研修の意義と進行内容の説明	《荒川委員長》
10:10-11:00	《講話》 医療系総合大学教員としての使命と目標 -新医療人育成の北の拠点を目指して-	《浅香学長》
11:05-11:35	《レクチャー》 ・当大学の理念・目標・方針に基づく授業 ～基本的な確認事項について～	《鎌田委員》
11:35-12:40	昼食・休憩	
12:40～	《ワークショップ》	【午後進行：今井委員】
12:40-13:00	*ワークショップテーマの説明 *プロダクトの作成作業について *ワークショップのすすめ方 *ブレイクアウトルームの説明	【説明：百々委員】 ＜ファシリテーター＞ 以下の各委員（敬称略）
13:00-14:50	《ブレイクアウトルーム入室》 *自己紹介、役割分担（進行・記録・発表）の決定（10分） *グループ討論（100分） 「テーマ：本学のユニバーシティ アイデンティティに即した教育法」	Aグループ (佐藤、泉、塚本) Bグループ (小島、百々、近藤) Cグループ (會田、今井、藏満) Dグループ (守田、鎌田、坊垣、大山)
14:50-15:00	休憩	
15:00-15:50	発表（発表・質疑応答 10分×4グループ）	【発表進行：藏満委員】 【午後進行：今井委員】
15:50-15:55	総評	《荒川委員長》
15:55-16:00	アンケート記入・閉会	

令和4年度全学FD研修 基本編 参加者名簿(五十音別)

	氏名	フリガナ	学部	グループ
1	Islam Syed Taufiqul	イスラム, サイエドタウフィ	歯学部	A
2	表山知里	オモテヤマチサト	看護福祉学部	D
3	河治勇人	カワジハヤト	リハビリテーション科学部	B
4	久原啓資	クハラケイスケ	歯学部	B
5	桑原ゆみ	クワバラユミ	看護福祉学部	D
6	佐藤幸平	サトウコウヘイ	歯学部	D
7	Zuniga-Heredia Enrique Ezra	スニガエレディア, エンリケ, エズラ	歯学部	A
8	只石朋仁	タダイシトモヒト	リハビリテーション科学部	D
9	谷本真唯	タニモトマイ	看護福祉学部	B
10	土田大	ツチダダイ	歯学部	D
11	中谷温紀	ナカタニアツシ	歯学部	B
12	Paudel Durga	パウエルドウルガ	先端研究推進センター	A
13	三浦桃子	ミウラモモコ	薬学部	B
14	宮本雅央	ミヤモトマサオ	看護福祉学部	C
15	柳瀬舜佑	ヤナセシュンスケ	歯学部	C
16	山下佳久	ヤマシタヨシヒサ	心理科学部	C
17	吉田彩華	ヨシダアヤカ	リハビリテーション科学部	C

参加者合計:17

2022年度 全学FD研修 〈基本編〉

学生を中心とした教育を 進めるために

サブテーマ
ユニバーシティ・アイデンティティを考える



主催：全学FD委員会

2022年4月4日（月） Zoom研修会



研修会開催の趣旨

本学の教職員一人ひとりが自主性・創造性を発揮することにより「学生中心の教育」並びに「患者中心の医療」を推進しつつ、「21世紀の新しい健康科学の構築」を追究することが本学の行動指針である。

その実現のためにFD研修会を開催し、教授法の開発改善を行うとともに「教育力」を高めることを本研修会の趣旨とする。

研修の目標

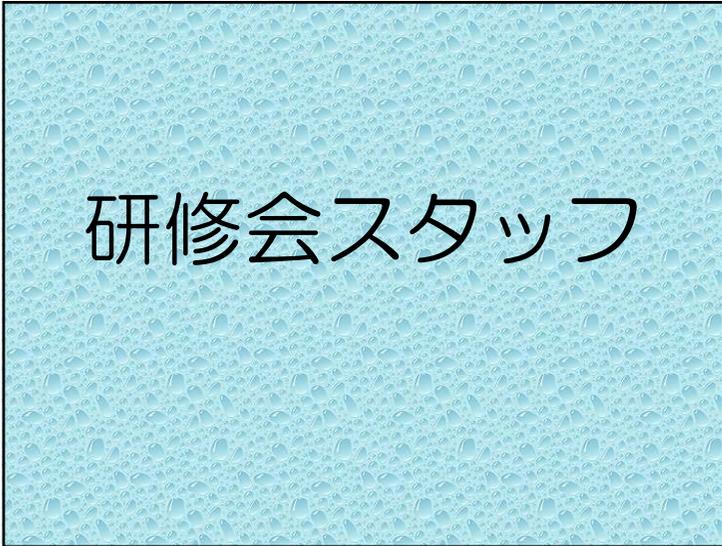
- 1) 本学の教育の三方針、アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーを理解し、本学の「ユニバーシティ・アイデンティティ」とは何かを考える。
- 2) 講義を行う上での様々な注意点や留意点を理解する。

研修会スケジュール

研修会スケジュール

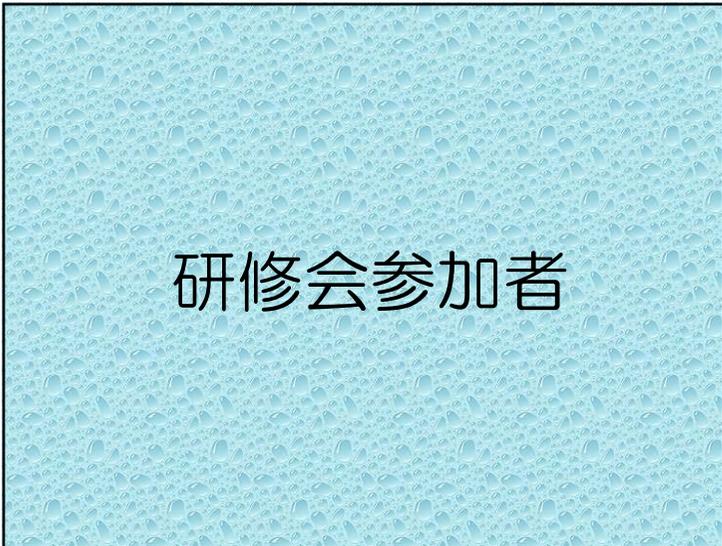
9:40	FD委員集合(通信状態等チェック)	午前進行:荒川委員長
9:50	参加者集合	
10:00	開会、委員長あいさつ/スケジュール確認ほか	荒川委員長
10:10	学長講話: 「医療系総合大学教員として使命と目標 ～新医療人育成の北の拠点を指して～」	浅香 正博 学長
11:05	レクチャー: 「当大学の理念・目標・方針に基づく授業 ～基本的な確認事項について～」	鎌田委員
11:35	昼休憩	
12:40	参加者集合 ワークショップ作業解説 ワークショップの進め方、ブレイクアウトルームについて等	午後進行:今井委員 百々委員
13:00	ワークショップ 「本学のユニバーシティアイデンティティに即した教育法」 (自己紹介、役割分担(記録・発表等)を決める時間を含む)	
14:50	休憩	
15:00	発表(1グループ 10分)	発表進行:藤浦委員
15:50	総評・アンケート提出	荒川委員長
16:00	閉会	

スケジュールは配布済みのファイルもご確認ください



研修会スタッフ

学長	浅香正博
FD委員長	荒川俊哉 歯学部教授
FD委員	泉 剛 薬学部教授 (WS外国語グループ担当)
	小島弘幸 薬学部教授
	會田英紀 歯学部教授
	塚本容子 看護福祉学部教授 (WS外国語グループ担当)
	守田玲菜 看護福祉学部教授
	百々尚美 心理科学部教授
	今井常晶 心理科学部准教授
	鎌田樹寛 リハビリテーション科学部教授 (レクチャー担当)
	藏満保宏 医療技術科学部教授
	坊垣暁之 医療技術科学部教授
	佐藤圭史 歯学部/全学教育推進センター准教授 (WS外国語グループ担当)
	近藤朋子 薬学部/全学教育推進センター准教授
	大山静江 歯科衛生士専門学校専任教員
事務局	高見裕勝 学務部長
	日下穂規 教務企画/IR課長、教務企画課 橋本悠平、IR課 細川洋美



2022年度全学FD研修（基本編） 参加者

薬学部		看護福祉学部	
三浦桃子	B	表山知里	D
歯学部		桑原ゆみ	D
ISLAM Syed Taufiqul	A	谷本真唯	B
久原啓資	B	宮本雅央	C
佐藤幸平	D	心理科学部	
Zuniga Heredia Enrique Ezra	A	山下佳久	C
土田 大	D	リハビリテーション科学部	
中谷温紀	B	河治勇人	B
柳瀬舜佑	C	只石朋仁	D
先端研究推進センター		吉田彩華	C
Paudel Durga	A	参加者内訳 5学部 1研究所 17名	

参加者のグループ分け

A	B	C	D
ISLAM Syed Taufiqul	三浦桃子(薬)	柳瀬舜佑(歯)	佐藤幸平(歯)
Zuniga Heredia Enrique Ezra	久原啓資(歯)	宮本雅央(看護)	土田 大(歯)
Durga Paudel	中谷温紀(歯)	山下佳久(心)	桑原ゆみ(看護)
	谷本真唯(看護)	吉田彩華(リハ)	表山知里(看護)
	河治勇人(リハ)		只石朋仁(リハ)
グループ担当ファシリテーター			
佐藤委員	小島委員	會田委員	守田委員
泉委員	百々委員	今井委員	鎌田委員
塚本委員	近藤委員	藏満委員	坊垣委員
			大山委員

※荒川委員長は、各グループを巡回

講話

北海道医療大学 学長

浅香 正博

医療系総合大学教員として使命と目標
～新医療人育成の北の拠点を目指して～

レクチャー

当大学の理念・目標・方針に基づく授業
～基本的な確認事項について～

鎌田樹寛

リハビリテーション科学部教授 FD委員

昼食・休憩



午後の再集合時間 : **12:40**
(時間厳守)

2分前には再入室をお願いします



2022年度 全学FD研修 <基本編>

ワークショップテーマの説明と プロダクトの作成作業について

2022年4月4日(月曜日) Zoom研修会

主催：全学FD委員会

担当：百々委員(心理科学部・FD委員)

ワークショップテーマ 説明①

本学のユニバーシティ・アイデンティティ
(UI) に即した教育法

大学を取り巻く環境は、ユニバーサル化^(※)と少子化による存続競争が激化する状況です。

そこで、本学の理念や方針等から、特徴的なUIを考察し、学内外に対しその特徴を印象付ける具体的な教育法(教育効果の高い授業の進め方や新たなスタイル)の展開について議論してください。

※ユニバーサル化：進学率が50%以上となった段階

ワークショップテーマ 説明②

本学の理念や教育の三方針、3つのポリシー^(※)を理解し、本学のUIとは何かを考える。

その上で

- 本学のUIとなりうる本学の良さ、特長を洗い出す。
- 本学のUIとなりえる特徴を念頭におき、戦略的にアピールできる「学生を中心とした教育」を考える。
- 戦略的にアピールできる「学生を中心とした教育」の手法を具体的に示す。

(※) アドミッション、ディプロマ、カリキュラムの各ポリシー

作業解説

プロダクト作成の作業ステップを例示します
(いろいろな進め方があると思いますので進め方の一例として参考にしてください)

<step1>

【課題を具体的に定義する】

議論を効率的に進めるには、課題を具体的に定義し、スタート地点をしっかりと共有することで議論がまとまりやすくなります。

<step2>

【アイデアを出し議論する】

グループ内で検討するテーマに対するアイデアを引き出し、議論を活発にします。

ポイントは、

- ・出てきたアイデアを否定しない
- ・傾聴する
- ・議論に参加できないメンバーには話を振る

(アイデアの質は後で検討するのでここでは気にしません)

<step3>

【アイデアを分類し選択する】

出されたアイデアを分類することは、アイデアの良し悪しを議論するよりも効率的になります。

次に、グループのプロダクトとするアイデアを選択します。選択の方法としては、「評価軸^(※)」を決めて選択していく方法があります。

(※)評価軸:例えば、実行性や効果、かかる費用や時間...など

<step4>

【アイデアの詳細を詰めてまとめる】

自由に出されたアイデアは細部が詰められていないので、グループのプロダクトにするために、以下の点を詰めていきます。

- 1.誰が、2.どこで、3.どんな風に、4.誰に対して、5.どんなタイミングで、6.なぜそれをやるのか
- …いわゆる5W1Hです。

<step5>

【グループ発表】

発表では、以下のポイントを意識します。

- ◇最終的な結論を一言で表現する(40文字以内)
- ◇なぜその方法を選んだのか(理由・基準)
- ◇具体的なアイデアの内容(実行方法・アイデアの詳細)
- ◇アイデアの実行による結果(生じる利益・利点)

<プロダクトのまとめと発表方法>

■プロダクトの発表資料の作成には、パワーポイント、ワードなどを使用してください。

(プロダクト作成に使用するアプリ等は問いません)

■作成したプロダクトは、本研修会終了後、全学FD委員会に提出してください。

提出方法は問いません。

→メールの場合は、fd-kensyu@hoku-iryo-u.ac.jp

→USBメモリなどに保存して提出の場合は、学務部教務企画課/IR課

学生中心とした教育をすすめるために、UIを念頭において、より教育効果の高い授業の進め方や新たなスタイルを提案してください。

言葉の説明（補足）

デュプロマ・ポリシー (DP)



学位授与方針

◇デュプロマ・ポリシーに盛り込むべきポイント

- ①学生が身に付けるべき資質目標・能力目標の明確化。
- ②「何ができるようになるか」に対し、卒業認定、学位授与に必要な学修成果を具体的に示す。
- ③策定においては、学生の進路に資するよう社会における顕在・潜在ニーズも十分に踏まえる。

中央教育審議会大学分科会大学教育部会（平成28年3月31日）より

カリキュラム・ポリシー (CP)



教育課程の編成・実施方針

◇カリキュラム・ポリシーに盛り込むべきポイント

- ①ディプロマ・ポリシー(DP)を踏まえた教育課程の編成、学修方法・学修過程、学修成果の評価方法等を具体的例示。
- ②能動的学修、大学教育の質的転換に向けた取組の充実。
- ③DPに基づく体系的な教育課程の構築に向けた、初年次教育、教養・専門教育、キャリア教育等、多面的観点から検討。
- ④多様な入学者が自ら学修計画を立て、主体的な学びを実践できるような観点をもった初年次教育の充実。

中央教育審議会大学分科会大学教育部会（平成28年3月31日）より

アドミッション・ポリシー (AP)



入学者 受入方針

◇アドミッション・ポリシーに盛り込むべきポイント

- ①各大学の強み、特色や社会的な役割を踏まえつつ、大学教育を通してどのような力を発展・向上させるのか。
- ②入学者に求める能力は何か。
- ③入学者選抜において、高等学校までに培ってきたどのような力を、どのように評価するのか(どのような要素に比重を置くのか、どのような評価方法を活用するのかなど)。

文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室資料より

ユニバーシティ・アイデンティティ

「大学がイメージの統一を図り、その組織の存在を人々に印象付けて組織の内外ともに活性化を図るための行為」

ビジュアル・アイデンティティ (VI) : 大学が社会に送り出すあらゆるもの(研究・教育に関する情報と人、サービス、設備、広告、校章に至るまで)をシンボルやデザインによって統一性や計画的多様性を持たせる

マインド・アイデンティティ (MI) : 新たな教育理念の確認・確立、目標設定、長期的戦略計画の立案、内部資源の再評価・再編成などが行われる

ビヘイビア・アイデンティティ (BI) : 大学の理念、機能、役割を社会に向かって明確に示し、その存在理由を主張し、社会と組織内部の支持と理解を求める

その結果を踏まえた外部への情報発信を中心とするコミュニケーション活動で、実態とイメージの一体化をはかる統合された組織行動

日経広告研究所1994:17-18

関連の参考資料

本学の基本方針
<http://www.hoku-iryu-u.ac.jp/about/philosophy/basic-policy>
教育理念・目的・目標
<http://www.hoku-iryu-u.ac.jp/about/philosophy/rinen/>
行動指針
<http://www.hoku-iryu-u.ac.jp/about/philosophy/guideline/>
大学の三方針（ディプロマ、カリキュラム、アドミッションの各ポリシー）
<http://www.hoku-iryu-u.ac.jp/about/philosophy/policy/>
シラバス（学部別にサイトが用意されています）
<http://www.hoku-iryu-u.ac.jp/for/student/syllabus/>
学生便覧（学生便覧の後半に北海道医療大学学則が掲載されています）
<http://www.hoku-iryu-u.ac.jp/for/student/gakuseibinran/>
学校法人東日本学園 中期計画
<http://www.hoku-iryu-u.ac.jp/about/summary/med-term>
入試情報WEBサイト
<https://manavi.hoku-iryu-u.ac.jp/>
オープンキャンパス
<https://sites.google.com/hoku-iryu-u.ac.jp/2021opencampus/>



2022年度 全学FD研修 <基本編>

ワークショップの進め方 ブレイクアウトルームの説明

2022年4月4日（月）Zoom研修会

主催：全学FD委員会

担当：百々委員（心理科学学部・令和3年度FD委員）

ワークショップの流れ

12:40 - 13:00

- ・ワークショップテーマ、プロダクトの解説
- ・ワークショップの進め方、ブレイクアウトルームの説明

13:00 - 14:50

- ・ワークショップ（各グループ）

14:50 - 15:00 休憩

15:00 - 15:50 ※発表グループ交代等の時間調整含む

- ・発表、質疑応答（4グループ10分）

ワークショップの進め方

質問です。

ワークショップは初めて？

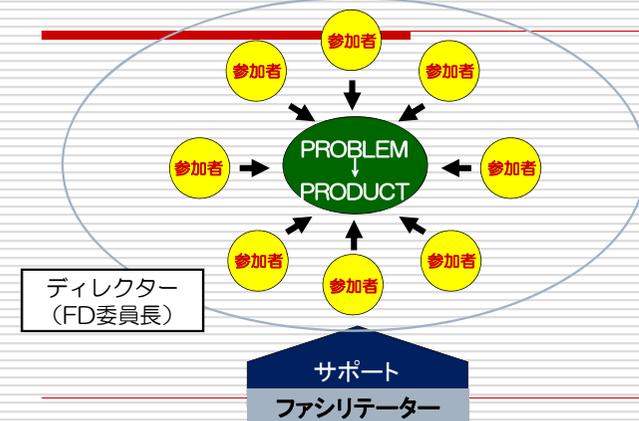


ワークショップとは？



- ・ 多人数を対象として、**参加者1人1人の参画意識を高める**ために、**小グループ**に分かれて**討論と作業**を行い、**結論**を出していく方式をいう。
- ・ **一定の時間内**にある**成果(プロダクト)**を生み出すという手段をとる。

ワークショップとは？



ワークショップの流れ

1. プレナリーセッション

全体 : 導入講義・課題の確認



2. スモールグループディスカッション (約100分)

グループ別 : 課題について討論・プロダクト作成



3. プレゼンテーション (1グループ10分)

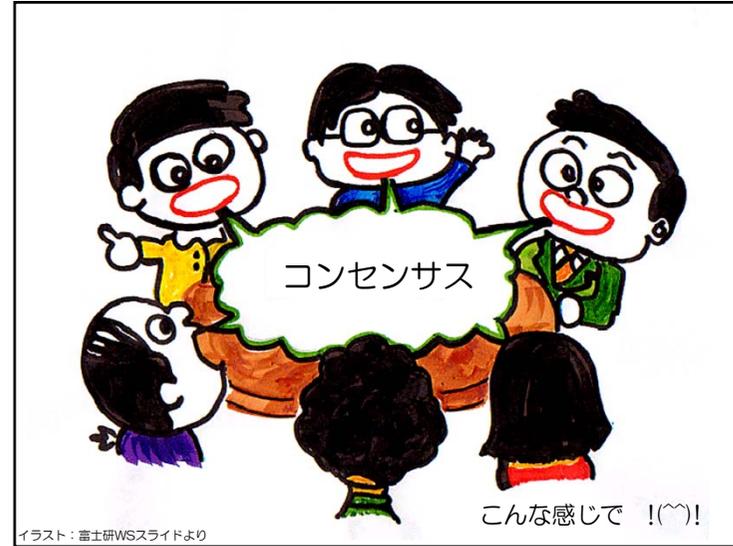
グループ別 : 発表・質疑応答



ワークショップの要件

1. 全てのメンバーが積極的な参加者になる
2. **参加者全員が Resource Person(主役)**
3. **積極的に建設的、前向きな意見を述べる**
4. **どんな質問・意見でも無意味ではない**
(良否の判断はしない。自分と異なる意見でも、まずは「なるほど～」と頷き、もう少し深く尋ねてみる等)
5. **あらかじめ決まった正解はない**
6. **先生はいない**
7. **時間を守る**





スモールグループディスカッション

- 1. 参加者の自己紹介** (1人1分程度)

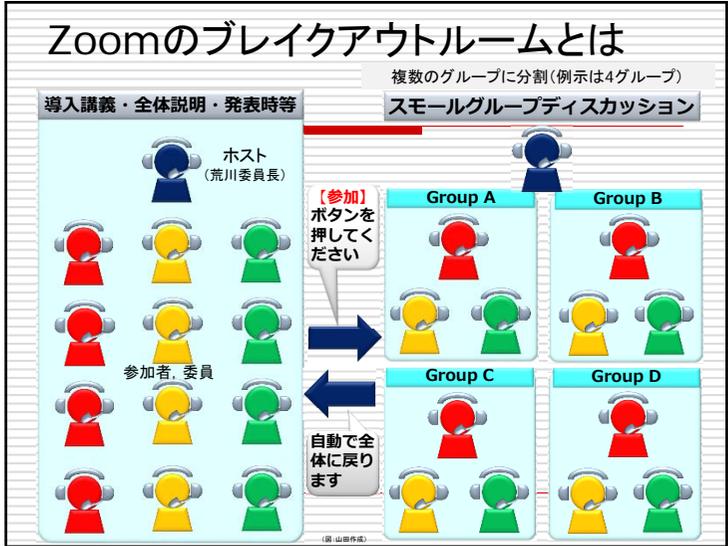
(氏名・所属と併せて、時間があれば、私のいち押し、「実は私〇〇です」, Good&New[24時間以内にあった「良かったこと(Good)」や「新しい発見(New)」]などを交えた自己紹介も行ってください)


- 2. 役割分担 (リーダー・記録・発表)**
- 3. グループ討論**
 ・発表内容の確認
 

役割分担

- 進行** []
 - グループ討論時の司会進行を行う。
- 書記・PC入力** . . . []
 - グループ討論時、Zoomで画面共有しながらPC入力(書記)を行う (プロダクト作成)
 - 作成したプロダクトはPC等に保存 (終了後提出)。
- 発表者** []
 - 全体発表時にグループプロダクトをZoomで画面共有して、発表を行う。
- **ファシリテーター (FD委員)**
 - グループ討論・作業が効率的に進むようにサポートする。
 - グループ討論のタイムキーパーも行う。





休憩

グループ発表の開始 : **15:00**

(時間厳守)

14:58 までにお集まりください。

グループ発表

総 評

(全学FD委員会 委員長)

アンケート



研修の評価

皆さんの感想をお聞かせください
(上記QRコード又はチャットに送信されたURLを利用してください)

！アンケートの回答をもって終了です！
お疲れさまでした

学長講話

医療系総合大学教員としての使命と目標
～新医療人育成の北の拠点を目指して～

医療系総合大学教員としての使命と目標

新医療人育成の北の拠点を目指して



北海道医療大学 学長
浅香正博

本学の沿革

学校法人東日本学園設立(1974)



2019年度から、医療技術学部として臨床検査学科が設置された。
これにより北海道医療大学は6学部9学科を有する日本でも有数の規模の医療系大学となった。

言語聴覚士専攻(2006)

歯学部附属歯科衛生士専門学校 (1984)

健康科学研究所(2002) ※現: 先端研究推進センター

大学教育開発センター(2007) ※現: 全学教育推進センター

リハビリテーション科学部(2013)



学生数・教員数

(2021年5月1日現在)

学部名	学生数	教員数	教員1人あたりの学生数
薬学部	1,026名	67名	15.3名
歯学部	426名	101名	4.2名
看護福祉学部	642名	67名	9.6名
心理科学部	263名	18名	14.6名
リハビリテーション科学部	821名	48名	17.1名
医療技術学部	201名	18名	11.2名
歯学部附属 歯科衛生士専門学校	72名	5名	

●教員1人あたりの学生数 10.7名

全国私立大学
教員一人当たり
学部学生数
平均19.4名
(2021学校基本調査)

※医療系総合大学の学生数・教員数(リハビリテーション科学部)にて算出

在学生・卒業生の出身地分布

(2021年5月1日現在)

大学	在学生	卒業生
薬学部	1,002	6,180
歯学部	426	3,370
看護福祉学部	642	5,162
心理科学部	263	1,786
リハビリテーション科学部	821	734
医療技術学部	201	-
計	3,379	17,232

大学院	在学生	修了生
計	167	1,543

専門学校	在学生	卒業生
歯科衛生士科	72	1,615
看護学科	-	470
介護福祉学科	-	866
言語聴覚士療法(専攻)学科	-	436
計	72	3,387

北海道
在学生 3,078
卒業生 17,662

中国・四国
在学生 23
卒業生 245

関西・中部
在学生 74
卒業生 856

東北
在学生 200
卒業生 989

関東・北陸
在学生 116
卒業生 1,859

九州・沖縄
在学生 48
卒業生 471

外国
在学生 79
卒業生 80

(単位:名)

本学の国家試験合格率（2021年度）



本学における学生教育への対応

- 1 教育の質の向上と、教育内容・方法の充実
2007年4月 大学教育の総合的検討・立案・実行する「大学教育開発センター」設置
2019年4月より、**全学教育推進センター**に名称変更
- 2 教員の自己評価と学生の評価
教員評価制度(2007年から実施)と評価結果の利用
学生による授業アンケート(1993年度から実施)
- 3 充実した学生生活の確保
Student Campus Presidents (SCP)の導入(2008年度から実施)

北海道医療大学教育の3方針

入学者受入れの方針(アドミッション・ポリシー)

1. 協調性や基礎的コミュニケーション能力を有していること。
2. 入学後の修学に必要な基礎的学力を有していること。
3. 生命を尊重し、他者を大切に思う心があること。
4. 保健・医療・福祉に関心があり、地域社会ならびに人類の幸福に貢献するという目的意識を持っていること。
5. 生涯にわたって学習を継続し、自己を磨く意欲を持っていること。

教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)

「全学教育科目」と各学部・学科の「専門教育科目」からなる学士課程教育を組んでいる。

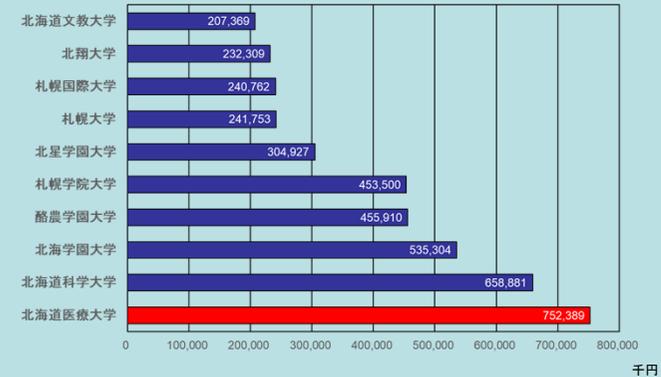
学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)

各学部・学科の教育理念・目標に沿った学士課程の授業科目を履修し、保健・医療・福祉の高度化・専門化に対応しうる高い技術と知識を身につけ、かつ各学部が定める履修上の要件を満たした学生に対して「学士」の学位を授与する。

大学経費の問題

- ・ ヨーロッパの高等教育機関はほとんどが国公(州)立
- ・ アメリカでも約75%が州立
- ・ 日本は80%が私立(世界の中で特異)であり学納金への依存性が先進諸国のなかで例外的に高い
- ・ 学納金に見合った大学側の対応が必要(学生中心の教育)
- ・ **私立大学の収入の大半は授業料であることを忘れてはいけない。**
- ・ 国から配分される運営費交付金は10億円に満たない。
- ・ **国立大学は、東大810億円、京都大541億円、北海道大363億円と桁違いに多い。北海道教育大は65億円、旭川医大でも54億円給付されている。**

道内私立大学経常費補助金 (令和3年度)



安定した経営を維持するためには

- ・ 授業料収入の増加または安定化が第一。
- ・ そのためには、定員割れがあってはいけない。
- ・ 定員割れをなくすためには多くの人が受験してくれなくてはならない。
- ・ 多くの人が受験してくれるためには、魅力的な大学にしなければいけない。
- ・ 北海道からのみ学生が受験してくれるだけでなく、全国から来てくれるのが理想である。
- ・ 魅力的な大学にするために何をすべきかを教員の方々は考えてほしい。

国家試験の合格率を上げる

- ・ 入り口対策
入試の際、優秀な学生を集める。
医療大学のブランド性を上昇させる。
国試の合格率が高い。
特別な教育体制を構築する。
北海道だけでなく、全国から受験生を集める。
- ・ 出口対策
国試対策をきめ細かく行う。短期間合宿など。
優秀大学の教育システムを学び応用する。
魅力的な授業を行う。

進学目的・入学後の学習意欲

進学動機

将来目標型	48%
一般教養を身につけたい	11%
専門知識を学びたい	57%
学問・研究による真理探究	19%
近未来目標型	35%
資格免許取得、就職に有利な学歴	51%
	12%
楽しみ・無目的型	18%
とくに目的はない	12%
青春をエンジョイ	12%
スポーツ・文化活動	4%
友人を得る	4%

大学に入って学習意欲が高まったか？

高まった	13%
かなり高まった	3%
低くなった	37%
かなり低くなった	21%
わからない	26%

健康にとっての運動の意義

Heller教授 ニューヨーク大学メディカルセンター

ヒトの骨や筋肉は不規則な変わった形をしており、この筋骨格の構造から**人体は動くためにできている**ことがわかる。

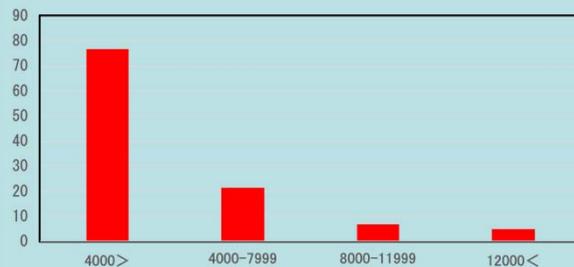


- ・ 有酸素運動は免疫系を刺激する。
- ・ 精神機能を向上させる。
- ・ 筋肉や骨を強化する。
- ・ 心疾患、がん、糖尿病などの慢性疾患リスクを低減する。

1日の歩数と死亡リスク

JAMA 2020 323:1151

1年に1000人あたりの全死因死亡率



最も平均余命を延ばすスポーツは？

デンマークで行われた大規模研究 Mayo Clin Proc 2018
運動をしない人とする人の比較を8577人を対象として25年間にわたって行った。

・ スポーツによって延びた平均余命の年数

1. テニス 9.7年
2. バドミントン 6.2年
3. サッカー 4.7年
4. サイクリング 3.7年
5. スイミング 3.4年
6. ジョギング 3.2年
7. ジムでのエクササイズ 1.5年

健康な生活習慣とは？

JAMA Oncology 2016

1. 喫煙をしない。
2. 飲酒習慣がないか適度の飲酒
3. BMIは18.5～27.5(170cmで53-80kg)
4. 激しい運動(無酸素運動)を週に75分以上
中程度の運動(有酸素運動)を週に150分以上

これら4項目をすべて満足することが健康な生活習慣と考えられる。

健康になれる生活習慣とは？

- ・ 運動は必須であり、食事はバランスよく取る必要がある。
- ・ 食事は白米は取り過ぎないこと、野菜、果物を多く取る必要がある。
- ・ 赤い肉類を取り過ぎない。
- ・ タバコは吸わない。アルコールは適量を守る。
- ・ 太りすぎない。やせすぎない。

コロナウイルスとは？

- ・ あらゆる動物に感染するコロナウイルス科のウイルス。
- ・ これまで6種類が存在した。今回のコロナウイルスは7種類目の新種である。
- ・ 5番目がSARS, 6番目がMERSウイルスである。
- ・ 10-15%の風邪の原因とされている。多くの場合、軽症でおさまる。
- ・ 新型コロナウイルスは新たなタイプのウイルスで感染速度や致死率などがわかっていない。

新型コロナウイルスの発生状況

- ・ 2019年12月12日、中国の武漢で最初の感染者が診断された。
- ・ 2020年1月5日、感染者59名うち重症者7名。
- ・ 1月16日、日本で初の感染者。
- ・ 1月20日、習近平国家主席が重要指示。
- ・ 1月23日、武漢を封鎖。571名感染、10名死亡。
- ・ 1月28日、日本政府が感染症法の指定感染症に指定した。

新型コロナウイルス感染の経過

- 2020年2月28日、**北海道が緊急事態宣言**。
- 同日、北海道医療大学は3月から全学生の講義を休講、卒業式、入学式の中止を決定。
- 3月4日、日本の感染者が1000人を超えた。
- 3月24日、WHOがCOVID-19を**パンデミック指定**。
- 3月24日、2020年開催予定の東京オリンピックの延期が決定。
- **4月8日、日本で緊急事態宣言**

- 2021年、3月25日、世界で1億3千万人が感染、275万人が死亡。日本では46万人が感染、9000人が死亡。

新型コロナウイルス感染症の年齢別致死率 中国CDCのデータを改変



新型コロナウイルスの臨床的特徴

- 呼吸器の感染が主体。肺炎を起こしやすい。
- 飛沫感染、接触感染が大半。
- 潜伏期は平均約5日、最長14日程度。
- 遷延する発熱が特徴。咳、筋肉痛、頭痛、味覚、嗅覚障害。
- 重症例は高齢者に多く見られる。
- 重症例は高血圧、糖尿病、心疾患、ぜんそく、透析など合併症を有する人に多く見られる。

新型コロナウイルス感染症の診断

- 臨床的診断
臨床症状：発熱、咳、倦怠感；特異的ではない
胸部写真では診断しにくい。
胸部CTで淡い病変が見られる。
- PCR法
世界的に最も良く行われている。
偽陰性がしばしば見られる。
- 抗体測定法
これからの新型コロナウイルス感染診断の主流になる。
IgG抗体で既感染をチェックできる。中和抗体。

コロナウイルス感染症の予防

- 飛沫感染と接触感染が主体。
- 3密;密閉、密集、密接を避ける。カラオケが最悪。
- 飛沫は2m離れると感染しない。
- 部屋の湿度を上げすぎない。
- 体外へ出ると3時間くらいで死滅する。
- プラスティック表面で3日、痰や糞便で5日、尿中では10日も生存する。
- **手指の消毒、流水による手洗いが重要。**

コロナウイルス感染症の予防

- アルコール消毒は有効: エンベロープウイルスのため確実な効果あり。
- マスクは感染防護にあまり有効ではない。
- 感染者が他人に感染させないために有効。
- 咳エチケットを守る。



基本的な感染予防、健康管理

～「もちこまない」「ひろげない」ための対策～

- ✓ 新型コロナウイルス感染症は、発症する2日前から感染能力があります。
- ✓ 体調の良し悪しによらずマスク、手指衛生の実施が重要です。
- ✓ 健康管理による対策は、「もちこまない」「ひろげない」対策として、現実的で継続可能な対策と考えられます。
- ✓ 本対応の継続によって、公欠者が今後も一定数発生し学習計画に支障がでる可能性はあるが、運用に理解をお願いします。

臨床実習等に関わる対応

- 臨床実習を行う学生、教員を対象として2020年8月より新型コロナウイルス唾液PCR検査を実施した。
- 歯学部の植原講師のグループによる献身的貢献。
約1000例に実施したが、陽性例はなし。
- 臨床実習等に関わる感染対策は、各学部で学習内容が様々であることから、各学部毎に指針を作成する。
- 作成した指針は感染対策委員会で審議承認されてから運用する。

新型コロナウイルス感染の経過

- 2020年、2月28日、北海道が緊急事態宣言。
- 同日、北海道医療大学は3月から全学生の講義を休講、卒業式、入学式の中止を決定。
- 3月24日、WHOがCOVID-19をパンデミック指定。
- 3月24日、2020年開催予定の東京オリンピックの延期が決定。
- 欧米各国で非常事態宣言。米国で39万人が感染。
- 4月8日、日本で緊急事態宣言
- 5月の連休明けより、北海道医療大学はオンライン授業を開始した。
- 医療大学生一人につき、5万円の自宅学修支援金の給付を行った。

新型コロナウイルス感染症への北海道医療大学の取り組み

- オンライン授業を主体にして講義を行った。
- 通学の際、全員がマスクをする。
- 感染を起こしやすい場所は、通学電車内、講義室、食堂である。ここで3密を避ける。
- 唾液飛沫が感染源として重要なので、電車内で会話を避ける。大声を出さない。
- 医療大学学生は感染に注意するだけでなく、自分が感染源になる可能性があることを常に自覚し行動してほしい。

新型コロナウイルスワクチン接種への北海道医療大学の取り組み

- ワクチン職域接種に即手を上げた。
- わが国で最も早く10月21日より学生、教職員とその家族に対してワクチン接種を開始した。
- 打ち手として歯科医師を90人確保できた。
- 医師、歯科医師、看護師、薬剤師など北海道医療大学の保有する人材を駆使することで問題なく9月29日に終了した。
- 学生、教職員を合わせてほぼ90%の摂取率であった。

Health Sciences University of Hokkaido

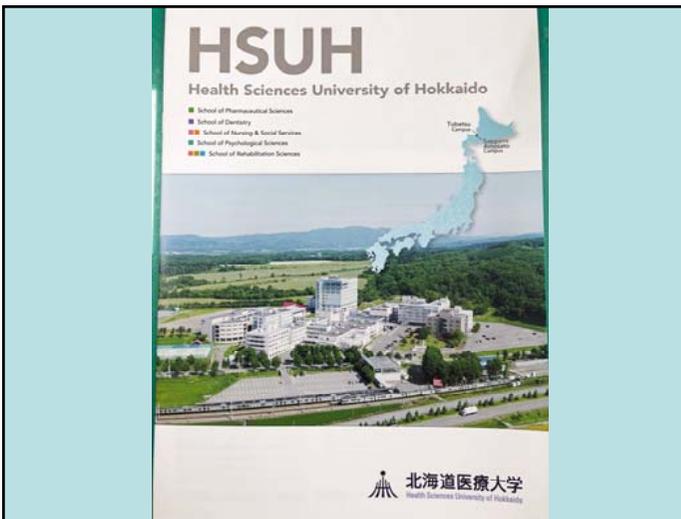
コロナワクチンの職域接種をいち早く実施

医師による問診

北海道医療大学における多職種連携の実践の場であった

看護師や歯科医師による接種

接種後の経過観察



学生に健康を守ることの大切さを教える

- 医療人になるためには健康の重要性をしっかりと認識する必要がある。そうでなければ他人の健康を守ることはできない。
- 学生生活を健康に過ごせるよういくつかのアドバイスが必要。
- バランスの取れた食生活、適度な運動、十分な睡眠が重要。
- 喫煙は絶対に止めよう。



教職員の健康を守るために

- 北海道医療大学の保健センターは教職員の健康を守ります。
- 月曜日から金曜日まで毎日内科の医師が診療しています。
- 水曜日は心の健康についての診療を受けることができます。
- けがや骨折にも対応できます。
- 入院が必要な場合はすぐ対応できます。
- これだけの機能を持った保健センターは北海道医療大学のみです。



レクチャー

当大学の理念・目標・方針に基づく授業
～基本的な確認事項について～

当大学の理念・目標・方針に基づく授業 ～基本的な確認事項について～

リハビリテーション科学部
作業療法学科

鎌田 樹寛

1

建学の理念：「知育・徳育・体育の三位一体による
医療人としての全人格の完成」

教育理念：「生命の尊重と個人の尊厳を基本として、保健と医療と福祉の連携・統合をめざす創造的な教育を推進し、確かな知識・技術と幅広く深い教養を身につけた人間性豊かな専門職業人を育成することによって、地域社会ならびに国際社会に貢献する。」

教育目標

1. 幅広く深い教養と豊かな人間性の涵養
2. 確かな専門の知識および技術の修得
3. 自主性・創造性および協調性の確立
4. 地域社会ならびに国際社会への貢献

行動指針：「**学生中心の教育**」ならびに「**患者中心の医療**」を推進しつつ、「21世紀の新しい健康科学の構築を追究すること」。

2

求められる教員像、教員組織（抜粋）

自主性・創造性に優れ、「**学生中心の教育**」と「**患者中心の医療**」を担う教育・研究能力を有し、地域・国際社会への貢献が可能な人材。

1. 「全学教育科目」と各学部・学科の「専門教育科目」の適切なバランスと連携を図ることが可能な適正な教員数を配置。
2. 専門分野及び関連領域の研究とその研究成果を学生教育や国内外の社会へ還元するために必要な教員を配置。
(女性33%、若手25%、外国人4%、研究補助者6%以上が目標)
3. 学生への修学支援、生活支援、進路支援に関する指導・助言を適切に行うために必要な教員組織を整備。
4. 教員の募集・採用・昇任は、透明性、公平性を担保しつつ、公募制に加え推薦制による候補者選考も可能。
5. 必要な役割分担と責任の所在を明確に定めた組織体制を整備。
6. 教育・研究・社会貢献を常に念頭に置き、質の高い教育と優れた研究成果を生むため、FD活動を組織的かつ継続的に取り組む。

3

北海道医療大学 三方針（抜粋）

学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

保健・医療・福祉の高度化・専門化に対応しうる高い技術と知識、優れた判断力と教養を身につけた学生

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

「保健と医療と福祉の連携・統合」を基本として、確かな知識と技術、深い教養と豊かな人間性を持ち、広く社会に貢献できる専門職業人の養成に向けた教育課程を編成

入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

本学卒業には全学共通基盤の知識・技術・態度が必要となるばかりではなく高度な専門性の修得が要求される。そのため、各学部学科では学位授与の方針の要件をより効果的に達成しうる資質を持った人材を受け入れる

4

本学が特に力を入れる教育成果

- 国家試験受験者の高い合格率
- 保健・医療・福祉領域で（指導的）専門家に求められる資質として
→多職種連携に関する教育の推進・充実

5

各学部国家試験合格率（2021年度）

名称	区分	回	新卒者			
			受験者(名)	合格者(名)	合格率(%)	国公私立合格率(%)
名称	薬剤師	107	133	100	75.2	85.2
	歯科医師	115	56	46	82.1	77.1
	看護師	111	115	114	99.1	96.5
	保健師	108	13	12	92.3	93.0
	社会福祉士	34	37	19	51.4	52.4
	精神保健福祉士	24	8	4	50.0	73.3
	介護福祉士	34	12	12	100.0	72.3
	理学療法士	57	83	80	96.4	88.1
	作業療法士	57	40	39	97.5	88.7
	言語聴覚士	24	49	41	83.7	89.7
	公認心理師	4	12	12	100.0	58.6
歯科衛生士	31	19	18	94.7	95.6	

北海道医療大学における多職種連携教育

薬学部	歯学部	看護福祉学部	心理科学部	リハビリテーション科学部	医療技術学部
多職種連携入門					
		多職種連携論		多職種連携論	チーム医療・コミュニケーション演習 医療リスクマネジメント演習
全学連携地域包括ケア実践演習					
	医薬品の科学			薬理学	薬理学
				解剖学実習	
				歯科学総論	
看護実践学	看護福祉概論		国際福祉経済論	地域包括ケア論	保健医療福祉演習
医療福祉活動演習	医療人間学演習		ソーシャルワーク概論		
地域医療学			地域医療政策論		
	医療行動科学	臨床心理学		臨床心理学	
	リハビリテーション科学概論	リハビリテーション法			
フィジカルアセスメント	その他の隣接医学（臨床検査学）				

※表は一部のみ抜粋

7

授業を行うに当たって

授業準備

問い合わせ先	内容
各学部・学科 教務担当教員	授業資料の印刷、場所 周知（manaba等教育プラットフォーム、 Google ; Classroom）
各学部教務課	講義室の予約、鍵、使い方
	座席表、出席カード、カードリーダー 学生へ連絡（i-portal）

8

教室に備え付けられているもの

- ・黒板、パソコン・スクリーン → 板書授業でもスライド授業でも対応可能
ただし、パソコン、スクリーン、暗幕の操作が操作机にすべてある教室とスクリーン、暗幕のスイッチが異なる場所にある教室がある
- ・OHP、DVDプレーヤー、VGA端子、HDMI端子
→部屋によってあるなしがある
- ・自分のパソコンをつなげることも可能である。
USBメモリを持参する方が問題が少ない
→特にオンライン授業時

* 教室によって装備品が異なります。
各教室について、事前チェックと動作確認をしてください。

9

授業形態と特徴（対面授業）

板書授業

- ・学生はノートを取りながら行うので授業に集中できる
- ・ノートをとるのが遅い学生がいるので、進行が遅くなる
- ・字が汚い、読めない、板書だけで理解できないなど時に苦情が出る
- ・事前に板書計画を立てておくと学生が理解しやすくなる

スライド授業

- ・予定通り授業が進行できる
- ・授業の進行が速くなりがち。学生の理解が追いつきにくい
- ・ハンドアウトを渡す必要がある。渡さないと何も残らない
- ・ハンドアウトを渡すと、ノートをとらず授業に集中しない学生がでる
- ・穴あき（カッコ内埋型）ハンドアウトを配付するなどの工夫が必要である

学生からは、授業のまとめ（確認テスト）が欲しいという意見がある。
その時々ノートの記載、内容理解に精一杯なっている可能性がある。

10

授業形態と特徴（オンライン授業）

（教員と学生の双方向性の確保をお願いします）

<Zoom型授業；オンライン会議システムを利用したライブ授業 >

- ・対面授業に近い形で授業ができる
- ・チャットを利用することで、双方向性が確保されやすい
- ・ネット環境の影響を受けやすく、内容が理解しづらい学生がでる
- ・授業中ネット不具合を理由に後日視聴申請学生がでる

<オンデマンド型授業；スライド、動画などをサーバに置き、e-learningシステムなどにより随時配信する授業方式 >

- ・ネット環境の影響を受けにくい
- ・時間を気にせず、何度も受講が可能である
- ・双方向性の確保を考える必要がある
- ・受講が後回しになって受講していないコマがたまる学生が出る

Zoom授業解説が、大学のGoogle Drive共有フォルダ内にあります。
USBメモリからスライドショー提示にすると動作が重くなるので、
デスクトップにいったんアップすることをお勧めします。

11

遠隔授業の要件

1. 設問解答，添削指導，質疑応答等による十分な指導
2. 学生等の意見の公開の機会

平成13年文部科学省告示第51号第2号規定

https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/07091103.htm

https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/07091103/002.htm

学生等の意見交換の公開の機会の確保

- ・掲示板などを設け、学生が書き込めるようにするなどする。
- ・同時双方向型の授業内で自由な発言時間を設定する

Zoom型授業（注意：Zoomの録画授業はオンデマンド型授業になります）

- ・授業中に1、2を実施し、面接授業に相当する教育効果が担保できればよい。
- ・従来型授業とほぼ同じ授業の進め方で実現可能である。
- ・教員+ 参加学生全員が授業の意見交換ができる時間を設ける。
（従来授業では挙手による質問が随時可能であることに対応）

オンデマンド型

- ・授業終了後すみやかに1、2を実施（毎回の授業実施に併せて）
- ・動画視聴などと設問解答を組合せて行うことで意見交換が可能である。
- ・LMS (Google Classroomなど) などで意見交換ができる場を設ける。

12

授業で気をつけたいポイント

- ・集中して話を聞ける時間は、10～15分。長くても30分間と思います。
5分、10分、15分等と、予め講義内容をモジュール化の準備をする
- ・動（書く、解く、作業する）と静（見る、聞く、考える）を組み合わせる
→質問、確認テスト、動画、新情報など新しさと変化が注意・集中力に有効
- ・脳を適度に活性化させたり、休ましたりする
→雑談や教員自身のエピソードは、寝ている学生もなぜか起きる
- ・物理的な筋・関節ストレッチなどの動作も気分転換（リフレッシュ）として、効果的

13

出欠席（担当教員は注意・関心を払う必要があります）

出席率70%以上。15回授業で5回以上の欠席は失格。
学部、科目によって違いがあります。
→毎週欠席者報告、あるいは3回以上で報告、定期試験前に報告などがある。
いずれの場合も、必ず**出欠席確認等の管理**を行う必要がある。
学生から欠席回数について、疑義申し立てられる場合もある。

対面講義出欠確認方法：点呼、カードリーダー、出席カード、座席表、
確認テスト、リアクションペーパー

オンライン授業での出欠席確認法

Google Formによる確認テストを利用する方法が多いようです。
Google Drive内にGoogle Formの様式があります。

Google Formのアクセス方法

- ・作成したGoogle FormのURLをチャットに貼付、全員に送信。
- ・作成したGoogle FormのURLからQRコードを作成し、スライドに提示。
QRコード作成の無料サイト例：<<https://www.cman.jp/QRcode/>>

14

Google DriveとGoogle Form

The image shows two screenshots. The top one is the Google login page with a red circle around the 'ログイン' button and an arrow pointing to the 'メールアドレス' field. The bottom one is the '北海道医療大学 共通ログインサイト' with a red circle around the 'ログイン' button and an arrow pointing to the 'ID' and 'パスワード' fields. Annotations in blue text point to these fields.

北海道医療大学のメールアドレス

北海道医療大学のIDとパスワードを入力

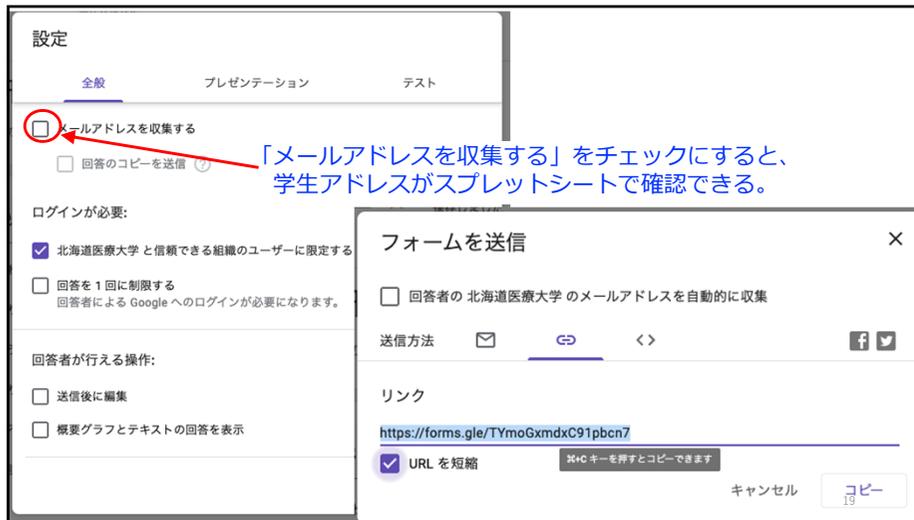
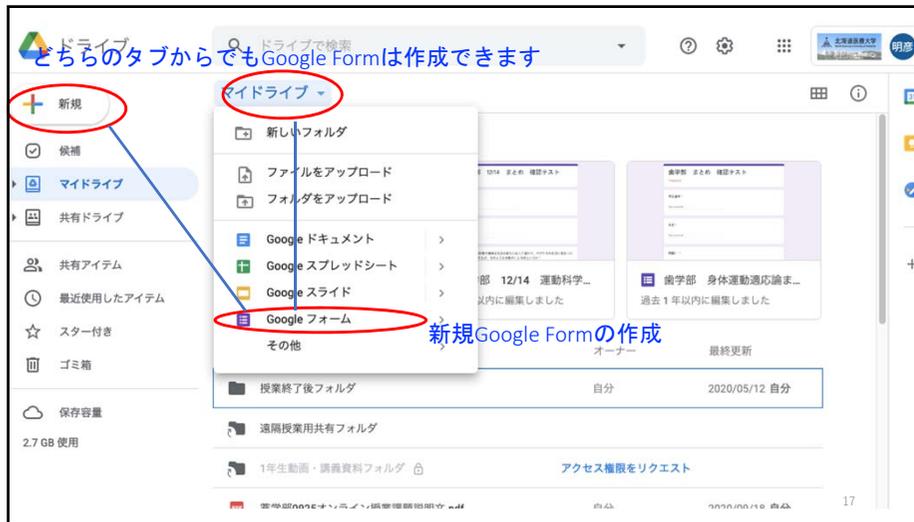
15

北海道医療大学の Google Driveにアクセス

The image shows the Google Drive interface. A red circle highlights the 'ドライブ' icon in the top right corner, with an arrow pointing to the 'ドライブ' icon in the sidebar. Another red circle highlights the 'ドライブ' icon in the sidebar, with an arrow pointing to the 'ドライブ' icon in the top right corner. Annotations in blue text are present.

Google Drive内の様子

16



FD研修会確認テスト

質問 回答

0件の回答

スプレッドシートの作成

スプレッドシートの様子

FD研修会確認テスト (回答)

スプレッドシートの様子

タイムスタンプ

タイムスタンプ 学生番号 氏名 私の説明はわかりやすかったですか

- ・スプレッドシートは、学生が入力した時間毎に一覧表示。
- ・「シートを並び替え」を実施すれば、出欠確認に便利です。

スプレッドシートの様子

タイムスタンプ メールアドレス 学籍番号 名前 本日の授業はどうでしたか

	A	B	C	D	E
1	タイムスタンプ	メールアドレス	学籍番号	名前	本日の授業はどうでしたか
2	2020/04/24 10:29:06	aaaaa@hoku-iryu-u.ac.jp	10A002	山田	5
3	2020/04/24 10:29:24	zzzzz@hoku-iryu-u.ac.jp	10A004	鈴木	4
4	2020/04/24 10:29:39	xxxxx@hoku-iryu-u.ac.jp	10A005	高橋	1
5	2020/04/24 10:30:00	ccccc@hoku-iryu-u.ac.jp	10A001	田中	5
6	2020/04/24 10:30:21	vvvvv@hoku-iryu-u.ac.jp	10A009	佐々木	3
7	2020/04/24 10:30:45	bbbbb@hoku-iryu-u.ac.jp	10A008	小林	4
8	2020/04/24 10:31:03	sssss@hoku-iryu-u.ac.jp	10A007	斉藤	2
9	2020/04/24 10:31:34	ddddd@hoku-iryu-u.ac.jp	10A012	加藤	4
10	2020/04/24 10:31:50	ggggg@hoku-iryu-u.ac.jp	10A015	佐藤	3
11	2020/04/24 10:32:47	hhhhh@hoku-iryu-u.ac.jp	10A018	伊藤	5
12	2020/04/24 10:33:04	nnnnn@hoku-iryu-u.ac.jp	10A013	青木	5

成績評価 (学生側から疑義申し立てができます)

評価方法：筆記試験 (小テスト、定期テスト)、レポート、授業態度

評価基準 (各評価法の割合) のシラバス明示

論述問題やレポート採点での客観的評価手法

- ・ルーブリック方法
- ・チェックシート方法

	C	B	A	S
1. 資料	資料が未配布 あってもプレゼン内容の 理解に役立っていない	資料が適切でない、分か り難い内容である 誤字脱字が多い	資料が分かり易い しかし内容が曖昧、図が 足りない、文字数が多い 等、魅力に乏しい	パワーポイント、OHP、 配布資料を適切に使い分 け、非常に分かり易く、 工夫が見られる
2. 発表内容	事実や事例の詳細が無い、 または不正確である 事実や事例が分析、結論 に結びついていない	事実や事例の詳細に誤り や抜けがある 事実や事例が分析、結論 に結びついていないが努力 が見られる	事実や事例が詳細かつ正 確である 事実や事例が分析、結論 に結び付けられているが、 説得力に欠ける	事実や事例が詳細かつ正 確である 事実や事例が分析、結論 に分かり易く結び付けら れており、発展的な意見 が述べられている
3. 発表構成	導入、展開、結論の順番 になっていない まとまりがない	導入、展開、結論の順番 に一応なっているが、明 確でない まとまりはないが努力が 見られる	導入、展開、結論の順番 にできている。 それぞれの内容がまと まっているが冗長である	導入、展開、結論の順番 にできている、つながり もスムーズである それぞれの内容が良くま とまっており、分かり易 い
4. 発表技術	声小さい、早口、不明 瞭な話し方で聞き取りに くい ジェスチャー、アイコン タクトが不十分で魅力に 乏しい	聞き取ることはできるが、 単調であったり、聞きづ らい等の欠点がある ジェスチャー、アイコン タクトを交える努力が見 られた	声量・話し方は聞き取り やすかった ジェスチャー、アイコン タクトを要所で使い、盛 きさなかった	適度な声量・話し方で非 常に聞き取りやすい 適度なジェスチャー、ア イコンタクトで表情豊か でユーモアも交え魅力的 であった

注意事項

感染対策：使用した機器消毒、授業時の換気、3密の回避を徹底する。

著作権法への抵触

<条文>（改正著作権法第35条運用指針）

学校その他の教育機関（営利を目的として設置されているものを除く。）において教育を担任する者及び授業を受ける者は、その授業の過程における利用に供することを目的とする場合には、その必要と認められる限度において、公表された著作物を複製し、若しくは公衆送信（自動公衆送信の場合にあつては、送信可能化を含む。以下この条において同じ。）を行い、又は公表された著作物であつて公衆送信されるものを受信装置を用いて公に伝達することができる。ただし、当該著作物の種類及び用途並びに当該複製の部数及び当該複製、公衆送信又は伝達の態様に照らし著作権者の利益を不当に害することとなる場合は、この限りでない。

<https://sartras.or.jp/wp-content/uploads/unyoshishin2020.pdf>₂₅

著作権法に関する解説

- ・ 教員が授業に参加する学生のみ閲覧可能な場合は、教育的配慮により、授業資料への複製（転載）、配信が可能である
- ・ 必要と認められる限度は、クラス単位、授業単位である
- ・ 授業に用いる場合でも、受講生以外がオンライン上で閲覧できる状況（URLの流出を含む）は著作権法に抵触する
- ・ 著作権法に抵触する場合は、著作権者に使用に関する許諾を得なければならない
- ・ 授業資料の2次使用（公衆配信）は著作権法に抵触する（学生などがSNSにアップしないよう授業資料に2次使用禁止を明記）

*** 本授業資料は当該学生に対する教育資料としてのみ使用するものであり、使用目的外の利用、第三者の転載・転用、公開、移譲を固く禁じます。**

26

①「複製」

手書き、キーボード入力、印刷、写真、複写、録音、録画その他の方法により、既存の著作物の一部又は全部を有形的に複製することをいいます（著作権法第2条1項15号。著作物だけでなく、実演、レコード、放送・有線放送の利用についても同様です）。

該当する例

- ・ 黒板への文学作品の板書
- ・ ノートへの文学作品の書き込み
- ・ 画用紙への絵画の模写
- ・ 紙粘土による彫刻の模造
- ・ コピー機を用いて紙に印刷された著作物を別の紙へコピー
- ・ コピー機を用いて紙に印刷された著作物をスキャンして変換したPDFファイルの記録メディアへの保存
- ・ キーボード等を用いて著作物を入力したファイルのパソコンやスマホへの保存
- ・ パソコン等に保存された著作物のファイルのUSBメモリへの保存
- ・ 著作物のファイルのサーバーへのデータによる蓄積（バックアップも含む）
- ・ テレビ番組のハードディスクへの録画

27

改正著作権法第35条

授業の履修者以外がオンライン上で著作物を見られる状況はダメ！

URLが流出されたり、履修者以外に送信されないために、
どう設定すればよいか？

Google Classroomやmanaba等で履修者のみアクセスできるように設定すれば良い。

- ・ Google の場合、Classroomを介してDriveを利用すれば、Driveの著作権用の設定は不要である。

詳しくは、情報推進課や各学部、学科教務担当教員に問い合わせてください。

28

ご清聴ありがとうございました



参考資料（リンクまとめ）

（リンクの表示は、マウス URL に乗せて、Ctrl+左クリックです）

本学ホームページ（下記のリンクはすべてこちらからのリンクです）

<http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/>

本学の基本方針

<http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/about/philosophy/basic-policy>

教育理念・目的・目標

<http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/about/philosophy/rinen/>

行動指針

<http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/about/philosophy/guideline/>

大学の三方針（ディプロマ、カリキュラム、アドミッションの各ポリシー）

<http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/about/philosophy/policy/>

シラバス（学部別にサイトが用意されています）

<http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/for/student/syllabus/>

学則

<http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/assets/pdf/about/summary/gakusoku/21gakusoku.pdf>

学生便覧

<http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/for/student/gakuseibinran/>

学校法人東日本学園 中期計画

<http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/about/summary/med-term>

入試情報 WEB サイト

<https://manavi.hoku-iryo-u.ac.jp/>

オープンキャンパス

<https://sites.google.com/hoku-iryo-u.ac.jp/2021opencampus/>

上記以外についても、大学ホームページの各コンテンツからご覧ください。

ワークショップ (プロダクト)

北海道医療大学

University Identity

Group A: Team 外国人
 Syed Taufiqul Islam
 Enrique Ezra Zuniga Heredia
 Durga Paudel

Topics:

- Education related
- Globalization
- Health care related
- Economy related

Education related

- ❖ City life affects the psychology of students. The unique location of our university is **quiet** and **peaceful** which allows students to **concentrate** on **education**.
- ❖ The **co-ordination** between the different departments and schools in our university is **exemplary** as compared to other universities. It may be because all the schools are focused in health care.
- ❖ Students with low grade are focused more for tutitions in our university. It is a good idea to uplift them.

Globalization

- ❖ Teachers approach to international student is really helpful making it an international friendly university in Japan.
- ❖ Language barrier to students is preventing them from being globalized.
Recommendation: More focus on language would be a good idea.
- ❖ We have seen some undergraduate students doing really good in international competitions in the past year.
Recommendation: Integrating research into undergraduate courses and making their research to present in international conferences and competition would be better for students future. We would like to recommend to promote it more.
- ❖ Organizing virtual conferences even after COVID-19 pandemic would be an economical and easy way to share the education and research.

Health care related

- ❖ People around the university are really benefited for **health care**. It is good to serve the **people of rural areas** who would otherwise be deprived of easy access to healthcare.



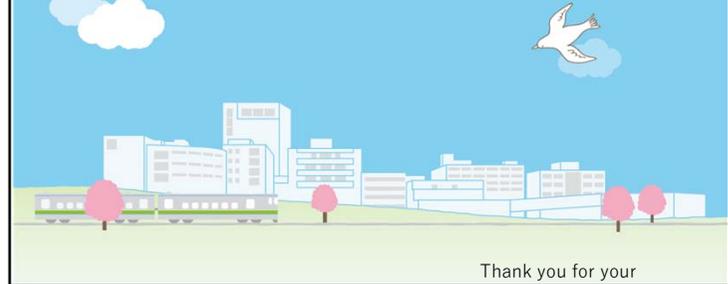
Economy related

- ❖ Being outside the city, the University helps to **develop** Tobetsu **economically** and **attracting population**.



Conclusion

Health Sciences University of Hokkaido is centered towards better education with **holistic well-being** and **care** to the community in *mind*.



Thank you for your

Bグループ

本学UIに即した教育法を提案

(河治、久原、谷本、中谷、三浦)

本学の良さ、特長

- 医療系総合大学であること
- 全員が国家資格を取得する目的となっていること
- 地域とのつながりがあること

学生中心の教育

- 入学後の学習意欲の低下、受験後の気の緩みを如何に正すか？
→学習についていけない学生への支援
→モチベーションの向上

学習についていけない学生への支援

• 解決策

魅力のある講義：出席したくなる講義

薬学部の場合：1、2年で単位は取っておくべきだとアドバイスする

→3、4年時に講義についていけなくなり留年

→悪循環（留年を繰り返すなど・・・）

※出席率：出席率と国家試験の合格率の間に関連がある

→成績が上がっている（生活習慣の見直しなどに因果関係）

モチベーション向上

• 問題点：1、2年は基礎科目なので興味がわかないのかも・・・

• 解決策

- 臨床に直結する話を講義に盛り込むより実践的内容を盛り込む
- 歯学部では1、2年時に病院見学を行い成果を上げている
- OBの先生の話聞く機会を設けるとモチベーションを高められるのでは？

- 自分から考えて勉強する = アクティブラーニング 学生が考える力を養う

本学のユニバーシティ・アイデンティティ（UI）に即した教育法

Cグループ

宮本、柳瀬、山下、吉田

STEP 1, 2

本学の UI とは。。。

- 医療、福祉、保健などが充実
- 地域との連携、医療と教育
- 学生へのフォローアップ
- 国家試験合格率が高い。
- 多職種連携を学べる点
- コロナウイルスワクチン接種等の社会貢献
- 教員に対しての健康意識の高さ、啓発、医療者からの教育が充実している。
- 地域性、学生が当別町をフィールドに活動している。
- 雪を利用したレクリエーション
- サークル、部活等
- 学校祭 主体性があると地域の人々に良い印象
- 駅から雨に濡れずに来られる
- 建物が入り組んでいる

STEP 3

専門性と地域貢献

社会貢献

学生支援

教育的サポート

学生の活動

アクティビティ

文化

STEP 4

◇最終的な結論を一言で表現する

様々な専門的な観点からの地域や社会への貢献

～学業や地域活動で学生たちが学びを得るだけでなく、地域住民に還元できる

仕組みづくり～

◇なぜその方法を選んだのか

- 医療、福祉、保健などが充実している大学の強みを生かす
- 地域との連携、医療と教育
- 人間性を高める
- 授業へのやる気、学習意欲向上

◇具体的なアイデアの内容

- 学業活動

理想の地域実習

他学部が集まりチームを作る

企業、農協、漁協などを対象としてもよい

企業は、ボランティアとして、協力の依頼は学生に行ってもら

教員が働いている、関連する場での実習、当別町と連携

地域で暮らす人に対する健康管理

何を還元できるか？

高齢者に対して若者との繋がり、ふれあいの機会

地域の人に対して健康指導（ブラッシング、虫歯の知識等）

学生が職場に来ることで新鮮さがある

- 医療、福祉、保健などが充実
 - 地域との連携、医療と教育
- 他学部同士の横のつながりがあること、それが可能な授業、実習などの仕掛け

地域での実習

課題

- ・学生が多職種連携実習で話せない、人見知り。。。
 - みんなで話せるような環境づくりが必要。
 - オンラインの難しさに対する新たな対策が必要。

◇アイデアの実行による結果

- 人間性を高める
 - 専門職以外の職業に視野を広げる。判断力、対応能力が得られる
- 授業へのやる気、学習意欲向上
 - 実習を行うことで基礎の授業をする意義を理解する

Step5

学業や地域活動で学生たちが学びを得るだけでなく、地域住民に還元できる仕組みづくりが必要

ワークショップ D GROUP

2022.04.04

表山知里、桑原ゆみ、佐藤幸平、只石朋仁、土田大

ユニバーシティアイデンティティー (UI)とは

自主性を重んじた育成、
教育面、社会面以外のUI(健康増進に対する取り組み等)
親として子供に勧めたい大学
卒後に地域社会・国際社会に貢献できる
“医療”のみではない多職種連携ができる。

5W1H

1. 学生が
2. 学内または地域
3. 学生主体となって
4. 他学部生または地域住民に対して
5. 学習内容に応じて
6. 学生が自ら考えることで行動する力を養うため

“学生を中心とした”教育手法案

自主性を重んじた教育を行うために

- ・多学部による“ワークショップ、ディベート”を定期的に行う
→ 学年が進行するにつれて自分自身で成長を感じられる。
→ **実効性高い**

↓

- ・各々が学んだ職種について(看護学部生であれば、「看護師とは」)を他学部生へ発信
→ 他学部生のことを知ることができるとともに、自身の自覚向上にもつながる
→ **実効性高い**

↓

- ・学科単位ではなく、多学部チームによるプロジェクトを学生自身で企画し、それに対する支援プログラムを組んでいく。(学生企画の物品販売など?)
→ 実践的な教育手法により、自主性や帰属意識の向上を狙う
→ **ハードルは高いが、効果も高いか、父母の安心感も得られる?**

結論

教員は応答的な立場をとり、多学部が連携し、学生主体となって課題解決する場を提供することにより、学生の自主性が高まり、多職種連携が
体現できる。

- ・ 仲間意識の向上により、休学者や退学者の減少が期待できる
 - ・ 親からの入学を勧められる(2世、3世の増加)
 - ・ 入学後の学習意欲の低下を防ぐ

アンケート

2022(令和4)年度 全学FD研修(基本編)アンケート結果

開催日時:2022(令和4)年4月4日(月) 10:00~16:00

開催方法:Zoom Meeting による開催

参加対象:2021(令和3年)4月2日以降に採用及び2022(令和4年)4月1日付採用の専任教員

参加人数:17名

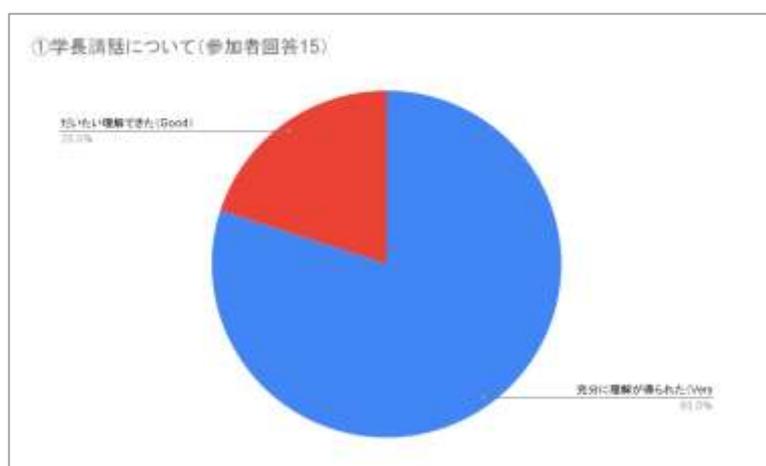
(薬学部1名、歯学部7名、看護福祉学部4名、心理科学部1名、リハビリテーション科学部3名、先端研究推進センター1名)

アンケートは GoogleForm により実施。

参加対象者の回答率は88.2%(17人中15人)。

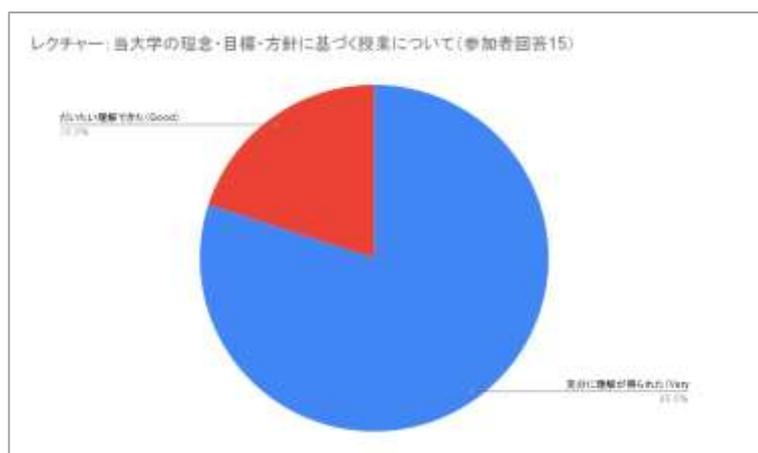
1. 今回の新任教員研修における次のテーマについて、習得度を自己評価してください。

①学長講話について



十分に理解が得られた	12
だいたい理解できた	3

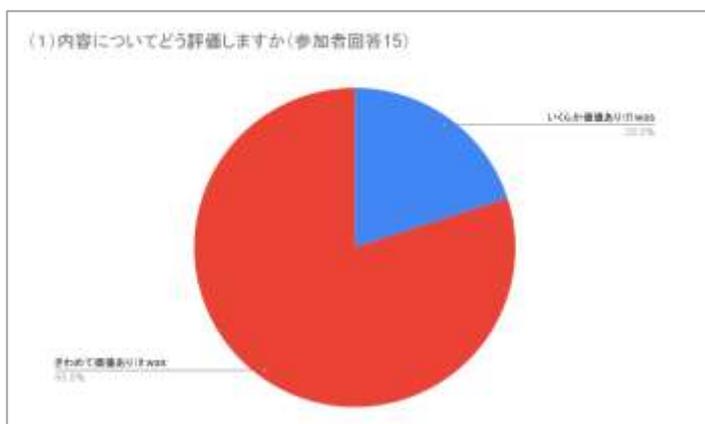
②レクチャー:当大学の理念・目標・方針に基づく授業について



十分に理解が得られた	12
だいたい理解できた	3

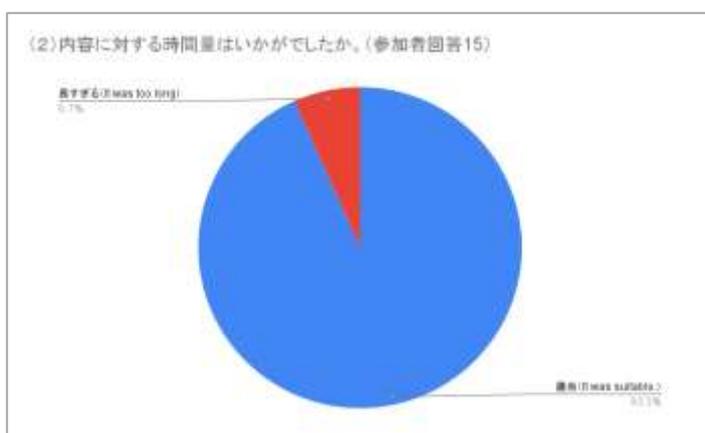
2.ワークショップについて評価してください。

(1)内容についてどう評価しますか。



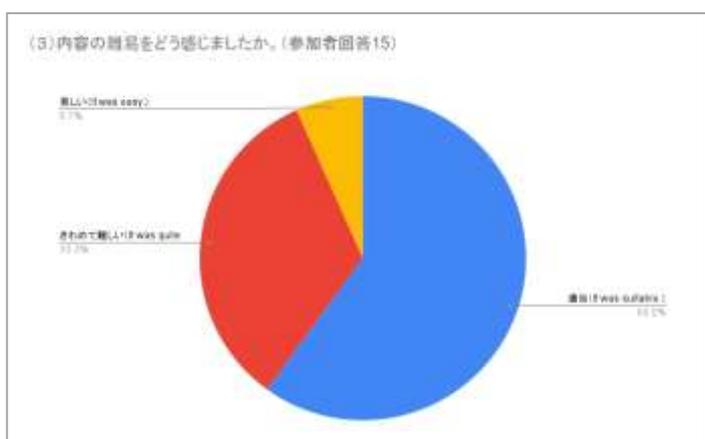
きわめて価値あり	12
いっくら価値あり	3

(2)内容に対する時間量はいかがでしたか。



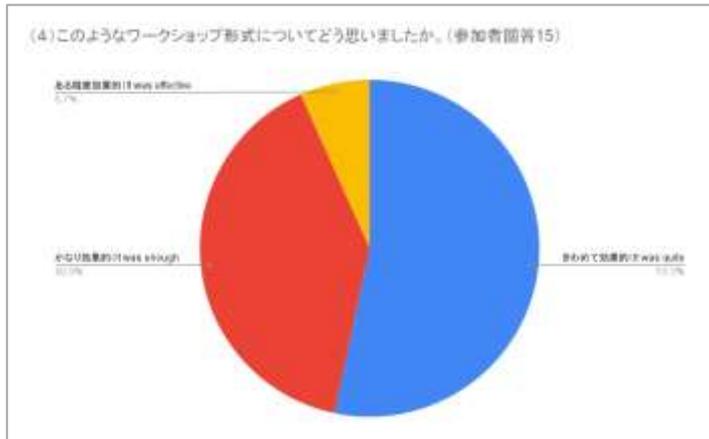
適当	14
長すぎる	1

(3)内容の難易をどう感じましたか



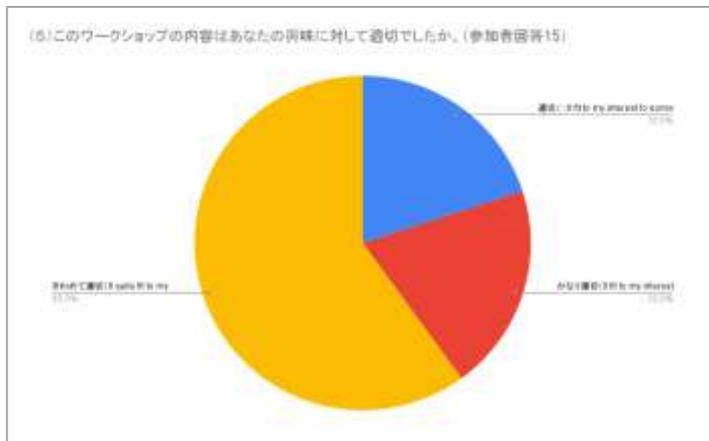
適当	9
きわめて難しい	5
易しい	1

(4)このようなワークショップ形式についてどう思いましたか。



きわめて効果的	8
かなり効果的	6
ある程度効果的	1

(5)このワークショップの内容はあなたの興味に対して適切でしたか。



きわめて適切	9
かなり適切	3
適切	3

3.今回のワークショップ全体にわたり、とても良かったと思われる点は。

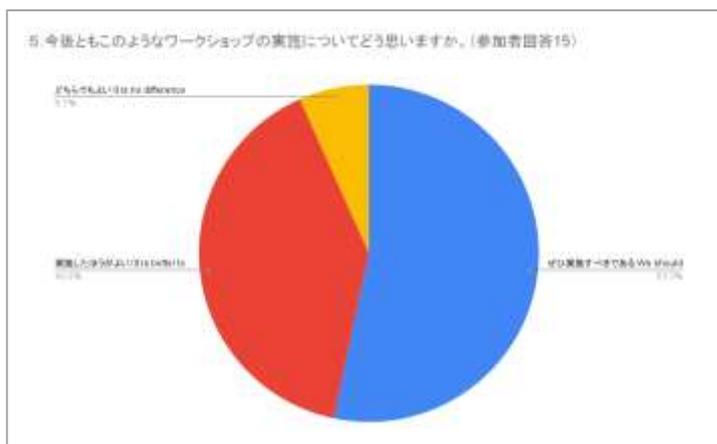
- ・色々な人の意見を聞くことができました。
- ・We could generate new ideas for better education to students.
- ・UIについて考える機会が得られた。
- ・ディスカッションが良かった。
- ・異なる学科の教員とのディスカッションができた点。
- ・他学部の教員を知れる、大学の強みと弱みを考える機会となった。
- ・他学部の状況を理解する機会があった点。
- ・More contact with new staff and Knowledge about University Identity
- ・ファシリテーターの先生の適切なサポート。
- ・他学部の先生方と意見交換ができた点。
- ・This training helped me to feel a connection and responsibilities towards university
- ・他学部の先生方と交流する機会が持てたこと。
- ・普段お話をする機会のない他学部の先生と交流できたことがとてもよかったです。
- ・他学部の先生と交流できたこと、授業内容を考え直す機会を機会を得られたこと。

- ・ワークショップとしてディスカッションすることにより、UI という難解かつ大きな概念への理解が深まった。多学部の教員の意見を聞くことのできる機会は貴重。
- ・他学部の先生と話すことができたこと。
- ・日常的にあまり深く考える機会の少ない問題を掘り下げることができました。また、異なる学科の視点を知ることができたことも大変ためになりました。

4. 今回のワークショップ全体にわたり、良くなかったと思われる点(改善点)

- ・事前知識の不足。
- ・I see no negative side. Everything was good.
- ・特になし。
- ・少しワークショップが長いように思います。
- ・テーマが少し難題(入職間もない者にとっては)。
- ・時々議論のテーマが脱線してしまうことがあったので、ファシリテーターとしてもう少しリードするべきでした。
- ・グループ分けでの時間ロス。
- ・ZOOM ミーティングではなく実際に集まれるといいかと思う。
- ・特に見当たりませんでした。
- ・自分のグループは地域との連携や、当別町への貢献などについて話し合ったが、テーマが多すぎて、まとまりが悪かった。
- ・WEB でのやり取りであったため、ファイルの交換などが少し不便だった。
- ・可能であれば zoom ではない方が話し合いは深まると思う。
- ・時間管理やテーマのズレなど、もう少し助言をいただけたら発表までに余裕ができたかもしれないと思いました。
- ・テーマが非常に大きかったので、具体的に課題を定義するまでに大幅な時間を取られてしまいました。リーダーを務めていただいた中谷先生に深く感謝します。

5. 今後ともこのようなワークショップの実施についてどう思いますか。



ぜひ実施すべきである	8
実施したほうがよい	6
どちらでもよい	1

6.このワークショップの成果に関連して、今後1年の間に実施したいと考えていることを箇条書きにしてください。

- ・他学部との連携。
- ・Integrate research into undergraduate course
- ・講義に臨床経験を入れる。
- ・地域と密着した授業づくりをこれから考えていきたいと思いました。
- ・学生にとって魅力的な学習を模索するとともに、本学だからこそ学べることを学生に伝えられるようにしたい。
- ・教育研究、学生間ピアサポート。
- ・学生の学習習熟度を高めるために、将来像をイメージしやすい授業を提供していく
- ・Globalization, Student-centered education, Language develop
- ・学生さんに学習内容をアプトプットする機会を設けること
- ・本学の理念、三方針を基盤として学生と接していきたい
- ・Will be happy to be able to help our university at both research and globalization
- ・もっと他学部の先生方と交流したい。学生たちのモチベーションを上げたい！
- ・自身が行ってきた多職種連携の体験を学生にお話したい。
- ・国家試験問題の解答につながる魅力的なコンテンツの作成。
- ・自分の目指す教育について具体化する。
- ・学生が興味を持てるような実習指導や教育。
- ・B 班のテーマとなった学生のモチベーション向上について対応策を練る。出席率低下のタイミングの把握、低成績・低出席率の学生の施設利用状況の確認、施設の認知度、利用度の把握など。

7.全体を通して、今回の新任教員研修に対するご意見を記入してください。

- ・有難うございました。
- ・It was very interactive.
- ・真面目にやりました。
- ・北海道医療大学についてよく知る機会に繋がって良かった。
- ・異なる学科の教員の方々の考えを知ることが出来たのが良かった。
- ・大変有意義な時間でした。ありがとうございました。
- ・様々な経歴をお持ちの先生の方のディスカッションだったので、大変勉強になりました。
- ・It was good experience
- ・午前中の講義と午後のワークショップの内容がかみ合っており、また今後の教育活動に活用できないようでした。ありがとうございました。
- ・とても勉強になりました
- ・It was very much helpful and effective
- ・zoom ではなく、対面でやりたかったです。このコロナ禍から早く抜け出せることを祈っています。本日はどうも・ありがとうございました。
- ・UI について考えをまとめるのが難しかったですが、非常に有意義な時間を過ごせたと思います。ありがとうございました。
- ・学生中心の講義とは何かを考え直すよい機会となりました。
- ・内容は大変難しいが、今後 UI 等意識しながら業務にあたる上で必要な機会である。
- ・教育に限らず、大学の細かなルールなども教えていただけると助かります。
- ・大学の方針、問題意識を理解するととてもいい機会をいただきました。今後学生と接する中で常に意識していきたいと思えます。

以上

F D 委員 感想

令和4年4月4日に、「ユニバーシティ・アイデンティティを考える」というテーマで、令和4年度初任者FD研修会がオンライン開催された。

筆者はスモールグループ・ディスカッションのファシリテーターとして、外国人グループの議論に参加した。外国人グループの先生方は、いずれも海外から本学の大学院に入学して学位を得て、この度、本学の教員として採用された方々である。

議論の中で興味を引いたのは、「本学は日本の他の大学と比べて、海外からの入学に対して最も受け入れ体制が整っている。」という指摘と、同時に、「入学後に、日本人の学生や教員と交流の機会が少ない。」という印象を持たれていることであった。そして、後者の現状の改善のために、「英語のセミナーなどで国際交流の機会を増やしてはどうか。」という提案をされていた。

本学は少子化に伴って、入学定員の確保に苦勞しており、その方策の一環として、海外からの受験生を積極的に受け入れている。そして今回のコロナ禍のために、海外受験生のためのオンライン受験システムを構築したが、それが優れたシステムとして、海外で評価されていると聞く。ところが、外国人学生の入学後のサポート体制は十分なのであろうか？ 今後、対応すべき課題であると強く感じた。

(薬学部 泉 剛)

BグループのワークショップにFTとして参加した。40代と思われる先生と20代の若い先生4名の計5名によるグループ討議となった。年長の先生が、穏やかな語り口で議論を終始リードする形で進行した。本学の3方針を確認し合いながら議論が展開され、時々本論とは外れる場面もあったが、議論が深く掘り下げられるため興味深く聞き入ってしまった。特に、「学生を中心とした教育」について多くの時間が費やされ、それは「学生が自主的に勉強するように働きかける教育」と結論付けた。例えば、①本学が誇る図書館利用の有益性やその認知度を上げるための取り組み、②学生自ら考えさせるには、これまで以上に時間を掛けた授業準備の必要性、③他学にはない当別町が協力して行う地域医療授業の推進、④基礎系の講義にも将来を見据えた臨床現場をイメージできる授業にする努力の必要性、などが列挙された。

これらのことは、学生の勉学に対するモチベーションを大いに高める手段であり、実現可能と考えられた。さらに、本学は医療系総合大学として、各学部が国家試験合格という一つの共通した目標に向かって勉学に励む点が魅力的であり、この点をもう少しアピールすべきという意見が印象的であった。

(薬学部 小島 弘幸)

今回は新任教員を対象とした全学FD研修<基本編>であり、浅香学長からの講話の後に行うレクチャーのテーマは「当大学の理念・目標・方針に基づく授業～基本的な確認事項について～」であった。内容は、対面授業ならびにオンライン授業での教育効果を高めるポイントから著作権に対する配慮にまでおよぶもので、新任教員にとってより実用的なテーマであったと考える。

午後のグループワークでは、Cグループの討議にファシリテーターとして参加した。

Cグループは役割分担が素晴らしく、討議時間内に発言が途切れることがなく、とても濃厚な議論が交わされていた。できあがったプロダクトも学部・学科横断的なものとなり、本ワークショップの意図が十分に反映されていた。

今回のCグループのようなWSに慣れている参加者が適切に配置されていると有意義なグループワークになることを再認識させられた。

(歯学部 會田 英紀)

4/4に行われた全学FD研修「基本編」にFD委員として参加しました。当日は午後の部の全体進行と、グループワークでのファシリテーターを担当しましたが、改めて本学の特徴や強みを再

認識する時間となりました。

ワークショップのテーマである「本学のユニバーシティ・アイデンティティ(UI)に即した教育法」のディスカッションの中では、様々な議論がなされ、日頃、授業はしているものの、日々の忙しさにかまけて、あまり考えることのないUIについて、再認識できた有意義な時間となりました。

今後の自分の担当授業の組み立て方や内容について、ヒントをもらえた面もあり、他学部の先生方との議論を通じて交流できた貴重な研修会となりました。

(心理科学部 今井 常晶)

2022年度FD研修会〈基本編〉へ参加させていただきまして、ありがとうございました。当日は講義のため、午前中は欠席となり申し訳ありませんでした。

午後からのワークショップではグループBへのファシリテーターとして参加させていただきました。グループに参加されている先生方は、学長の講話を受けて本学のユニバーシティ・アイデンティティを検討なさっていました。時として討論の内容が、参加されている先生方の所属されている学部の特徴に影響されてしまうので、どうしても偏った意見になってしまうことがありましたが、活発な意見交換ができたのではないかと思います。

オンラインでの研修会開催は、資料の視認性が高く、理解に大変役立つと思います。今後も引き続きオンラインでの開催を希望します。

(心理科学部 百々 尚美)

今回のFD研修会(基本編)では「学生を中心とした教育をすすめるために」—ユニバーシティ・アイデンティティを考える—テーマの下に、FD委員(午前は、レクチャー;「当大学の理念・目標・方針に基づく授業～基本的な確認事項について」の担当者、午後は、グループ・ワークセッションファシリテーター)として、参加させていただきました。

午前のレクチャーに関しては、前年度ご担当の山口先生作成スライド内容を踏まえて、私の経験値を含めたものに加筆・修正させていただきました。3/28の委員会で少し確認された“本質的な教育論”については、持ち時間の関係で深い言及には至りませんでした。教員としては興味・関心を持たなければならないテーマであり、今後とも引き続き意識しなければならない内容と思っています。

午後からのグループ・ワークセッションでは、程よい緊張感やリラックス感を交えた時間構成であり、事前に作成された“討論が導かれるためのスライド”に沿った流れが上手く生じ、メンバー自体のチームワークや主体性が表出され、偏りがない発言・表出(役割)から、しっかり中身を持つ内容が展開された印象です。討論としてのまとめ段階に、「教員の立場からの言葉を用いること」とするアドバイスは、ファシリテーター役となったのではと感じています。

いずれにせよ、当研修会ではとても充実した時間を共有できたことに、感謝いたします。

(リハビリテーション科学部 鎌田 樹寛)

2022年4月4日(月)のFD研修に午前のみでしたが、参加しました。新任教員17名、ファシリテーター約13名の参加でした。内容はよく吟味されていて、研修の趣旨、流れ、目標など、わかりやすく説明していただきました。学長の講話もわかりやすく、特に日本では私立の医療系大学が他国に比べて非常に多い点、北海道の私立大学の中でも、本学への補助金が多いことなど、医療大学の置かれている立ち位置がよくわかる、有益なものでした。

また鎌田先生のレクチャーも本学の理念や目標などの基本的な情報、あるいは各学部の国家試験の合格率などの実情が確認でき、さらには著作権など、普段表には出てこないものの、常に意識して遵守すべき事項が説明され、非常に有益でした。ありがとうございました。

次回は、午後も参加できればと思っております。

(リハビリテーション科学部 中川 賀嗣)

本日2022年度FD研修会基礎編に委員として参加した。ほぼ毎回参加しているが、やはり今回も興味を持って聞き入ってしまったのは浅香学長の講演であった。ネタは昨年とほとんど一緒に、運動と健康長生きの関係と武漢ウイルス関連の話題であった。

昨年拝聴してから毎朝講義棟の10Fまで5往復しながら、エレベーターホールの窓を開けている。このウイルス予防にはどうやら飛沫よりも飛沫核、つまりエアロゾル対策が需要であるみたいだ。それ故、換気が一番である。学食から歯学部に向ける回廊の窓もしっかり隙間を開けて換気を確保している。

この1年間、本学でクラスター感染発生してないのは、小生の日々の小さな換気のおかげかもしれない。

(医療技術学部 藏満 保宏)

本学の特徴として、例年のFD同様に、多学部を有すること、地方に位置することがあげられた。多職種連携が可能であることがあげられた一方で、学部間で共同して学修する機会がない点があげられた。

各学部のカリキュラムの違いが大きいと、学部間共同の学修機会(講義、演習、実習)を儲けることは非現実的であるが、興味深い提案であった。地理的な条件については、地方であるがゆえ地元住民との距離が近く、地元と大学の距離感が良い旨があげられていた。

学修効果は、学生の学修意欲に依存するが、学修意欲の向上については決め手が無いこともあらためて感じられた。

(医療技術学部 坊垣暁之)

令和4年度全学FD研修(基本編)は、「学生を中心とした教育をすすめるために」をメインテーマに、サブテーマを「ユニバーシティ・アイデンティティを考える」として、午前には学長による講話と鎌田先生によるレクチャー、午後はワークショップが行われた。

ワークショップでは、ファシリテーターとして参加しましたがその役割をきちんと果たしていたか?というところかなり自分では疑問が残るものとなったが、結果的には自分にとってもグループワークの進め方など参考になる点が多かったため、意義のあるものであったと思う。

グループのディスカッションは、教育経験のある先生を中心として途切れることなく進められ、「マインドマップ」を使用して話を取りまとめるなど、コロナ禍によりオンラインでの話し合いが昨年よりも慣れているように感じた。

話し合いの時間が2時間ほどで十分な話し合いが行われる前にまとめの作業に入らなければならなかったため、次回のFD研修では、時間配分についてもう少し検討してもよいかと思った。

(全学教育推進センター 近藤 朋子)

今回はガイダンスもあり、全日の参加が叶わなかった。午後からの参加となったが、本研修の目玉でもあるワークショップのファシリテーターを務めることができた。

塚本先生がフランクな形で会話に積極的に参加していたため、外国人参加者も肩肘張らず、楽しんでワークショップに参加できたのではないと思う。議論そのものとしては、普段から思考している歯学の研究者であるため、最低限の橋渡しで議論を活性化させることが出来た。今後ともワークショップに外国籍の研究者が参加すると予想されるので、このように英語グループを形成して今後とも実施されることが望ましいだろう。

ファシリテーターの教員にしても、一つのテーマについて英語で議論し合う、意見を聞くこともあまりないと思われるので、このような機会は受講者だけでなく、ファシリテーターの理解力、先導力を高める良い機会になるのではないと思われる。

(全学教育推進センター 佐藤 圭史)

全学 FD 研修 [テーマ編]

「学生を中心とした
教育をすすめるために」

-要支援学生への新たな学修サポートシステムの構築について-

期 日：令和 4 年 8 月 4 日（木）

会 場：当別キャンパス [ZOOM 開催]

はじめに

北海道医療大学 全学 FD 委員長 荒川俊哉

8月4日に、2022年度全学 FD 研修会テーマ編が開催されました。今回も引き続き ZOOM での開催でした。これで ZOOM での「テーマ編」の開催は3年連続です。ここまでコロナ禍を引っ張るとは誰も思っていませんでしたが、この ZOOM を使ったブレイクアウトルームでのディスカッション方式も日常になりつつあります。

今年は、そんなコロナ禍の中、様々な問題を抱える学生が顕在化してきた事もあり、「要支援学生への新たな学修サポートシステムの構築について」をサブテーマに、更に4つのトピックに分けた課題でワークショップを行うことになりました。これまでは、学業不振に関して多くの議論を重ねてきましたが、今回はそれを更に深掘りして、1)「学修が十分でなく、学業不振になっている学生へのサポート」、2)「学修時間は確保しているが、学修方法に課題のある学生へのサポート」に分けてワークショップでの議論をいただく事にしました。また、これまであまり議論のしてこなかった、合理的配慮とメンタルへの対応として、3)「合理的配慮が必要な学生への効果的な支援体制」、4)「メンタルに課題を抱える学生へのサポート」同時に対策を議論していただく事になりました。この4つで、現在の要支援体制は網羅できると思います。

これらのワークショップテーマで議論を進めるに当たって、今回初めて、午前中に議論のテーマと完全リンクした、4つの講演をレクチャーとして行い、まず基礎知識と対策の例などを勉強してもらいました。それにより、午後のワークショップをスムーズに行えたことと思います。また、3)と4)のテーマは、これまでしっかりと対応を議論してこなかったテーマであることから、初めてその内容や問題点に触れる先生も多かったように思います。そのようなことから、今回のテーマ設定はとても現在の状況にマッチしたものとなりました。浅香学長からも、「今までで一番ためになったFD研修であった」との講評も頂きました。テーマによって、議論が難しかったところも多少あったかもしれませんが、良く議論が進んで、良いワークショップになったと思います。その結果としてのプロダクトも、とても良い出来でした。特に3)と4)のプロダクトは、今回参加頂いていない先生方にも是非ご覧頂き、その対応についてご理解頂ければと思います。

最後に、お忙しい中ご参加頂いた先生方、サポート頂いたFD委員の先生方とスタッフの皆様、そして多くのご視聴頂いた皆様に感謝申し上げます。

2022（令和4）年度 全学FD研修〈テーマ編〉 実施概要

2022/7/20 現在

メインテーマ：	学生を中心とした教育をすすめるために
サブテーマ：	要支援学生への新たな学修サポートシステムの構築について
主催：	全学FD委員会
開催日：	2022（令和4）年8月4日（木） 9：20 ～ 15：55
開催方法：	Zoom
ディレクター：	荒川俊哉（全学FD委員会 委員長）
進行：	午前：荒川委員長 午後：守田委員（ワークショップ解説）、中川委員（グループ発表）

1. 日程

	進行内容	担当
9：20	参加者集合 開会・委員長挨拶、テーマ説明、日程確認ほか	荒川委員長
9：30	学長あいさつ	浅香正博 学長
9：35	【レクチャー（ワークショップテーマに関する対応事例報告）】 1）学修が十分でなく、学業不振になっている学生へのサポート 歯学部：古市保志 教授（歯学部長）	
10：05	2）学修時間は確保しているが、学修方法に課題のある学生へのサポート 薬学部：中川宏治 教授	
10：35	<小休憩 5分>	
10：40	3）合理的配慮が必要な学生への効果的な支援体制 リハビリテーション科学部：下村敦司 教授（言語聴覚療法学科長）	
11：10	4）メンタルに課題を抱える学生へのサポート 心理科学部：金澤潤一郎 准教授	
	<各テーマのレクチャーは30分>	
11：40	学長講評	
11：50	昼休憩（50分）	
12：40	*ワークショップ進め方について、プロダクトの作成について	進行解説：守田委員
12：55	☆ブレイクアウトルーム入室	
13：00	ワークショップ（110分） *参加者自己紹介、*役割分担（進行・記録・発表）の決定 *グループワークテーマ 1）意欲の持てない学業不振学生へのサポート 2）学修時間は確保しているが、学修方法に課題のある学生へのサポート 3）合理的配慮が必要な学生への効果的な支援体制 4）メンタルに課題を抱える学生へのサポート	【ファシリテーター】 FD委員 (各グループに配置)
14：50	休憩（10分）	
15：00	グループ発表・質疑応答・全体討議（1グループ10分×4グループ）	進行：中川委員
15：50	全学FD委員長総評	荒川委員長
15：55	ワークショップ参加者アンケート 閉会	

2022全学FD研修(8/4)ワークショップ出席者一覧

(職位・敬称略)

参加テーマ	グループ	参加者氏名	学部・学校	学科・科
1)学修が十分でなく、学業不振になっている学生へのサポート	①	山口 由基	薬学部	薬学科
		伊藤 修一	歯学部	歯学科
		中村 宅雄	リハビリテーション科学部	理学療法学科
		遠藤 輝夫	医療技術学部	臨床検査学科
		泉 剛	薬学部	FD委員
		今井 常晶	心理科学部	FD委員

参加テーマ	グループ	参加者氏名	学部・学校	学科・科
2)学修時間は確保しているが、学修方法に課題のある学生へのサポート	②	中川 宏治	薬学部	薬学科
		藤田 真理	歯学部	歯学科
		伊藤 加奈子	看護福祉学部	看護学科
		西出 真也	リハビリテーション科学部	作業療法学科
		小島 弘幸	薬学部	FD委員
		中川 賀嗣	リハビリテーション科学部	FD委員

参加テーマ	グループ	参加者氏名	学部・学校	学科・科
3)合理的配慮が必要な学生への効果的な支援体制	③	早坂 敬明	薬学部	薬学科
		豊下 祥史	歯学部	歯学科
		近藤 尚也	看護福祉学部	福祉マネジメント学科
		飯田 貴俊	リハビリテーション科学部	言語聴覚療法学科
		塚本 容子	看護福祉学部	FD委員
		鈴木 喜一	全学教育推進センター	FD委員

参加テーマ	グループ	参加者氏名	学部・学校	学科・科
4)メンタルに課題を抱える学生へのサポート	④	宮地 普子	看護福祉学部	看護学科
		西牧 可織	心理科学部	臨床心理学科
		千葉 利代	歯科衛生士専門学校	歯科衛生科
		百々 尚美	心理科学部	FD委員
		金澤 潤一郎	心理科学部	レクチャー講師

全体統括	荒川 俊哉	歯学部	FD委員
------	-------	-----	------

学部別参加数(FD委員除く)	
薬学部	3
歯学部	3
看護福祉学部	3
心理科学部	1
リハビリテーション科学部	3
医療技術学部	1
歯科衛生士専門学校	1
計	15

2022年度 全学FD研修 <テーマ編>

学生を中心とした教育を
すすめるために

～要支援学生への新たな
学修サポートシステムの構築について～



主催：全学FD委員会

2022年8月4日（木） Zoom Meeting

研修会開催の趣旨 研修会スケジュール

研修会開催の趣旨

本学の教職員一人ひとりが自主性・創造性を発揮することにより「学生中心の教育」並びに「患者中心の医療」を推進しつつ、「21世紀の新しい健康科学の構築」を追究することが本学の行動指針である。

その実現のためにFD研修会を開催し、教授法の開発改善を行うとともに「教育力」を高めることを本研修会の趣旨とする。

研修スケジュール

- 9:20 開会 委員長あいさつ テーマ説明、スケジュール説明ほか
- 9:30 学長あいさつ 浅香学長
- 9:35 レクチャー
 - ①「学修が十分でなく、学業不振になっている学生へのサポート」
古市保志 教授（歯学部）
- 10:05 ②「学修時間は確保しているが、学修方法に課題のある学生へのサポート」
中川宏治 教授（歯学部）
(休憩 10:35～10:40)
- 10:40 ③「合理的配慮が必要な学生への効果的な支援体制」
下村敬司 教授（リハビリテーション学部）
- 11:10 ④「メンタル課題を推し進める学生へのサポート」
金澤真一郎 准教授（心理科学部）
- 11:40 学長講評
- 11:50 昼休憩
- 12:40 ワークショップ（テーマとプロダクト作成の説明、ブレイクアウトルームの説明）
- 12:55 ブレイクアウトルーム入室（ワークショップ開始）
- 14:50 ワークショップ終了・休憩
- 15:00 グループ発表・質疑応答、全体討論（1グループ10分）
- 15:50 FD委員長総評・アンケートの実施
- 15:55 閉会

学長あいさつ

北海道医療大学 学長 浅香 正博

レクチャー①

北海道医療大学 歯学部長

古市 保志 教授

<演題>

「学修が十分でなく、学業不振になっている
学生へのサポート」

レクチャー②

北海道医療大学 薬学部

中川 宏治 教授

<演題>

「学修時間は確保しているが、学修方法に課題のある学生へのサポート」

レクチャー③

北海道医療大学 リハビリテーション科学部

下村 敦司 教授

<演題>

「合理的配慮が必要な学生への効果的な支援体制」

レクチャー④

北海道医療大学 心理科学部

金澤 潤一郎 准教授

<演題>

「メンタルに課題を抱える学生へのサポート」

昼食・休憩



午後のワークショップの開始時間

12:40 (時間厳守)

※ワークショップ参加者は予め決まっています。
自由参加ではありませんので、予めご了承ください。



2022年度 全学FD研修 <テーマ編>

ワークショップの進め方 プロダクトの作成について

2022年8月4日(木曜日) Zoom研修会

主催：全学FD委員会

担当：守田玲菜(看護福祉学部・FD委員)

ワークショップの進め方

質問です。

ワークショップは初めて？

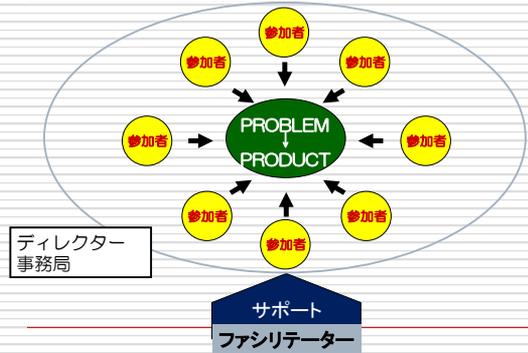


ワークショップとは？



- ・ 多人数を対象として、**参加者1人1人の参画意識を高める**ために、**小グループ**に分かれて**討論と作業**を行い、**結論**を出していく方式をいう。
- ・ **一定の時間内**にある**成果(プロダクト)**を生み出すという手段をとる。

ワークショップとは？



ワークショップの流れ

1. プレナリーセッション

全体 : 導入講義・作業課題



2. スモールグループディスカッション (約110分)

グループ別 : 課題について討論・プロダクト作成



3. プレゼンテーション (1グループ10分)

グループ別 : 発表・質疑応答



ワークショップの要件

1. 全てのメンバーが**積極的な参加者**になる
2. **参加者全員が Resource Person(主役)**
3. **積極的に建設的、前向きな意見**を述べる
4. **どんな質問・意見でも無意味ではない**
(良否の判断はしない。自分と異なる意見でも、まずは「なるほど～」と頷き、もう少し深く尋ねてみる等)
5. あらかじめ決まった**正解はない**
6. **先生はいない**
7. **時間を守る**



これは歓迎しません… (+o+)

イラスト：富士研WSスライドより



こんな感じで !(^)!

イラスト：富士研WSスライドより

スモールグループディスカッション

1. 参加者の自己紹介(1分程)

(アイスブレイク：氏名・所属・

私のいち押し、「実は私〇〇です」,

Good & New[24時間以内にあった"良かったこと (Good) "や"新しい発見 (New) "]など



2. 役割分担 (リーダー・記録・発表)



3. グループ討論

・発表内容の確認

役割分担



- **司会** []
 - グループ討論時の**司会進行**を行う。
- **書記・PC入力** []
 - グループ討論時、Zoomで画面共有しながら**書記(PC入力)**を行う (プロダクト作成)
 - 作成したプロダクトはPC等に**保存 (終了後提出)**。
- **発表者** []
 - 全体発表時に**グループプロダクト**をZoomで**画面共有**して、**発表**を行う。
- **ファシリテーター (FD委員)**
 - グループ討論・作業が効率的に進むように**サポート**する。
 - グループ討論の**タイムキーパー**も行う。

Zoomのブレイクアウトルームとは

複数のグループに分割



<ワークショップ>

【サブテーマ】

要支援学生への新たな学修サポートシステムの構築について

【ワークショップのテーマ】

- (1) 学修が十分でなく、学業不振になっている学生へのサポート
- (2) 学修時間は確保しているが、学修方法に課題のある学生へのサポート
- (3) 合理的配慮が必要な学生への効果的な支援体制
- (4) メンタルに課題を抱える学生へのサポート

<テーマ説明(1)>

学修が十分でなく、学業不振になっている学生へのサポート

将来の目標が見つからず現在の学びに興味を持ってない
当学・当学部への入学が本意
当学で学ぶこと自体に関心がない・・・など

上記のような理由で、学修への**モチベーション**が低下し、**学業不振**に陥る学生が少なからず存在



グループ討議への期待

意欲の持てない学生に対し**どのようなサポートが望ましいのか**に関する見解(できれば新しい切り口で)

<テーマ説明(2)>

学修時間は確保しているが、学修方法に課題のある学生へのサポート

学修時間は確保しているものの**学修の成果が現れない**ことへの悩みや不安

どの大学、どの学部においても、潜在的に一定数いると推測される



グループ討議への期待

これらの学生が抱える問題に対応する際に、**どのような学修方法が有用であるのか**に関する見解

<テーマ説明(3)>

合理的配慮が必要な学生への効果的な支援体制

障害者差別解消法の改正により、これまで民間事業者の努力義務とされていた**合理的配慮の提供**が2年以内に**義務化される**



グループ討議への期待

合理的な配慮を必要とする学生への支援について、**周囲の環境調整に留まらない効果的な支援体制**に関する見解

<テーマ説明(4)>

メンタルに課題を抱える学生へのサポート

近年、多様な学生が大学に入学し、修学上の支援を必要とする学生が増えているが、メンタルに不調をきたしている学生の割合も多い



グループ討議への期待

メンタルに課題を抱える学生が**修学を継続するうえで本当に必要なサポートとは何か**、今後の学生サポートについての示唆を得る

作業解説

プロダクト作成の作業ステップを例示します
(いろいろな進め方があると思いますので進め方の一例として参考にご覧ください)

<step1>

【課題を具体的に定義する】

議論を効率的に進めるには、課題を具体的に定義し、**スタート地点をしっかりと共有**することで議論がまとまりやすくなります。

<step2>

【アイデアを出し議論する】

グループ内でテーマに対するアイデアを引き出し、議論を活発にします。
ポイントは、出てきた**アイデアを否定しない、傾聴**する、議論に参加できないメンバーには**話を振る**。また、**アイデアの質**は後で検討するので、ここでは**気にしません**。

<step3>

【アイデアを分類し選択する】

出されたアイデアを分類することは、アイデアの良し悪しを議論するよりも効率的になります。
アイデアを分類した後、グループのプロダクトとするアイデアを選択します。
選択の方法としては、「**評価軸**」を決めて選択していく方法があります。

※評価軸の例：実行性、効果、かかる費用、時間・・・など

<step4>

【アイデアの詳細を詰めてまとめる】

自由に出されたアイデアは細部が詰められていません。グループのプロダクトにするために、選択したアイデアについて、以下の点を詰めていきます。

- 1.誰が、2.どこで、3.どんな風に、4.誰に対して、
 - 5.どんなタイミングで、6.なぜそれをやるのか
- ・・・いわゆる5W1H

<step5>

【グループ発表】

発表では、以下のポイントを意識します。

- ◇最終的な結論を一言で表現する
40文字程度
- ◇なぜそのアイデアを選んだのか
他に出されたアイデアのまとめ、選択理由・基準など
- ◇具体的なアイデアの内容
実行方法、アイデアの詳細など
- ◇アイデアの実行による結果
生じる利益・利点など

<プロダクトのまとめと発表方法>

- プロダクトの発表資料の作成には、パワーポイント、ワードなどを使用してください。プロダクト作成に使用するソフトは問いません。
- 作成したプロダクトは、本研修会終了後、全学FD委員会に提出をお願いします。

メールの場合: fd-kensyu@hoku-iryo-u.ac.jp

USBメモリなどに保存して提出の場合: 学務部教務企画課に持参

学生中心とした教育をすすめるために、**本学の授業環境に適した、より教育効果の高い授業の進め方や新たなスタイル**を提案してください。

参加者のグループ分け (敬称略)

テーマ(1)	テーマ(2)	テーマ(3)	テーマ(4)
山口 由基(薬)	中川 宏治(薬)	早坂 敬明(薬)	宮地 普子(看護)
伊藤 修一(歯)	藤田 真理(歯)	豊下 祥史(歯)	西牧 可織(心)
中村 宅雄(リハ)	伊藤 加奈子(看護)	近藤 尚也(看護)	千葉 利代(歯専)
遠藤 輝夫(医技)	西出 真也(リハ)	飯田 貴俊(リハ)	百々 尚美(FD委員)
泉 剛(FD委員)	小嶋 弘幸(FD委員)	塚本 容子(FD委員)	金澤 潤一郎 (レクチャー講師)
今井 常晶(FD委員)	中川 賢嗣(FD委員)	鈴木 喜一(FD委員)	—

休憩



休憩時間 14:50~15:00
(時間厳守でお願いします)

15:00 までに、
再入室してください。

【次はグループ発表になります】

グループ発表

(発表時間は、各グループ10分です)

提出物について

<参加者>

- グループ代表はWSの成果として、グループで作成したプロダクトをまとめて下記に提出してください。取りまとめの様式、分量などに特に制約はありません。
- ワークショップ参加者は、ワークショップの感想を400字程度にまとめて提出してください。

<FD委員>

- 研修の感想文を400字程度にまとめて提出してください。

提出期限・提出先

- 提出期限：8月31日（水）
- 提出先：学務部教務企画課 FD研修担当
* fd-kensyu@hoku-iryo-u.ac.jp

アンケート

参加者のみなさま、お疲れさまでした。
最後に、アンケートのご回答、よろしく
お願い致します。



<https://forms.gle/wgdHPsejXJe1ZhBd7>
(チャットにURLを送信しております。ご利用ください。)

レクチャー

- ①学修が十分でなく、学業不振になっている学生へのサポート
- ②学修時間は確保しているが、学修方法に課題のある学生へのサポート
- ③合理的配慮が必要な学生への効果的な支援体制
- ④メンタルに課題を抱える学生へのサポート

2022(令和 4)年度 全学FD研修 〈テーマ編〉

メインテーマ: 学生を中心とした教育をすすめるために

サブテーマ: 要支援学生への新たな学修サポートシステムの構築について

学業不振学生へのサポート - 歯学部での取組み -

学修が十分でなく、学業不振になっている学生へのサポート

歯学部: 古市 保志

☆ 報告書用として当日の発表内容から
改変を行っています。



問題点：歯学部

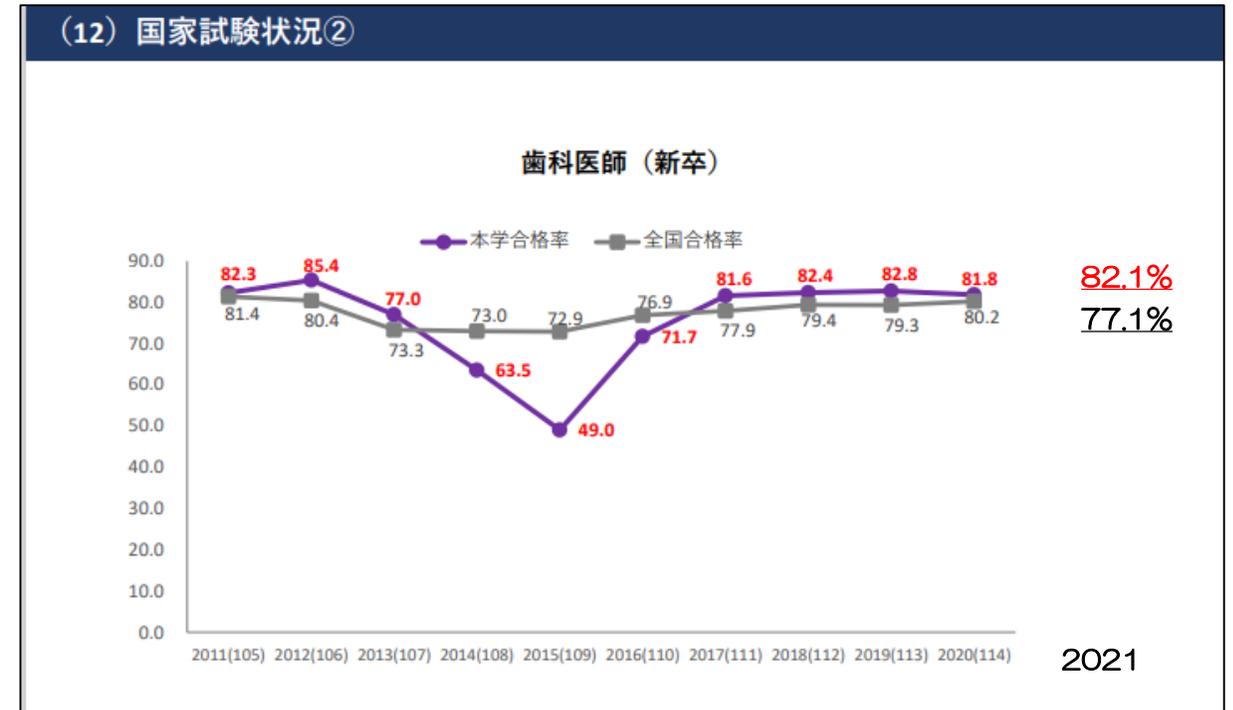
- 収容定員割れ (11年連続)
- 入学定員割れ (過去11年中8回)
- 高い留年率
- 国家試験合格率：5年連続 80% (新卒)



- 定期試験等による進級/留年予測
- 6年次試験による卒業/卒延予測
- 卒業試験による国試合否の予測



1. 入試選抜での方策
2. 留年率の抑制方策
3. 卒延率の抑制方策



参考：入学と卒業・国試合格

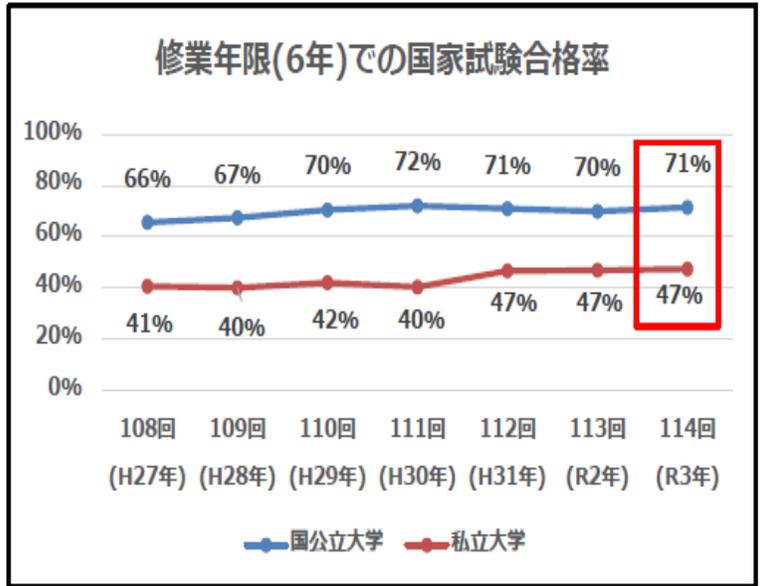
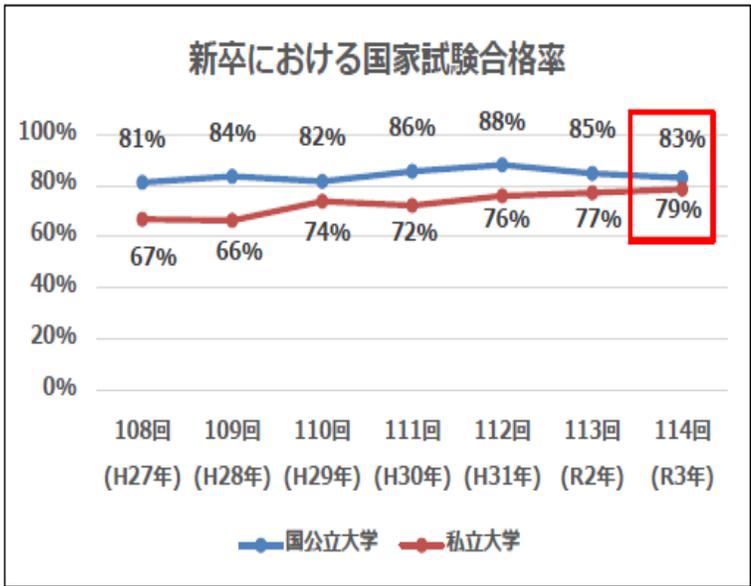
令和4年度入試結果

大学名	募集人員	入学者
北海道医療大学歯学部	80	73
岩手医科大学歯学部	57	32
奥羽大学歯学部	96	34
明海大学歯学部	120	120
東京歯科大学	128	128
昭和大学歯学部	96	96
日本大学歯学部	128	128
日本大学松戸歯学部	128	127
日本歯科大学生命歯学部	128	128
日本歯科大学新潟生命歯学部	70	67
神奈川歯科大学	115	93
鶴見大学歯学部	115	56
松本歯科大学	96	52
朝日大学歯学部	128	120
愛知学院大学歯学部	125	89
大阪歯科大学	128	128
福岡歯科大学	96	67
計	1,834	1,538

国公立 657名

国公立別大学歯学部の国家試験合格率 (H27~R3)

◆各大学歯学部の新卒の第114回国家試験（令和3年1月）合格率は、国公立では約83%、私立では約79%であったが、修業年限（6年）での新卒の国家試験合格率は、国公立では約71%、私立では約47%と大幅に下がる。



○ 修業年限（6年）での国家試験合格率は特に私立で著しく低く、早急な教育改善が求められる。
 ※過去3年間の国家試験においても全29学部中7学部が50%以下の合格率

既卒国家試験受験者：1,250名（2021年度試験）
 国家試験合格者：1,969名（2021.3.16）
 国公立新生合計：2,491名 **79.6%**

歯学教育の現状と課題
 文部科学省高等教育局医学教育課
 令和4年度歯学大学長・歯学部長会議資料

第98回（H17（2005年））：
 国家試験に部分的相対評価の導入

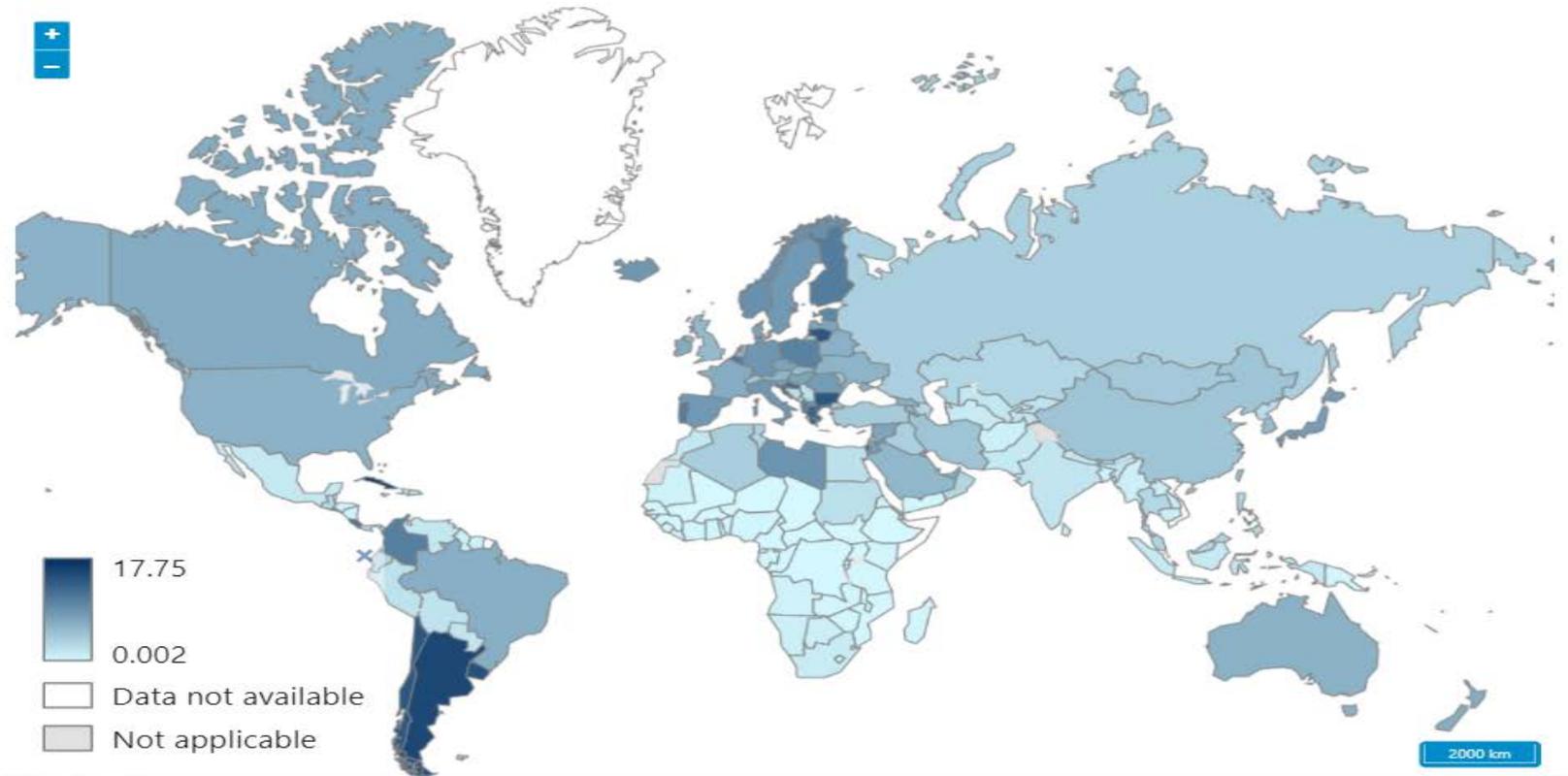
参考：歯科医師需給

WHO : [Global Health Observatory \(GHO\) data](#)

Dentists (per 10,000)

FILTERS Year
Latest

日本
OECD: 12位/35カ国
全体: 25位/193カ国



Disclaimer

The designations employed and the presentation of the material in this publication do not imply the expression of any opinion whatsoever on the part of WHO concerning the legal status of any country, territory, city or area or of its authorities, or concerning the delimitation of its frontiers or boundaries. Dotted and dashed lines on maps represent approximate border lines for which there may not yet be full agreement.



© WHO 2022. All rights reserved.

参考：歯科医師需給

図9 施設の種別にみた医療施設に就く歯科医師数の年次推移

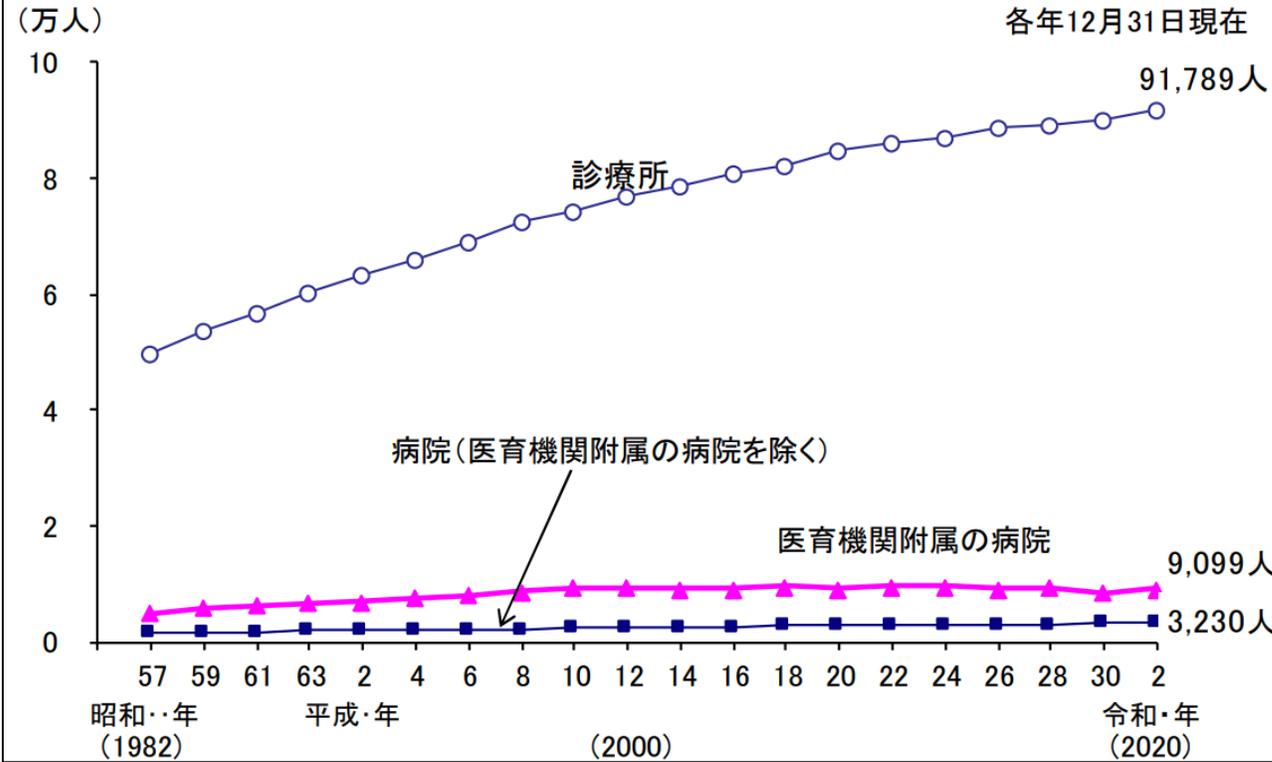


図11 年齢階級別にみた診療所に就く歯科医師数及び平均年齢の年次推移

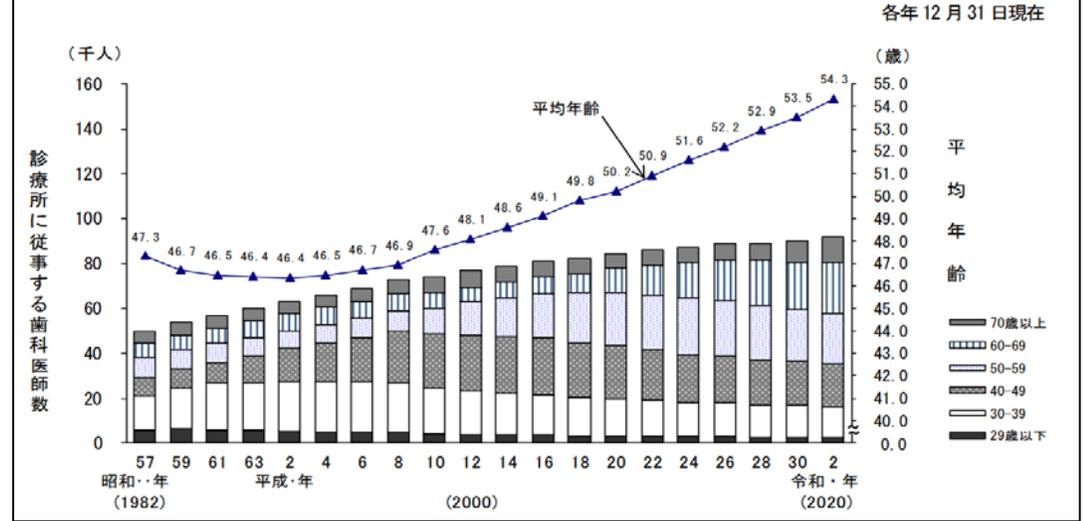
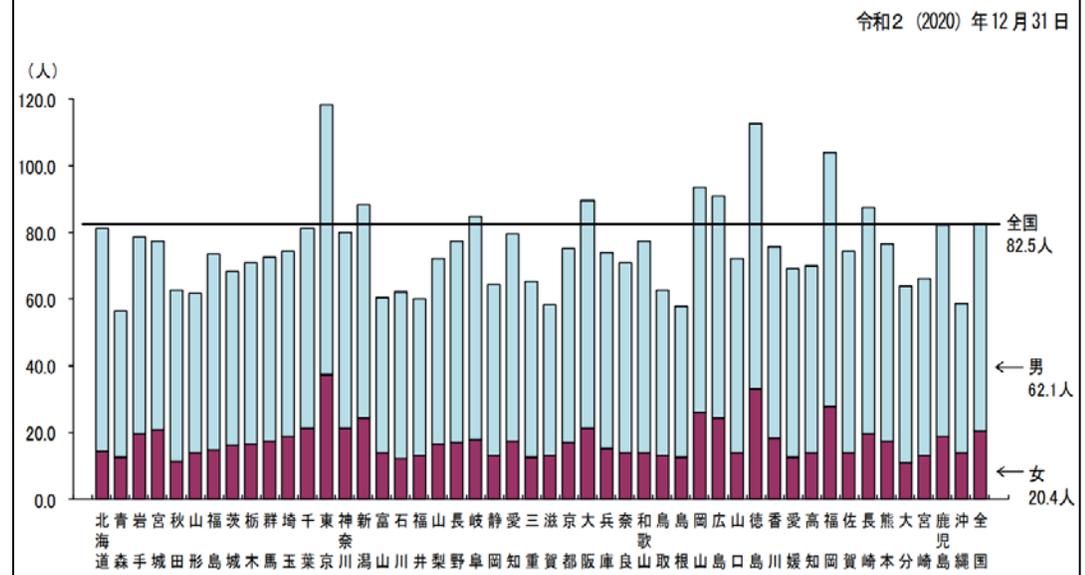


図12 都道府県(従業地)別にみた医療施設に就く人口10万対歯科医師数



改善を目指して

1. 入試選抜時
2. 留年率の抑制
3. 卒延率の抑制

形成的評価の充実

- 定期試験等による進級/留年予測 → 指導
- 6年次試験による卒業/卒延予測 → 指導
- 卒業試験による国試合否の予測 → 指導

国家試験
卒業

1年

入学時テスト
中間試験
前期定期試験
中間試験
後期定期試験
総合学力試験

2年

中間試験
前期定期試験
中間試験
後期定期試験
総合学力試験

3年

中間試験
前期定期試験
中間試験
後期定期試験
総合学力試験

4年

前期定期試験
CBT
判定基準試験
後期定期試験
共用試験
CBT, OSCE

5年

前期定期試験
後期定期試験
臨床実施試験
CPX, CSX
総合学力試験

6年

臨床基礎学試験
臨床実習統括試験
卒業基準判定試験
#1, #2, #3
卒業試験
#1, #2, #3
業者模試
DES #1~#3
麻生 #1~#3

入学

入学時テスト
中間試験
前期定期試験
中間試験
後期定期試験
総合学力試験

これまでの取り組み

- 入学時テスト
- 中間試験
- 総合学力試験
- サマースクールの実施：2019より

方策1. 入試選抜での方策 (S, A特待生の導入)：2020年度入試より

方策 2. サマースクールの充実

- 2019年：8月3日(土)～8月13日(火) 9：00～12：10 夏季集中研修としてスタート
- 2020年：COVID19蔓延のため中止
- 2021年：8月5日(木)～8月7日(土) 9：00～17：00 サマースクールとして再開
- 2022年：8月3日(木)～8月5日(土) 9：00～17：00 第2回サマースクール

2年

中間試験
前期定期試験
中間試験
後期定期試験
総合学力試験

これまでの取り組み

- 中間試験
- 総合学力試験

3年

中間試験
前期定期試験
中間試験
後期定期試験
総合学力試験

これまでの取り組み

- 中間試験
- 総合学力試験

5年

前期定期試験
後期定期試験
臨床能力試験
CPX, CSX
総合学力試験

これまでの取り組み

- 総合学力試験

方策1. CKXの実施 (10月)

4年

前期定期試験
CBT
判定基準試験
後期定期試験
共用試験
CBT, OSCE

これまでの取り組み

- 歯科医学総合講義Ⅰの導入
- 少人数班編成教育
(ローテーション講義)の導入
- CBT判定基準試験の導入

【2021年4月～：共用試験の法制化】

1. 2024年4月1日以降：臨床実習を行うための要件
Student Dentist として認定し、臨床実習時の診療行為を合法化（制限付き）
2. 2026年4月1日以降：歯科医師国家試験受験のための要件



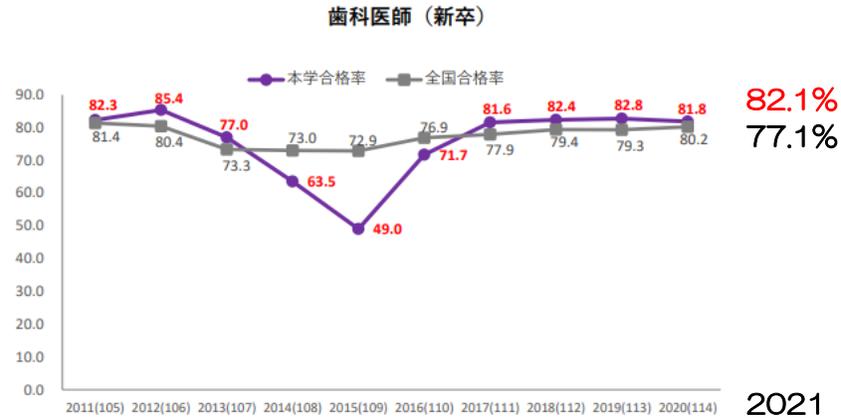
実施時期、合格基準等について不確定要素が多い



- 公的化CBT対策連絡調整員会、公的化CBT対策実行委員会の立ち上げ（2022年度）
- 公的化共用試験に備えた対策を練り、具現化（公的化までの期間に）

臨床基礎学試験
臨床実習統括試験
卒業基準判定試験
#1, #2, #3
卒業試験
#1, #2, #3
業者模試
DES #1~#3
麻生 #1~#3

(12) 国家試験状況②



(5) 標準修業年限学位授与状況



これまでの取り組み

- 歯科医学総合講義Ⅱの導入
- 少人数班編成教育
（ローテーション講義）の導入
- 卒業試験判定基準試験の導入
- 国試対策連絡調整委員会
国試対策実行委員会での対応（2016年度～）
- 予備校講義、予備校模試の本格導入（2016年度～）

6年

臨床基礎学試験
臨床実習統括試験
卒業基準判定試験
#1, #2, #3
卒業試験
#1, #2, #3
業者模試
DES #1~#3
麻生 #1~#3

これまでの取り組み

- 歯科医学総合講義Ⅱの導入
- 少人数班編成教育
(ローテーション講義)の導入
- 卒業試験基準試験の導入
- 国試対策連絡調整委員会
国試対策実行委員会
- 予備校講義、予備校模試の本格導入

(5) 標準修業年限学位授与状況



北海道医療大学ファクトブック 2022

方策1. S/Aグループへのグループ分け (A講義の開始)

- コア講義：S, Aグループ共に受講、各科目の通常の講義（従来のコマ数を確保）
- A講義：Aグループ対象、IV講目に設定、Sグループは学内で自習（出席確認あり）
コア講義3コマ程度の内容を1コマの補習講義として実施
- S or Aグループ分け：試験結果を過去のデータ（卒試・国試合格予測）と照らし合わせて判定
S: 自習で対応できる、A: 基本的な知識から積み上げる必要がある、と判断
- 試験の度にグループを再設定（入れ替え）

6年

臨床基礎学試験
臨床実習統括試験
卒業基準判定試験
#1, #2, #3
卒業試験
#1, #2, #3
業者模試
DES #1~#3
麻生 #1~#3

これまでの取り組み

- 歯科医学総合講義Ⅱの導入
- 少人数班編成教育
(ローテーション講義)の導入
- 卒業試験基準試験の導入
- 国試対策連絡調整委員会
国試対策実行委員会
- 予備校講義、予備校模試の本格導入

(5) 標準修業年限学位授与状況



方策1. S/Aグループへのグループ分け (A講義の開始)

方策2. チューター制度の導入

- A講義終了後、V講目に設定、対象は原則希望者（各担任の判断で参加を薦める）
- 大学院生5名にチューターを依頼（対価あり）、各チューターは週に1回担当
- 講義室で個別の質問や相談に応じる
- チューターの得意科目を学生に伝え、アンマッチな指導を避ける
必要に応じて講義担当者に各問題の解答の説明や学習の仕方の指導を委ねる

歯学部：学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)

1. 人々のライフステージに応じた疾患の予防、診断および治療を実践するために基本的な医学、歯科医学、福祉の知識および歯科保健と歯科医療の技術を修得している（専門的実践能力）。
2. 「患者中心の医療」を提供するために必要な高い倫理観、他者を思いやる豊かな人間性および優れたコミュニケーション能力を身につけている（プロフェッショナリズムとコミュニケーション能力）。
3. 疾患の予防、診断および治療の新たなニーズに対応できるよう生涯にわたって自己研鑽し、継続して自己の専門領域を発展させる能力を身につけている（自己研鑽力）。
4. 多職種（保健・医療・福祉）と連携・協力しながら歯科医師の専門性を発揮し、患者中心の安全な医療を実践できる（多職種が連携するチーム医療）。
5. 歯科医療の専門家として、地域的および国際的な視野で活躍できる能力を身につけている（社会的貢献）。

歯科医師

歯科医療

歯科医学

QOLの向上を目指した歯科保健医療活動の担い手、歯科医学の探究者として社会的・国際的に貢献できる魅力のある職業としての歯科医師像を提示する。

- 35億人：未治療う蝕（乳歯列、永久歯列）、重度歯周病、無歯顎、少数歯残存、
- 口腔領域がん：最頻発15新性悪生物の1つ

- 特徴：
 - Socioeconomic inequalities in oral health
 - Marginalized groups and disabilities:
 - homeless, prisoners, long-term disabilities, refugees, indigenous groups
 - Cliff-edge of inequality

- 治療費
 - 2015 歯科医療費：直接 356.80 億 USドル、 間接 187.61 億 USドル
 - 2018 (28 EU 諸国)
 - 歯科医療費：90億ユーロ、糖尿病（119億ユーロ）、心血管疾患（111億ユーロ）
 - について3番目

- 砂糖消費量：炭酸飲料、High Income Countries, Low-Income/Middle-Income Cs、NCDs

魅力ある歯学部であるために

- 高い歯科医師国家試験合格率
- 社会に貢献できる歯科医師の輩出
- 質の高い歯科医療の提供
- 社会的インパクトの高い研究発表

歯科医師需給問題

適正歯科医師数
適正歯科医療従事者数

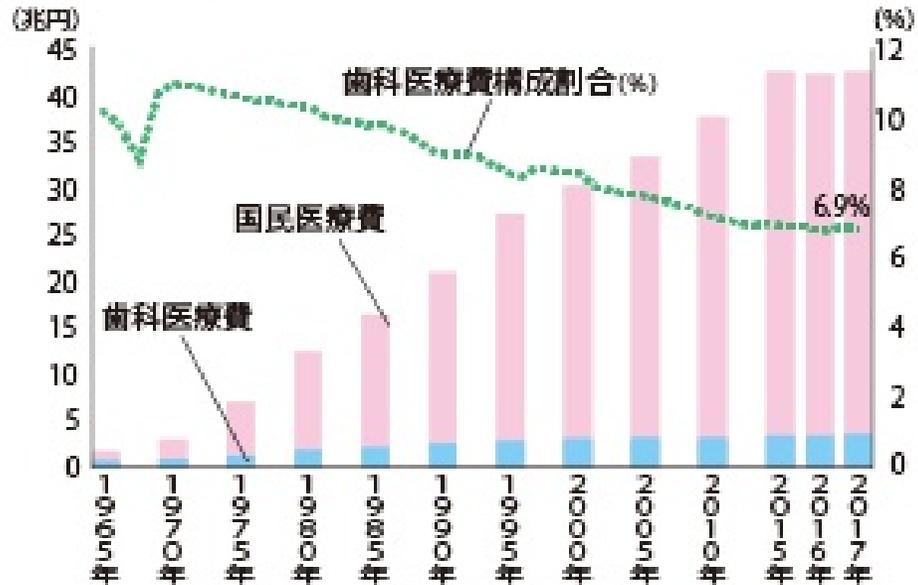
口腔疾患の
有病率・発現率

適正な国民医療費
適正な歯科医療費

有効な治療法・コスト
有効な予防法・コスト

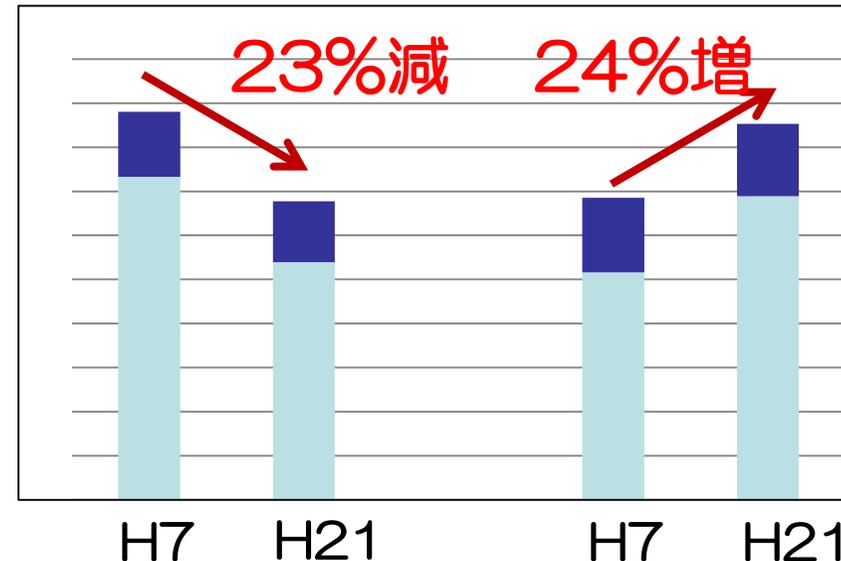
歯科医療費の推移

歯科医療費は、この間2.5兆円台で推移し、2017年では2.9兆円台(2017年はMEDIASの数値)となっているが、国民医療費全体に対する歯科医療費のシェアは右肩下がり減少し、2017年では、6.9%まで減少している。



出典：厚生労働省「国民医療費」

■ 歯科医療費
■ 内科医療費



A 事業所
歯科健診
実施あり

B 事業所
歯科健診
実施なし

2022年8月4日 全学FD研修

レクチャー（対応事例報告）

**学修時間は確保しているが、学修方法に
課題のある学生へのサポート**

薬学部・中川 宏治

■背景

～薬学部を取り巻く環境の変化～

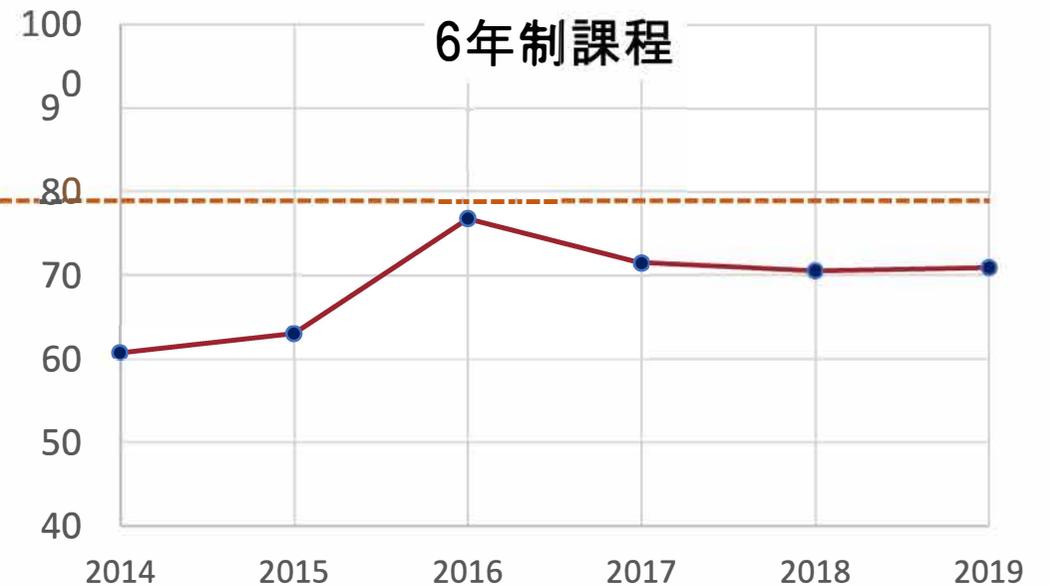
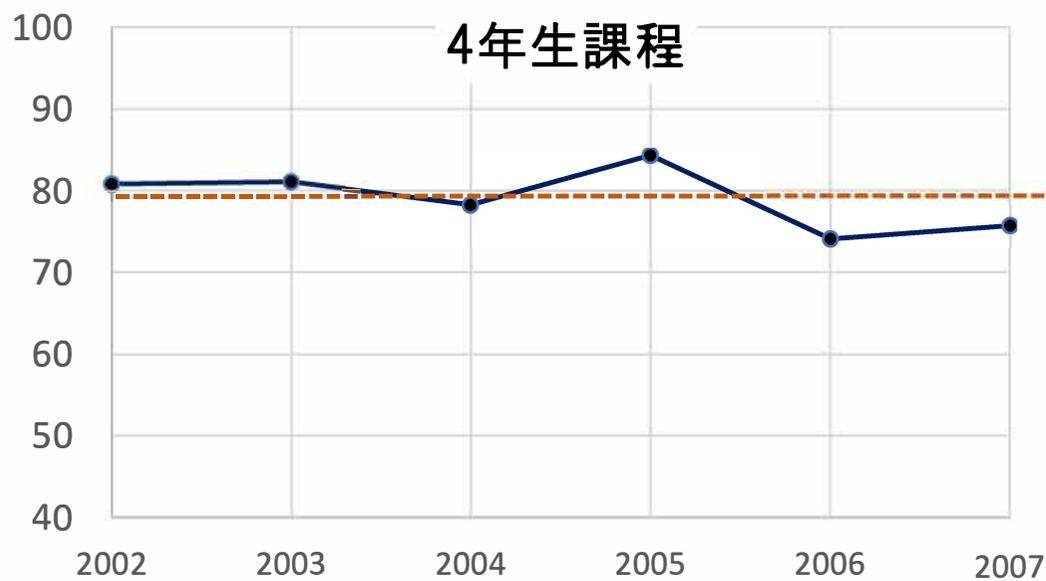
2006年 薬学部 6年制課程へ移行

2011年11月 本学薬学部薬学教育支援室が開設

2012年3月 6年制移行後第1回目の薬剤師国家試験

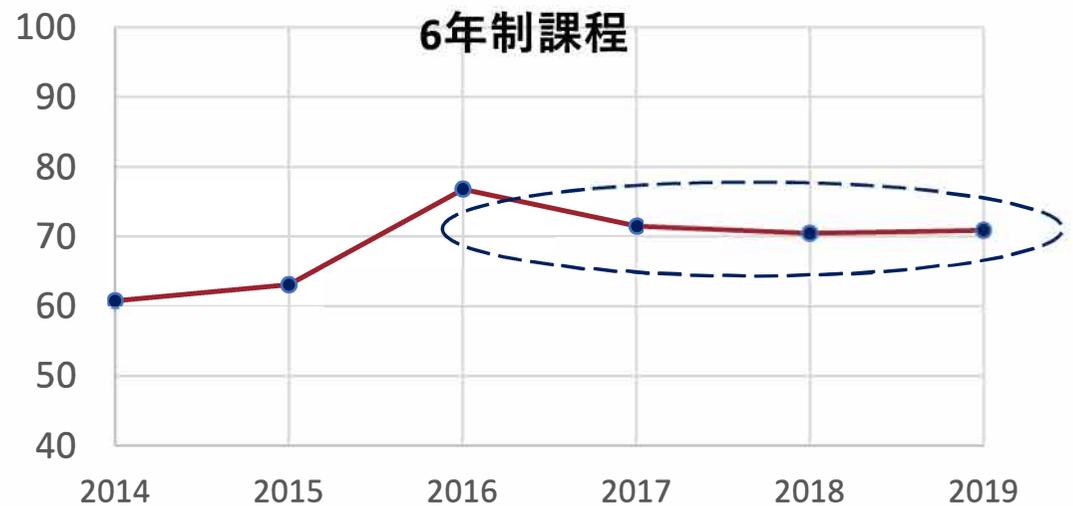
- 6年制への移行に伴い薬剤師国家試験は**難易度が上昇**することが予想された
- 一方で、全国的に大学生の**学力低下**が問題になった

薬剤師国家試験合格率の推移（全国平均、既卒含む）



薬剤師国家試験の難易度は6年制へ移行後**上昇**

薬剤師国家試験の難易度は、**現在も高水準が保たれている**



薬剤師国家試験の難易度は現在も高水準であるが、一方で学生の学力低下は全国的にも改善されてはいない

本学薬学部においても学生の**基礎学力の低下**、および成績上位層と下位層の差の拡大が問題となった

1. 以前にも増して学生の**学力低下**が顕著
2. 加えて**学修への意識の低下**
3. 学生気質（学修態度等々）の**変化、多様化**

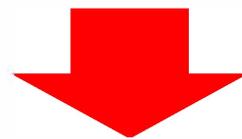
学力が不足している学生の特徴：

基本的な知識の不足に加え、読解力・語彙力・思考力の不足、他教科との関連付けができないなど

さらに学力そのものが不足しているだけでなく

- ・ 現在の自身の現状を把握
- ・ 自ら対処法を模索する
- ・ 自身の出欠、単位取得状況などの確認などの自己管理
- ・ 進級、卒業、国家試験等に対する計画を立てる

といったことが苦手な学生が増加



総合的な学修能力に課題のある学生が増加しているため、これらの学生（特に下級学年の学生）に対する学習支援が必要となる

■薬学部における学修に課題のある学生へのサポートの体制について

- (1) 学習カリキュラムにおける補正教育科目の開講
- (2) 薬学教育支援室における学習支援

(1) 学習カリキュラムにおける補正教育科目の開講

下級学年（主に1~3年生）において、通常の授業についていくのが難しい学生を対象に、補正教育科目を選択科目として開講している

1年次：

高校等で該当科目を履修していなかった学生や、該当科目の学習に不安のある学生を対象として、以下の演習科目を開講（各科目全15回・1単位）

- 基礎物理数学演習
- 基礎化学演習Ⅰ
- 基礎化学演習Ⅱ
- 基礎生物学演習

2~4年生：

通常の講義だけでは理解の到達が不十分な学生を対象に以下の演習科目を開講（各科目全15回・1単位）

（2年次開講科目）

- 薬学特別演習Ⅰ（化学系）
- 薬学特別演習Ⅰ（物理化学系）
- 薬学特別演習Ⅰ（生物系）

（3年次開講科目）

- 薬学特別演習Ⅱ（化学系）
- 薬学特別演習Ⅱ（物理化学系）
- 薬学特別演習Ⅱ（生物系）
- 薬学特別演習Ⅲ（薬理系）

（4年次開講科目）

- 薬学特別演習Ⅳ（物理・生物・化学・情報）
- 薬学特別演習Ⅴ（薬理・薬物治療・薬剤・法規）

(2) 薬学教育支援室における学習支援

学力が不足している学生のレベルも様々であり、補正教育科目の受講のみでは、学習内容の理解の到達が不十分な学生も多数存在



本学薬学部では、その対策の一つとして、個別または少人数制の学修支援を目的とした**薬学教育支援室**を2011年10月に設置した

薬学教育支援室の活動内容

主に1～3年生を対象として、低学力の学生の学修支援（リメディアル教育）を行う

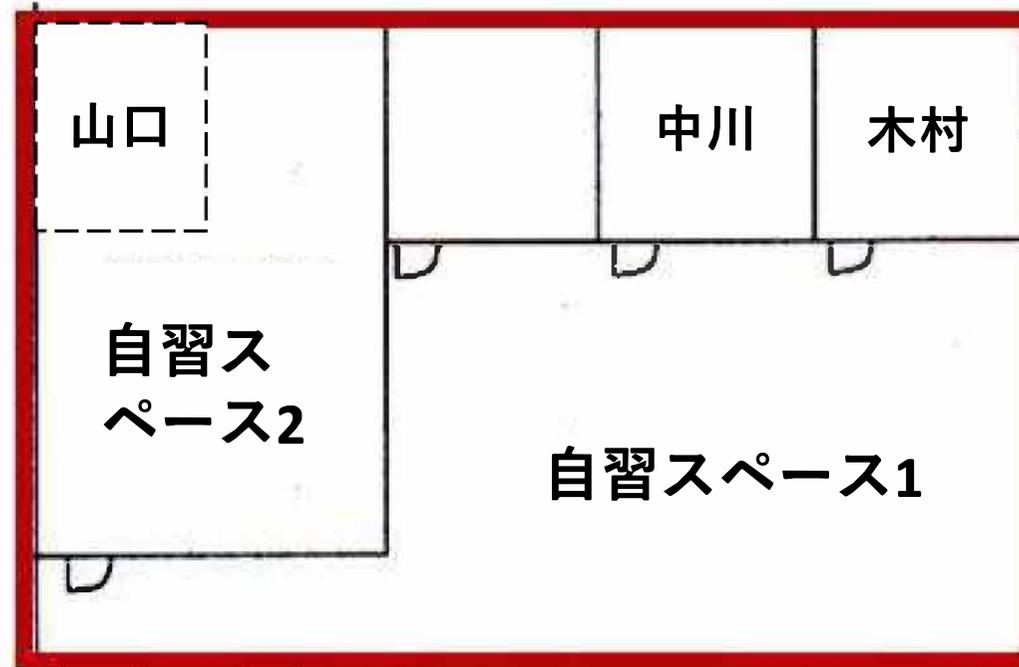
- 個別の学習相談・学習指導
 - 少人数での補講
 - 定期試験/再試験前の講習会の実施
 - 補正教育用動画コンテンツの作成
- など

薬学教育支援室

薬学棟3F 322室（学生実習室の向い）

開室時間：月－金 10：00-18：00

教員室・自習スペースから構成（自習スペースには学習機を設置）



専任教員3名が常駐

教授：木村真一（2011～）

教授：中川宏治（2019～）

助教：山口由基（2021～）

（担当科目）

：解剖生理学・薬理学

：生化学・分子細胞生物学

：有機化学・基礎化学

薬学教育支援室の室内



自習スペース1



教員室（相談スペース）

薬学教育支援室の室内



自習スペース2



自習スペースにおける
参考書など（閲覧可）

支援室の個別学習相談

- 主に1~3年生を対象として、支援室の専任教員が、来室した学生に対し**個別に学習相談**を実施（それぞれ教員の担当科目に関して）
 - ✓ 日常の授業内容についての指導（疑問点の解決など）
 - ✓ 勉強の方法についての指導
 - ✓ 試験対策についての指導 など
- ※ 支援室教員への学習相談は学生にとって敷居が低い（相談しやすい）と思われる
- 支援室の専任教員の担当科目以外の質問があった場合は、相談に応じてくれる薬学部の教員に相談・紹介

支援室の利用状況の変化

- 以前に比べ学生が学修の相談に来るタイミングが**遅い**
 - ：定期試験前ではなく定期試験後（再試験開始後から）
 - ※場合によっては再試験終了後…
- ➔ 学生の意識が変化？
 - 学習内容の難易度が高いにも関わらず、**見込みの甘さ**
（試験前にちょっと勉強すればなんとかなるさ…？）
- 以前に比べ、**自らの意思で来室する学生の減少**
 - ：担任に連れられて、または、地区別懇談会で強く勧められてくる学生が増加

支援室主催の講習会の実施

- 多様化する学生に対応するためには、従来のように学生が教員に質問に来るのを待つだけでは不充分
 - 教員側から積極的に学生に対して何らかのアクション（教員側から学生に歩み寄る）を起こす必要がある
- 支援室での個別の学習相談に加え、1~3年生を対象として試験前（定期試験前および再試験前）に講習会を企画・実施
 - ✓ 試験範囲に関する補習（支援室教員）
 - ✓ 試験範囲に関する質問対応（支援室教員、科目担当教員）

■ 今後の課題

- 学習カリキュラムに関して：

学生の学力低下

→学習内容を精査・再検討→**学生の現状に適したカリキュラムの構築**（補正授業の充実、補習や勉強会の時間の確保など）

- 薬学教育支援室における学修支援に関して：

コロナ禍の影響もあり、この2年ほど支援室の活動も制限（個別学習相談のみ継続）

✓支援室を訪れる学生の数が減少

→**支援室の存在、活動内容を学生に改めて周知**

✓試験前の講習会がこの2年開催されていない

→状況を見ながら適宜**講習会を再開**

- その他：

- ✓学修に課題の有る学生に関する情報の共有

教員側が学修に課題の有る学生を把握し、適切に指導するためには、種々の情報が必要

→個々の学生の苦手教科の把握、講義の出席状況等、学修態度などの情報を共有する必要がある（科目担当教員、担任教員、支援室教員、事務などとの連携と協力が必要）

リハビリテーション科学部 言語聴覚療法学科 下村敦司

合理的配慮が必要な学生への 効果的な支援体制

本日の内容

1. 合理的配慮で挙げた問題点
2. 臨床教育における価値観
3. 合理的配慮の基本的な考え方
4. 合理的配慮の考え方と価値観でのギャップ
5. 効果的な合理的配慮の提供に必要なポイント

合理的配慮で拳がった問題

合理的配慮のプロセス案

8 月
2021

● 学生から合理的配慮の申請

● 合理的配慮策の提案 ※学生副部長・学生部による策案 ※支援に必要な関係部局との調整
● 学科での協議・承認 ※学科教員による

● 学科での協議・承認 ※学科教員による ※学生との合意形成

● 学部での審議・承認 ※学部運営委員による

● 障がい学生支援委員会での審議・承認 ※障がい学生支援委員による

目的：適切な支援策を、全関係者が実施する。

10 月
2021

● 合理的配慮の提供 ※各科目担当者による提供 ※支援状況を学科で共有

現在
2022

● 合理的配慮の評価と更新 ※半期に1回、担任面談 ※学科で共有

浮かび拳がった問題点

8 月
2021

● 学生から合理的配慮の申請

● 合理的配慮策の提案 ※学生副部長・学生部による策案 ※支援に必要な関係部局との調整
● 学科での協議・承認 ※学科教員による

● 学科での協議・承認 ※学科教員による ※学生との合意形成

● 学部での審議・承認 ※学部運営委員による

● 障がい学生支援委員会での審議・承認 ※障がい学生支援委員による

10 月
2021

● 合理的配慮の提供 ※各科目担当者による提供 ※支援状況を学科で共有

現在
2022

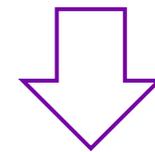
● 合理的配慮の評価と更新 ※半期に1回、担任面談 ※学科で共有

浮かび拳がった問題点

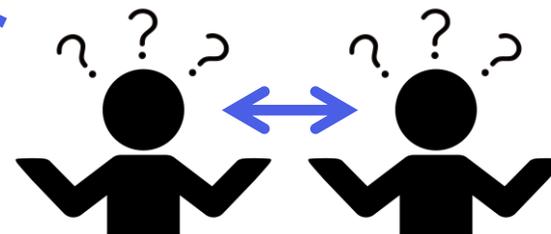
- 専門家による「障害学生支援の基本的な考え方」と各教員がもつ「臨床教育における価値観」の間にギャップがある。
- 「学生がもつ障害の特性」と「臨床教育における価値観」の間にギャップがある。

- 障害学生支援の基本的な考え方
- 学生がもつ障害の特性

臨床教育における価値観



- 合理的配慮策の合意が困難
- 教員間で配慮の差



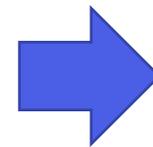
**なぜ合理的配慮の考え方と価値観で
ギャップが生じたのか？**



臨床教育における価値観

言語聴覚士教育の目標

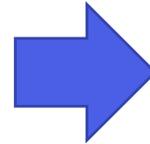
1. 豊かな人間性と対象者中心の思考
2. 倫理的な態度
3. 確かな知識・技能と根拠に基づく臨床
4. コミュニケーション力
5. 連携力
6. リサーチ・マインド（科学的探究心）
7. 安全管理
8. 社会的役割
9. 後進の指導
10. 生涯にわたって学び続ける姿勢



言語聴覚士教育は、臨床実践力の育成を主目標としている。

臨床実践力とは

1. 知識
2. 情報収集力
3. 総合的判断力
4. 技能
5. 態度（診療、教育、研究）



言語聴覚士カリキュラムでは、**演習**と**臨床実習**の時間数が多い。

理学療法学 2006 年 33 卷 4 号 p. 165-169

言語聴覚士教育のカリキュラム

教育内容		単位数
基礎分野		12
専門基礎分野		29
専門分野	講義・演習	32 (演習 202時間)
	臨床実習	12 (480時間)
選択必須分野		8
合計		93

記録や資料の管理

<内容>

言語聴覚療法の基本的な臨床態度および技能の修得が目標

予習課題 → 手技の学習・デモンストレーション → 学生同士の練習 → 復習・課題
→ 試験

<実施時期>

多くの領域で3年前期に集中している。

スケジュール管理

演習の内容

コミュニケーション力



患者の安心・安全

記録や資料の管理

臨床実習の内容

コミュニケーション力

<内容>

対象者や家族と信頼関係をもち、基本的な臨床態度および技能の修得が目標

情報収集 → 評価 → 治療計画の立案 → 治療の実施 → 評価

<実施時期>

3年後期から4年前期に行われる。



患者の安心・安全

スケジュール管理

心身の状態を推測

合理的配慮の基本的な考え方

教育における合理的配慮の基本的考え方

- 多数派のみが優遇されている事物、制度、慣行、観念その他一切のものを最小化する。

障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律

- 便宜を図る目的は、障害をもつ方にポジティブな関わりをするのではなく、学ぶ機会を失わせないように配慮する。

独立行政法人日本学生支援機構 『合理的配慮ハンドブック』

教育における合理的配慮の基本的考え方

1. 教育目標は変えない。
2. 学習目標を達成することが重要である。
3. 学ぶ機会を失わせない。
4. 教育方法は学生の特性に応じて変える。
5. 教員および大学に過重負担がない。

独立行政法人日本学生支援機構 『合理的配慮ハンドブック』



合理的配慮の考え方と価値観のギャップ

発達障害学生の臨床実習での困難事項

記録や資料の管理が苦手

コミュニケーションが苦手

<内容>

対象者や家族と信頼関係をもち、基本的な臨床態度および技能の修得が目標

情報収集 → 評価 → 治療計画の立案 → 治療の実施 → 評価

<実施時期>

3年後期から4年前期に行われる。

提出物の締切が守られない

相手の心身状態を
推測するのが苦手

発達障害学生への合理的配慮

指示は紙面や図示を使用する。↓

記録や資料の管理が苦手

← 全資料をまとめて配る。

コミュニケーションが苦手

<内容>

実際の現場で患者を受け持ち、検査・治療を実施する。

情報収集 → 評価 → 治療計画の立案 → 治療の実施 → 評価

<実施時期>

3年後期から4年前期に行われる。

提出期間を長めにする。↓

提出物の締切が守られない

↓ 教員と一緒に考えてみる。

相手の心身状態を
推測するのが苦手

合理的配慮と価値観とのギャップ

- 患者の安全や多職種連携にとらわれると、合理的配慮を考える余裕がなくなる。
- 学生の障害について正しく理解していないと、合理的配慮の理解が難しくなる。

全資料をまとめて配る。

提出期限を長めにとる。

教員と一緒にやってみる。

指示は紙面や図示を使用する。



患者の安全が…

できるのでは？

効果的な合理的配慮の提供に必要なポイント

ギャップを埋める3つのポイント



正しい障害学生支援を理解する

- 条約や法令に基づく、**学習支援の基本的な考え方を正しく理解**する。
- 学生がもつ**障害の特性**について**正しく理解**する。
- 現在の**教育目的と目標**を**再確認**する。



障害学生支援に関して全学科教員が共通認識をもつ

- 関わる**全教員**が、**共通の障害学生支援の目的・目標**をもつ。
- 関わる**全教員**が、**共通の言語聴覚士教育の目的・目標**をもつ。



障害学生支援は、共通認識のもと改善する

- 関わる**全教員**が、**共通の障害学生支援および教育の目的・目標**をもち、それに向かって**教育**を実施する。
- 合理的配慮は**定期的**に**評価し改善**する。

教育における合理的配慮の基本的考え方

1. 教育目標は変えない。
2. 学習目標を達成することが重要である。
3. 学ぶ機会を失わせない。
4. 教育方法は学生の特性に応じて変える。
5. 教員および大学に**過重負担がない**。

独立行政法人日本学生支援機構 『合理的配慮ハンドブック』



合理的配慮のプロセス

8 月
2021

● 学生から合理的配慮の申請

● 合理的配慮策の提案 ※学生副部長・学生部による策案 ※支援に必要な関係部局との調整
● 学科での協議・承認 ※学科教員による

● 合理的配慮の関係法規、学内規程についての学科FD ※学科長によるレクチャー

● 学科での協議・承認 ※学科教員による ※学生との合意形成

● 学部での審議・承認 ※学部運営委員による

● 障がい学生支援委員会での審議・承認 ※障がい学生支援委員による

● 合理的配慮の関係法規と具体的な施策についての学部FD ※障害の専門家によるレクチャー

10 月
2021

● 合理的配慮の提供 ※各科目担当者による提供 ※支援状況を学科で共有

現在
2022

● 合理的配慮の評価と更新 ※半期に1回、担任面談 ※学科で共有

An aerial photograph of a person walking on a road with white diagonal stripes. A large, semi-transparent blue circle is overlaid on the image, containing the text. The background is dark asphalt. On the right side, there are three vertical blue bars of varying lengths.

ありがとうございました

メンタルに 課題を抱える学生へのサポート

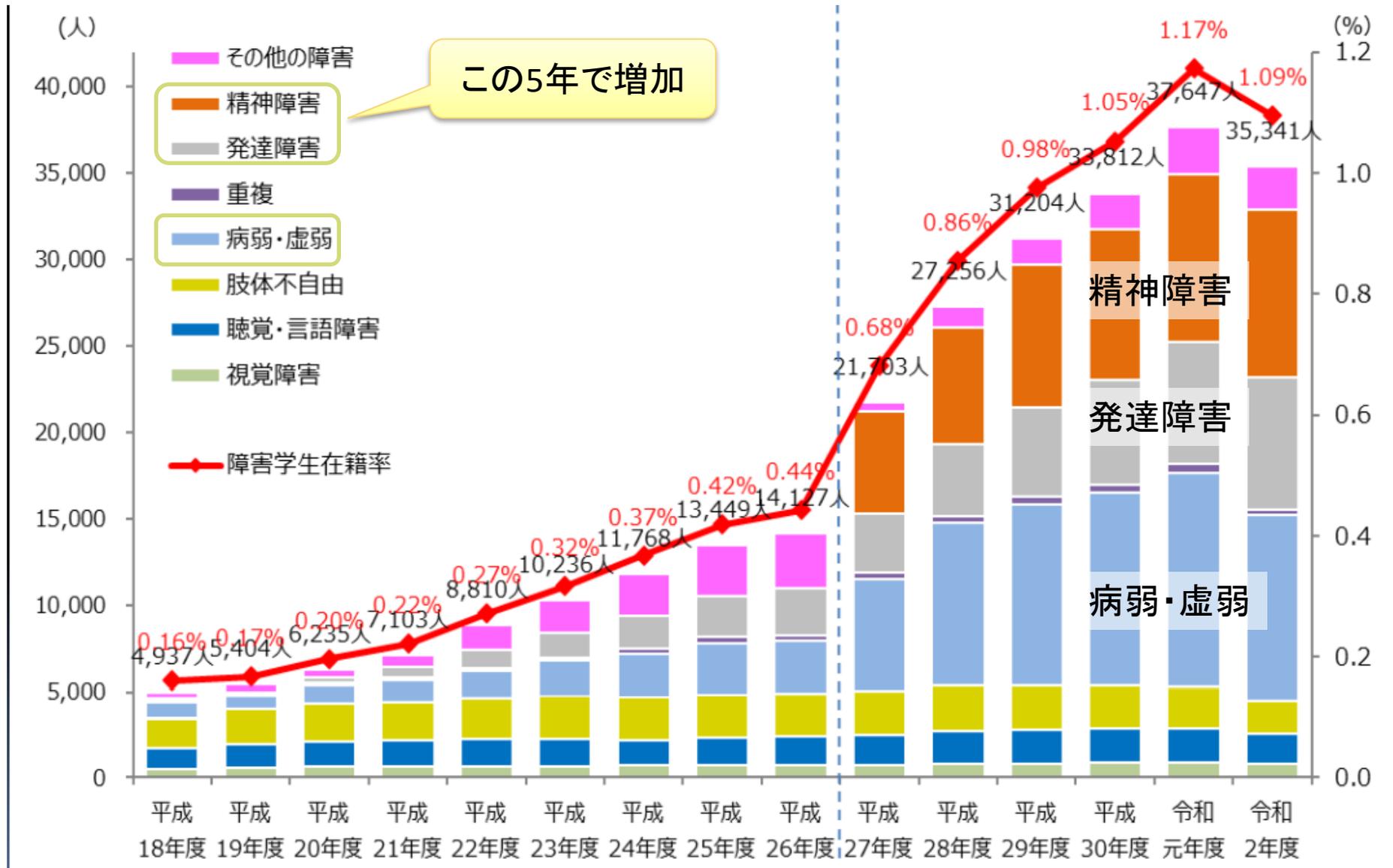
2022年 8 月 4 日

北海道医療大学心理科学部

金澤潤一郎

(公認心理師、臨床心理士)

障がい学生数の経年推移 (JASSO, 2021)



医療系学部

大学1年生の不安の経時的変化

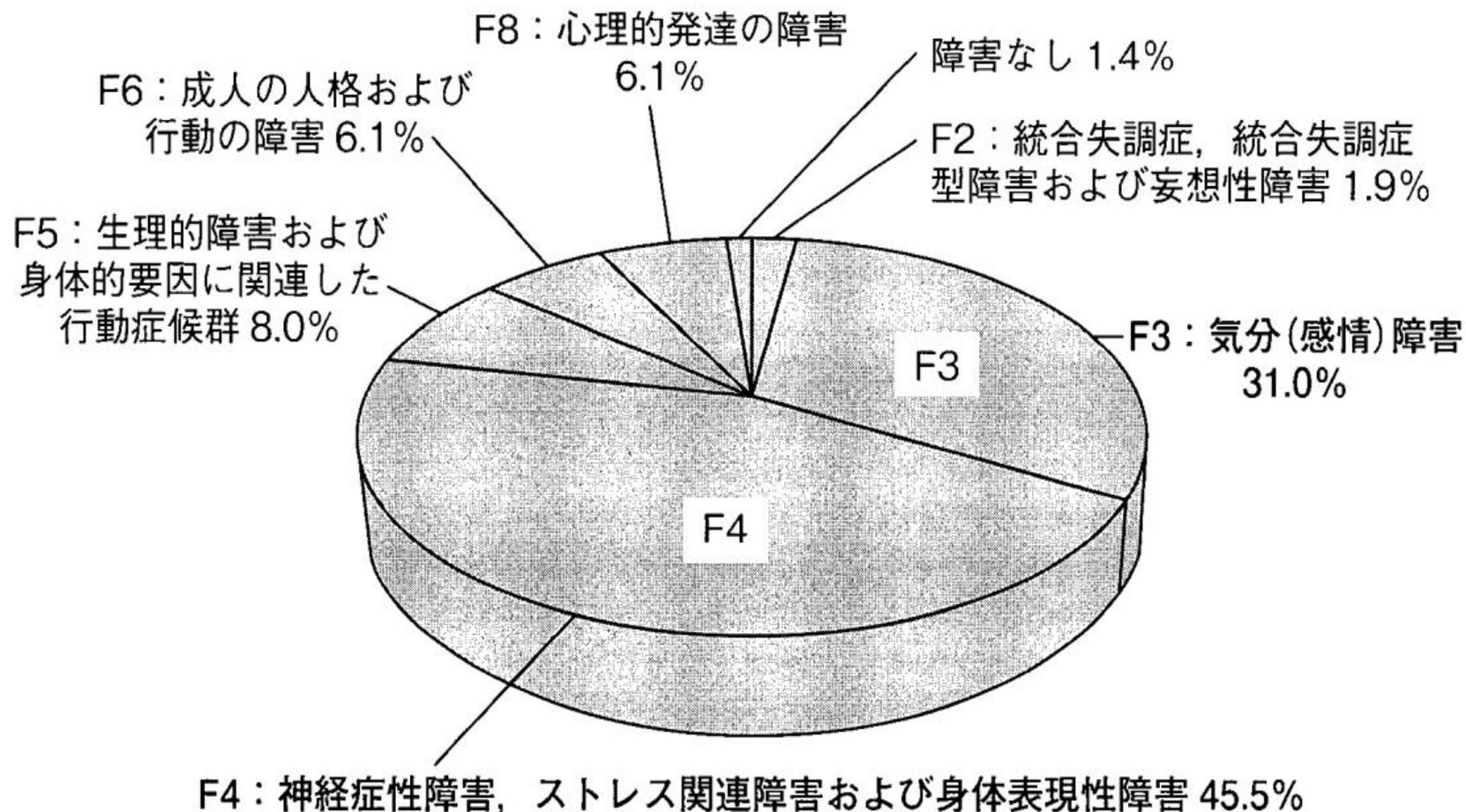
	5月	10月	翌年2月
日常生活不安	7.09 ± 2.45*	6.44 ± 2.80	6.63 ± 3.14
評価不安	7.23 ± 2.54	7.34 ± 2.57	7.11 ± 2.84
大学不適応	0.56 ± 0.85#	0.85 ± 1.21	1.09 ± 1.48
総合得点	14.88 ± 4.61	14.64 ± 5.16	14.83 ± 6.25

平均値 ± 標準偏差 *，#：p<0.05。*：日常生活不安の5月と10月との間，#：大学不適応不安の5月と翌年2月との間。

日常生活不安は慣れて下がる
大学不適応は次第に強まる

相談学生の精神科診断 (ICD-10)

三宅・岡本 (2015)



主にうつ病やストレスによる身体症状がメイン
背景に発達障がいがある場合もある

学生支援の3階層モデル

第1層：日常的学生支援（自然な形での学生の成長支援）

学習指導、研究室運営、窓口業務での助言や指導
学生との交流や援助要請を促す関係性構築

第2層：制度化された学生支援

クラス担任制度、TA、教育支援室、オフィスアワー
相談窓口、就職相談室など

第3層：専門的學生支援

学生相談室、キャリアセンター、保健管理センターなど
学外機関（精神科病院、福祉施設）

各階層の交流および連携・協働
まずはお互いに情報公開（システムや支援内容）が重要

日本学生支援機構 (JASSO) 精神障害

(1) 概要

(2) 就学において起こりがちな困難さの例

(3) 合理的配慮の例

(4) 指導方法の例



https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/shogai_infomation/handbook/08/02.html

困難さの例

- **睡眠-覚醒リズム**がずれると授業や実習への欠席や遅刻が目立つように。
入眠困難のため午前中の出席に影響。
- **精神症状の程度や内容は変動する**可能性がある。その変動は、一日のうちでも、また週や月の単位で周期的あるいは不定期。気分の日内変動(朝や午前が不調なことが多い)が生じると、通学することや授業に集中をすることが難しい。
- **情動の不安定さ、思考力、記憶力、集中力の低下**を来すことがあり、物事に意欲的に取り組むことや**予定どおりに課題を遂行することが難しく**なります。
- 講座やゼミで、**人前での発言やグループワークでの作業が思うようにできない**場合には、授業や実習も欠席しがちになります。
- 他人との関わりが苦痛に感じる状態になり、ひきこもり気味の生活が続くと、**友人、教職員、家族から連絡が取りにくくなる**。
- 抑うつ気分や気分の易変性・不安定さがあると、些細な出来事や他人の発言に**過敏に反応したり被害的な捉え方をしたりしがち**となる。イライラ感があると**攻撃的な発言をしてしまい、思いがけない対人関係上のトラブル**が誘発されることがある。

指導方法の例

- 学外実習の準備: **事前に学生と相談する機会を設定**。実習参加の意思を確認するだけでなく、**特定の場面で支援が必要であるかについて確認し、受入れ機関に具体的な配慮を依頼**するかを相談する。
- 学外実習先に、支援を要する可能性がある学生がいることをあらかじめ伝えておくほうがよい場合がある。受入れの準備段階で先方にどのような説明をするのかについて、**事前に相談し、合意を得ておく**とよい。
- 履修に関する相談を丁寧に行なうことにより、講義の詰め込み過ぎを避け、**無理のないスケジュールを組む**ように促すことが大切です。難易度が高い科目は体調が回復してから再履修する方針が望ましい。
- 注意力や集中力の低下が懸念される学生が、**危険物質や有害薬品を取り扱う実験を準備する段階で担当教員だけでなく実験のパートナーやティーチング・アシスタントに配慮依頼**を含めた協力を依頼して安全を確保します。
- 精神症状が数週間ないしは数カ月間のうちに変化するに従い、支援ニーズも変わる可能性があるため、**定期的に現況を確認して支援の在り方を調整**する。
- **病状が悪化することもある**。無理のない履修計画を再確認し、休学を検討すべき局面もある。
- 発達障害が併存している場合、精神障害に特化した治療に加えて、発達障害の障害特性を考慮した**環境調整と適切な関わり**が求められる。

若者のためのメンタルヘルスブック (厚生労働省)

<https://www.mhlw.go.jp/kokoro/youth/docs/book.pdf>



Part 1
ストレスと
こころ
ストレスとうまくつきあう 4
こころのSOSサインに気づく 7
こころと体のセルフケア 10



CONTENTS



Part 2
友達のことが
気になる
困っている友達の助けになる 16
こころの病気についての誤解 18



Part 3
困ったときの
相談先
どんなふうに相談すればいいの? 22
こころの相談窓口について 24
こころを専門に診る病院について 27
カウンセリングについて 30



現状把握シート(担任業務用)

	現状 10点 満点	現状の具体化	次の目標 10点 満点	具体的な案
学 業				
生 活				
友人・対人 関係 余暇・趣味				
メンタルヘルス・ 健康				

- ① 10点満点で採点して下さい。②その点数の理由を記載してください(できている所を中心に)。
- ③次のステップとしての目標点数を記載してください。←
- ④ ③を達成するために必要そうなことを記載してください。 2枚目以降になってOKです。←

1. 【学業】について←

- ① 6点←
- ② オンライン授業であまり集中することが出来ていなかったけど、自分なりにテストやレポートを頑張ったからです。でも、一つだけテストが不合格だったことがすごく悔しいです。←
- ③ 9点←
- ④ オンラインでも集中することが出来るようになること。分からないところはわからないままにしないこと。←

2. 【生活全般】について←

- ① 7点←
- ②オンラインで外に出ることが少なくなったので、今まで以上に料理のやる気が出て、今まであまり作っていなかったものも作るようになりました。でも、体力がなくなったのか、バイトが終わり、家に帰ると、午前中ずっと寝てしまったりすることが増えました。←
- ③ 10点←
- ④無駄にしている時間を減らすこと。掃除にもやる気を出すこと。←

3. 【友人関係・対人関係について】←

- ① 4点←
- ②課題の分からないところとかを会えなくても電話などで一緒にできたことはよかったと思いました。誘われたりしたら遊びに行くけど、ひとりの時間がより好きになったので、気が乗らないということがちょっと増えてきてしまいました。←
- ③ 7点←
- ④もう少し友達を積極的に誘って活発になること。←

4. その他、ちょっと頑張っている事、ちょっと困っている事、要望など記載して下さい。 ←

最近はバイトを頑張っています。でも、威圧的なお客さんが来たりして、嫌だなとも思います。
ここで頑張って、威圧的な人の耐性がついたらいいなと思っています (笑)。 ←

←

5. Zoom や電話による面談を希望するか、希望しないか？を選んで○を付けてください。 ←

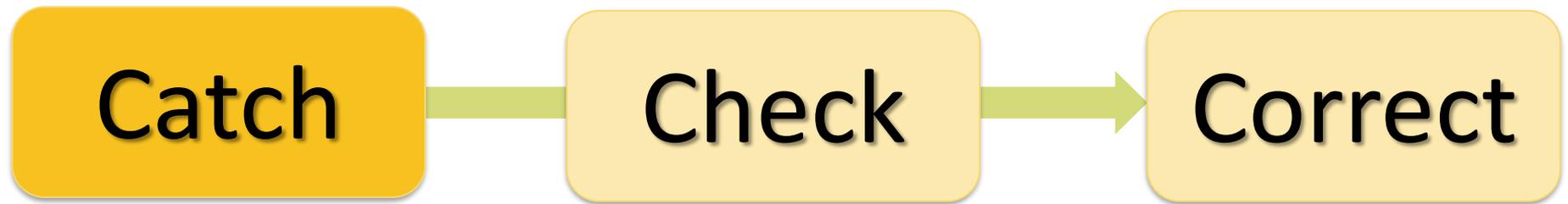
←

面談を希望する

面談を希望しない ←

←

学生支援における3つの“C”



問題を見つける
学生が援助要請する

問題の整理
しっかりと話をしてもらう

具体的な対応・対策
助言や指導

フレッシュヤーズ講座(導入教育)

アカデミックスキルズ

5. 金澤担当回(2回分)で考えたことや感想を書いてください

やるべきことは紙に書き出すのを、習慣化して、ABCで優先順位を行い、提出物の出し忘れや、スケジュール管理をしっかりと行こうと、あらためて感じました。資料がこれから増えていくので、百均でファイル等を買って、保管していきたいです。失敗を恐れずに、これからやりたいことを積極的に後悔だけはしないように、楽しい日々を送っていきたいと感じました。分からないこと、学校生活で困ったことがあったら、一人で溜め込まず、TAの方、先生方に頼り、悩みを少しでも解決して行こうと思います。

5. 金澤担当回（2回分）で考えたことや感想を書いてください

今までほやり方しかこだわってこなかったが今回の講義で
まずやり方も大事だがそこに行くまで手順が大事だと
考えそして今までビジネスメールを何も知らなかったためこれから
相手にメール送る時やバイトでのメールを送る時に役に
たつと考えました。

自分に適した勉強方法や学生生活の過ごし方についての授業
レポートを各担任にPDFで共有 → 要対応か否かの資料に

メンタルヘルスについて受療しない人の特徴

周囲からの受診勧奨がない

受診行動が難しい and/or 面倒と感じている

治療による効果を認知していない

メンタルヘルスケアへの否定的 or 偏ったイメージをもつ

抑うつ関連症状がある: 疲労感で行動力が低下

抑うつ症状への認知が低い

じゃ、どうしたら受療してくれるの？

What

伝えるべきメッセージや内容

How

伝え方・提示の仕方

メンタルヘルスケアを受療した人の特徴

症状の項目表示
チェックリスト化

わかりやすい利用の手順
専門部門のサービス、支援法の内容
負担の提示、重症や軽症での支援法

受診フローの提示
支援内容の紹介（視覚的にも）
事例を用いて手順や支援内容を紹介

受療により症状・状態が改善する
早期受療により重症化を防げる
性格や自分のこころのあり方の問題ではなく、脳の疲労状態のようなもの

支援の利益を視覚的に提示
早期、遅延受療の事例を2パターンで提示

「否定的な印象をもつのは仕方がない」
多くの人を利用し、改善したと感じている

統計的データを視覚的に提示
ターゲットに基づいた事例の利用

受診をしないことによる生活への悪影響
抑うつ症状についての知識
他者への援助要請の必要性

早期、遅延受療の事例を2パターンで提示
一般的な知識提供
受診フローの提示

援助要請スタイル

永井(2013)

援助要請 自立型	困難を抱えても自分で問題解決を試み、 どうしても解決が困難な場合に援助を要請する
援助要請 過剰型	問題が深刻でなく、本来なら自分自身で取り組むこと が可能でも、安易に援助を要請する
援助要請 回避型	問題の程度にかかわらず、一貫して援助を要請しない

過剰型: 援助を要請することで安心感を得ている。確認行為。

回避型: 援助を要請しないというよりも、できない。環境・関係作りが大切。

援助要請スタイル別の特徴

	自立型 <i>n</i> = 309		過剰型 <i>n</i> = 194		回避型 <i>n</i> = 122		得点 範囲	分散分析結果		
	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>		<i>F</i> 値	η^2	多重比較
悩み	3.79	(0.79)	4.07	(0.72)	3.83	(0.85)	1—5	8.48***	.03	過剰>自立・回避
ソーシャルサポート	3.85	(0.63)	4.12	(0.62)	3.40	(0.75)	1—5	45.82***	.13	過剰>自立>回避
抑うつ	0.84	(0.52)	1.02	(0.52)	1.14	(0.60)	0—3	15.42***	.05	過剰・回避>自立
利益・コストの予期										
ポジティブな結果	3.72	(0.71)	4.07	(0.68)	3.01	(0.92)	1—5	75.19***	.19	過剰>自立>回避
関係の深化	3.83	(0.87)	4.04	(0.88)	3.10	(1.09)	1—5	41.28***	.12	過剰>自立>回避
否定的応答	2.11	(0.75)	2.11	(0.75)	2.60	(0.97)	1—5	18.82***	.06	回避>自立・過剰
秘密漏洩	2.06	(1.00)	2.14	(0.98)	2.70	(1.29)	1—5	16.72***	.05	回避>自立・過剰
相手への迷惑	3.02	(1.00)	3.07	(1.00)	3.22	(1.05)	1—5	1.83	.01	
自助努力による充実感	3.47	(0.83)	3.17	(0.90)	3.61	(0.98)	1—5	10.96***	.03	自立・回避>過剰
問題の維持	3.37	(0.89)	3.84	(0.86)	2.96	(0.99)	1—5	37.15***	.11	過剰>自立>回避

****p* < .001

過剰型は悩みが多い。過剰型・回避型は抑うつが高い。
回避型はサポートが少ない、援助に対して「否定的応答をされる」と思っている。

看護学生が 実習指導者に援助要請する要因

質問項目	第1因子	第2因子	第3因子	I-T 相関
第1因子：非要請コストの自覚（4項目） $\alpha = .846$				
6. 自分が主体的に取り組まなければ、課題が解決しないと思うとき	.904			.739**
5. 聞いておかなければ、実習の目標が達成できないと思うとき	.804			.732**
7. 自分一人の努力では実習に関する課題が達成できないと思うとき	.677			.763**
4. 今、聞いておかないと、後では聞けないと思うとき	.544			.708**
第2因子：被援助利益の自覚（4項目） $\alpha = .702$				
21. 実習指導者は問題解決方法を知っていると思うとき		.702		.608**
13. 患者の全体像の把握ができていないと思うとき		.564		.629**
28. あなたが質問することを実習指導者が推奨していると思うとき		.557		.702**
8. 考えをまとめるための実習指導者の客観的な意見がほしいと思うとき		.549		.595**
第3因子：援助要請の方略の存在（2項目） $\alpha = .649$				
3. 病院や実習に慣れ、実習指導者との関係性ができてきたと思うとき			.722	—
2. 実習指導者に聞きたいことを自分がうまく説明できると思うとき			.648	—

「自分一人じゃ解決できない」、「援助を求めたらメリットがある」、
「実習指導者と関係性ができている。ちゃんと説明できる」
と、学生が感じることで援助要請が起きる

心理士を目指すTAの皆さんに望むこと

1. できる学生はもちろん、
放っておいたら孤立 ⇒ 休学・退学に繋がりそうな学生の予防
 - ➡教育支援室は常に扉を開けておく
 - ➡積極的に廊下や空き教室に出て**学生に声をかけて欲しい**
 - ➡**授業のTAの時にも**そういう学生に声をかけて欲しい
2. 教育支援室に相談に来てくれたら、まずは**来たことを認めて欲しい**
3. **話を聞く、整理、少しの自己開示**
 - ➡一回で解決ではなく、援助要請が継続するように
 - ➡学生相談室、担任、就職相談室など必要な情報を具体的に教育支援室(西郷先生)、学生部長(安部先生)、副部長(金澤)

- 
- 相手の状況や感情を無視して、「そんなこと悩んでるんじゃない」
 - 話に十分な理解も示さずに、上から目線でアドバイス
 - 無理やり論理的に解決させようとする



- そもそも援助要請しやすいような**環境・関係性作り**が大切
- **援助を求めてきたこと自体を認める**
- 何に困っていて、何が不安・心配なのか、何が不満なのかを丁寧に共感しながら聴く
- 適度に書き出してまとめ、質問も加えて整理を促す
- すっきりしたところで、協働で建設的な話し合いを
- 一度ではすべてを解決できない
→問題の整理と分類、スモールステップ
- **援助要請が続くように**

教員・事務員へのサポート

- 学生のメンタルヘルス問題は個別性が高い
- システムは重要だが、マニュアルのみでは難しい
- 心理学部では臨床教員がいるので何とか対応
- 支援者ではなく、教員としての対応の限界
- 学生にとって事務員はまさに「窓口」
- 事務員の皆様との意識や対応の共有も大切

学生からこんな声が増えないかなあ



優しい、接しやすい雰囲気です。相談しやすい。
情報がわかりやすいので、事務に行きやすい。
年齢的にも比較的近いこともあるし、あんな社会人になりたい。



さすが先生。言葉にしにくい相談を、うまく引き出してくれた。
ゆったり話を聞いた上で、どの先生や制度にどうやって相談すべきか
親身になって一緒に考えてくれた。
そもそも、必要な時に相談できる先生で助かるなあ。



大学生

ワークショップ (プロダクト)

学修が十分ではなく学業不振になっている学生へのサポート

グループ1
伊藤修一
中村宅雄
遠藤輝夫
山口由基

どんな学生が増えているか

低学年学生の現状

- 歯学・薬学は親の意向が強い学生がいる。
- 理学は途中でやる気が無くなる。低学年でモチベーションが下がる。低学年の科目で専門性が低い
- 臨床検査は、医療職に付きたいが患者と触れ合うのが煩わしいという学生が多い。他学部学生話すと、ギャップにびっくりする。入学後、こんなに勉強するとは思わなかった、という学生もいる。
- リハでは、入学者の半数が物理を知らない。基礎物理、数学の授業がある。

モチベーションが高いが学力が低い学生とモチベーションが低い学生の2種類がいる。

留年等の現状

・臨床検査・歯学・薬学は、1，2年でつまづく。高校時代に問題が・・・勉強についていけないのか、モチベーションが低いのか。どっちも？歯学は、低学年でサマースクール。

・理学は、3年生で留年が多い。3年で持ち越しできないので、1，2年は留年が少ない5人以下。他学部とは違う。

多重留年者への対応。
低学年で多重留年すると、その後学生がつらい。

学部で実施していること

- リハは、臨床実習中。低学年で、理学療法に接してモチベーションを上げる。コロナで縮小していたが、規模を小さくして再開。
- 薬学は学習支援室がある。

・リハも学習支援センターがある。学生が自由に勉強できる部屋。国試前には、同学年の学生をマッチングしてセットで勉強してもらう。



学生同士の方が聞きやすいし、先輩に頼むのもいいのかも。学生が自然にグループを作ってくれればいいが、難しい・・・
成績不振の方が孤立している。学生同士でマッチングが難しい。

方策

- 1年生は全寮制にしてもいいのかも。そこに先輩が来て、勉強を教える。他にバイトに行くより、大学でバイトさせる。
- 低学年のうちから学生を孤立させない。留年生も孤立させない。気軽に相談できる場所を作ってあげる。敷居が低い場所があればいいのでは。支援室のような場所に、先輩学生が居て教えてくれる。学生だけでグループが成り立つような環境を作る。中心となる学生がいないと成り立たない。リーダーに負担がかかる。グループ学習の設備も無い。
- 自分の現状を把握させる。モチベーションの上昇につながるのでは。
- 低学年から、グループを作ってあげるといいのでは。教員はサポート程度で関与する。教えると自分の知識も身につくと説明してあげる。薬学では4年からゼミ配属。部屋もあるので勉強環境がいい。他の学部では、場所がない・・・環境があって、いつでも勉強できる。しかも誰かが面倒見てくれる、がいいのでは。

• 学修が不十分な学生には
学習環境の提供、マッチングして同級生や先輩を紹介してあげる。

• モチベーションが低い学生には
低学年で将来像の見学、体験。モチベーションが高い学生と接する機会を設ける。学生同士が高め会える環境を作ってあげられるようにしてあげる。全学で寮生活にすると、仲間意識が高まるのでは。

テーマ (2) グループ2

学修時間は確保しているが、学修方法に課題のある学生へのサポート

中川宏治
藤田真理
伊藤加奈子
西出真也

小島弘幸
中川賀嗣

問題点

やる気があっても、成果が上がらずモチベーション低下
勉強の成果がテストに現れない、自分の理解度を認識していない



モチベーションの維持
学修理解度の認識

どのようにサポートしていくか？

具体的対応策

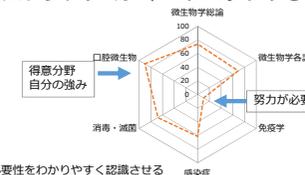
全体対応
担当：科目担当教員

- ・講義中に学生に対して課題や練習問題を解かせて理解度を認識させる
- ・課題を出してノートに解かせて添削（学生の理解度を確認、補足）
- ・より理解できそうな基礎的な資料を提示する
- ・国試などの難しい問題を動画解説を作成し、動画視聴後試験を行い、学修成果を評価する（動画などによる学修補助と成果の確認）

具体的対応策

個別対応
担当：担任や教育支援室

- ・学生が理解できないポイントを把握（分析・評価）
→学生にわかりやすくフィードバックする



- ・定期試験や国試対策で、わからないポイントを解説する
- ・模擬試験の順位やレーダーチャートで試験の結果を分かりやすく提示し学生のモチベーションを上げる

まとめ

個別対応と全体対応の相互フィードバックにより学修力を高める

個別対応した際の情報を共有し全体への指導に活かす

全体への指導では不十分な場合は個別対応



個別対応した際の情報を共有し全体への指導

個別指導の充実

- 理解できていない部分を認識させるために、学生の理解度を評価分析し、フィードバックする。
- モチベーションを上げるために、成績などをレーダーチャートを目に見える形で提示して指導を行う。
- 前の学年の情報を共有する。
(入学から卒業まで学生の成績を把握し、学修をサポートする)

テーマ3 合理的配慮が必要な学生への 効果的な支援体制

3グループ

早坂 敬明、豊下 祥史、飯田 貴俊、近藤 尚也

合理的配慮に関わるの考え方の整理

▶ 根拠法としての障害者差別解消法

- ・ 障害を理由とした差別を禁止
- ・ 合理的配慮の不提供の禁止（今後、努力義務から義務へ）
- 大学で障害の有無関係なく学習する権利の保障のために配慮を。
（障害があることを理由に権利が侵害されることが問題である）

▶ 合理的配慮

- ・ 過剰な負担とならない範囲（合理的な範囲）において、本人が求める配慮を行う（基本的には本人等から求めることでスタート）。
- ・ 合理的かどうかは一方的に判断するのではなく、**建設的対話に基づいて合意形成がなされることも重要**

▶ 教育的配慮

- ・ 教育上における理念や教員個人の善意に基づく工夫などが想定される
（合理的配慮とは違うものであり、整理しておく必要がある）

▶ 基礎的環境整備

個別性のある合理的配慮の前に、そもそも学習しやすい基礎的環境を整備しておくことも重要。（そうすることで合理的配慮を行う際の合理性も向上する）

▶ ユニバーサルデザイン

障害があってもなくても使いやすい・参加しやすい環境としていく（授業のユニバーサルデザイン化など、基礎的環境整備とも関連）

再意かもしれないが、本人が求めない一方的な配慮の押し付けになると、それは障害を理由とした差別ととらえられことも。

合理的配慮と、教育的配慮が混ざっているため、整理が難しくなったり、負担感が増加していることか？

合理的配慮だけではなく、関連する周辺の考え方の理解も大切

グループ検討で上がった問題点など

- 学生からの申し出が必要・申し出のしやすさの環境
- ・ 申し出について：学生が知らない・教員が知らない
- ※ 周知の状況について、学生に伝わっているのか？
- 学生、教員双方に周知する必要性、障害という語を使用しないことも必要では？（障害を認識してきない、認めたくない場合などから）
- ・ 建設的対話の展開 学生・教員の合意

- 合理的配慮と教育的配慮（学生本人からの発信のない教員判断に基づく指導）の区別が明確でない
- すべての教員の理解、共有が必要

グループ検討で上がった問題点など

- 事務的なものではなくて学生一人一人に沿った合理的配慮が必要
- ・ 担任制度について、持ち上げりに関して学部間で違いがある
- ・ 面談結果の共有に関してばらつきがある（面談結果などipotalに入力できるが閲覧権限は限られる、特に共通規格はない など）

- 基礎的環境整備（ユニバーサルデザイン化）
- 大学全体のルールにするか、合理的配慮の範囲にするのか大学としてどこをポイントとするか？
- 全体 / 個別に関するバランス

- 教員の負担

- ▶ できることの検討

教員も学生も全員で合理的配慮を知ることからスタートしていく

大学内での周知が始まったのも最近であり、十分にわからない・知らないといったところにある現状。(教員・学生ともに)

【取り組みのアイデア】

- 1 誰が → 障がい学生支援委員会が中心となって
- 2 どこで → 大学(学内)で
- 3 どんな風に →
 - ・FDとして(教員向け)
 - ・書面周知(教員・学生)
 - ・相談について入力Form等を利用して(学生向け)
 - ・啓発動画によるオンデマンド配信(教員・学生)
(理解するための情報にアクセスしやすくする)
 - ・事例報告による具体的な内容の共有(教員向け)
- 4 誰に対して → 教員(特に担任)、学生

【取り組みのアイデア】

- 5 どんなタイミングで → 年度初め、面談前、ガイダンス時 など

- 6 なぜそれをやるのか →

まずは、**合理的配慮そのものについて知ってもらうことが重要なポイント**であり、そこからの発展も期待。

- ① 学生に知ってもらうことで、ノートを見せ合うなど、他の学生がサポートに回ることも期待。(学生通しのサポート関係)
- ② 支援に関わる人員が増加する(学生もマンパワーに) → 教員の個別的な対応が中心だったことによる負担の軽減にも。
- ③ 学生に知ってもらうことで相互理解につながる。
(多様な学生像を相互理解することで、人間力の向上)
- ④ 教員も合理的配慮の考え方について理解することによって、合理的配慮として実施することと難しいことを判断するための判断、話し合いができるようになる。(合理的配慮ではない形のよりよい支援につなげることも)

グループ4 メンタルに課題を抱える 学生への対応

宮地 普子 (看護・福祉)
西牧 可織 (心理)
千葉 利代 (衛専)
金澤 潤一郎 (心理)

結論

教員・学生同士・TA・事務の方など **どこかで関係性を持つ**
ことが大事！

援助要請が苦手な人がメンタルに問題を抱えるため

午前中のレクチャーより 具体的に何をすれば...

歯科衛生士専門学校ではあまりメンタルの問題がない？でも、発達障害や学習障害があるかも。グレーな学生も増えている。そういう学生にどのように対応したら良い？ **初心者でもできることはある？**

⇒ **キャッチが大切。状況把握シート**を活用してみては？

導入教育で状況把握シートを活用するのが重要。定期試験で複数科目で不合格になって気づいても遅い。

午前中のレクチャーより 具体的に何をすれば...

現状把握シート後に面談希望しないという学生にどうする？

⇒ 教員から気になる学生には **個別に面談への促し**をする

4月の初めに教員が一方向的に話すのではなく、学生主体で話をさせるためにも、先に現状把握シートを書いてもらうのは良いかも。

⇒ 4月に **趣味など本丸以外の話**をするのが良い。

ちゃんと担任が見ようとしても見れてないことがある。

⇒ **1限目を休んでいる学生をキャッチ**するのが良いかも？授業の感想に **文章量が少ない。全く書かない学生**も要注意。

支援が必要な学生のポイントは？

化粧、洋服の変化、辛い物が食べなくなるなどの**行動的な変化**がある。蕁麻疹や過敏性腸症候群など行動に変化が出る「**ストレスマーカー**」がある。それを教員と学生でお互いに把握しておく。

高校の様子。**通信制高校や元・ひきこもり**など確認。順調そうでもストレスがかかると弱い可能性も。

教育支援室は機能している？

あまり機能していないこともある

学習サポート支援が組成されていて定期的に話し合いもある

教育支援室に来てもらうための**関係性作り**

現状で機能しているサポートは？

予防は第1層や第2層でそれなりにできている。

⇒実習など**ストレスがかかる場面では早めに**聞き出している

メンタルの問題が起きた後がシステム化されていない。

欠席状況を教員間で把握している⇒**他教科も含めた学生動向の把握**

本当に必要なサポートは？

学生同士のサポートも大事。本人以外の周囲への知識の共有も大切。本人以外の学生からの情報も大切。

⇒学生全体への**メンタルヘルスの知識の普及**も必要かも

⇒基本的な知識＋気づいた時の対応

⇒多様性を知るという意味でも重要では？

⇒UPIなど**メンタルヘルスをチェックできるツール**を活用？

⇒**自分で気づける**ようにフィードバックも

学生相談室が大学としての支援。**どんな支援があるか？を明示しておく**と援助要請が変わりそう。似顔絵アプリなどで顔出しも。

就職支援・就職後の支援

事務の方にも協力をお願いしたい

学生が事務の方とやりとりする時間がかなり多い！

事務員(学部、学生支援課など)さんや学生相談室の皆さんの簡単なプロフィールなどで顔と名前を覚えてもらう。**親しみを持ってもらう**

今日のFDにも参加して意見交換を

教員⇄事務で連携がとりやすくなる

事務の方の方が学生動向がわかるのではないか？ 支援要請など各種書類などが提出されているはず

FD/SDの実施

そのほか

発達障害の学生との関わりについて

自分から発達障害と告白する学生も

発達障害の学生はそんなに多くないので個別対応。グレーゾーンの学生

卒業後のこと就職

大人の発達障害についての知識

授業の中で発達障害について知る機会があれば

学生が相談してよかったと思えるには？

⇒TAへの指導より：**結論は急がない、関係性を築く、話ができたとすることをよしとする、1回では解決できないので継続できることが大事**

まとめ

関係性を作りキャッチすることが大事

現状把握シート・ストレスマーカーによる状況把握・高校時代の様子も

事務局の方も関係性作りにはぜひご協力いただきたい

ワークショップ (感想)

2022年8月4日開催の全学FD研修(テーマ偏)「学生を中心とした教育をすすめるために～要支援学生への新たな学修サポートシステムの構築について～」では、午前中のレクチャーでは、「学修時間は確保しているが学修方法に課題のある学生へのサポート」というテーマで、薬学部での活動事例報告をさせて頂き、また、午後のワークショップでも同テーマでグループワークに参加させて頂きました。私は薬学部の薬学教育支援室という学習サポートを行う部署に所属していることもあり、今回のFD研修の内容は大変興味深いものでありました。午前中のレクチャーや午後のワークショップを通じて、参加した先生方から学修サポートに関する様々な事例や貴重なご意見・お考えを伺い、多くの気づきや新たな発見があり大変勉強になりました。

今回の全学FD研修で学んだことを自分なりに消化し、今後の要支援学生への学修サポートに生かして参りたいと考えております。

(薬学部 中川 宏治)

今回のFD研修は、グループワーク担当で参加した。テーマは、合理的配慮が必要な学生への効果的な支援体制というものであった。今回のFD研修に参加するまでは、合理的配慮の正確な意味を理解していなかった。しかし、特にグループワークをしている際に、リハビリテーションや看護福祉の先生から正しい意味を聞き、学ぶことによって、合理的配慮を教育的な配慮と意味を取り違えていたことに気づき、今まで担任として対応して来た学生の多くは、精神心理的な合理的配慮が必要な学生だったのではないかと思った。大学と協力しながら、もう少し早く学生にとって効果的な学習方法を検索し、適応できればよかったのかもしれないと感じた。

医学の進歩により、色々な疾患がわかり、それに対する治療薬やカウンセリング治療法も進歩しており、精神心理的な合理的配慮が必要な学生の対応が増えて来ると思われるので、今後もメンタルヘルスに対するFDセミナーの開催をFD委員会にお願いしたい。

また、実臨床での薬剤師の経験から、精神心理的な合理的配慮を有する学生の場合、卒業後の就職について教員も大きく頭を悩ますところであり、サポートの方法などの研修をしていただければ、今後の学生対応について心強いのではないかと思います。

(薬学部 早坂 敬明)

今回のワークショップでは、学習が十分ではない学生の対応をどのように行うべきか、を考えました。多くの学部で、該当の学生は、入学時点での学力が低く学修についていけないもしくは将来像が見えずモチベーションが低い学生に分けられると推察されました。コロナ禍もあり、学生同士のコミュニティにうまくなじめない学生が、負の連鎖に落ちてしまう例があるようでした。

私は、低学年で勉学に不安がある学生をサポートする部屋に所属しています。低学力者向けのサポートばかりを考えていましたが、少人数のコミュニティを作れるような支援も大切なのだと改めて感じました。

また、午前中のレクチャーでは歯学部でサマースクールを開講していると伺いました。勉強を教えるのではなく、勉強のやり方を教えるそうです。薬剤師国家試験でも、文章や図の読解力が必

要となるので、歯学部サマースクール方式も取り入れさせていただきたいと思いました。

(薬学部 山口 由基)

今年度の全学 FD 研修会は、「要支援学生への新たな学修サポートシステムの構築について」というテーマで行われたが、他学部の先生方とディスカッションする中で、学部によっても、学生の気質や悩みが異なっていることが明らかになった。

現在、歯学部においては、成績が振るわない学生に対して、様々な方策を行っている。1 年次には、夏季休暇を利用して、サマースクールを行い、講義の聴講の仕方、ノートの取り方から始め、定期試験に向けた、勉強の方策を立てるなどを行っている。今年度は、参加した学生には、一定の成果が報告された。継続した学生支援を続けていく上で、薬学部が開設している教員が常駐している学習支援室のような取り組みが、歯学部においても必要と感じた。また、専用寮が出来たことで、ここに大学院生のチューターを配置することで、学習に不安がる学生に対応できるのではないかと考えている。また、他学部の先生方と情報共有をしながら方策を立て実行することが必要だと感じた。

(歯学部 伊藤 修一)

「学生を中心とした教育をすすめるために」というテーマに則り、要支援学生への新たな学修サポートシステムの構築を考える研修会であった。午前中はプレナリーセッションとして、4 名の講師の先生方が、学修不足の問題を抱える学生、学修方法の問題を抱える学生、合理的配慮が必要な学生、メンタルに問題のある学生への取り組みや考え方についてご講演をいただいた。いずれのテーマについても、自分自身の身近に思い当たる学生がおり、講義、実習の指導に当たっては頭を悩ませる点が多い。今回のレクチャーは参考になる要素が多かった。

後半はグループワークとなり、「合理的配慮が必要な学生への効果的な支援体制」についてのディスカッションを行った。4つのテーマのうち、私にとって最も経験、理解の浅い内容であり、合理的配慮とはどのようなことなのか、合理的配慮の基本的な考え方などについて他の先生方から教えていただき、得るものが大変大きかった。どうもありがとうございました。

(歯学部 豊下 祥史)

近年「長時間勉強しても成果が出ない」学生が増えている。本ワークショップでは、この問題に対する教員による効果的なサポートについて検討を行った。

情報交換後の意見交換では、「学生ごとの個別対応が望ましい。個人面談等で状況を把握し、問題点を見つけてわかりやすくフィードバックし、理解を促すこと」が一番効果的という統一見解が得られた。

しかし、実際には個別対応は時間・空間的制約があり難しい。そのため、まずは学生全体に同じ課題を与えて各自の弱点を簡易的に抽出、かつフィードバックして適切な学習を促し、それでは不足があるとき個別対応するシステムを検討した。個別対応の経験や情報を全体対応に活用す

ることで、より充実した指導が可能となる。ただ、学生の理解度を評価・分析してフィードバックする手法は教員の負担も大きくなるため、今後効率的なシステムの検討が必要である。

今回の FD で各学部における学修サポートの取り組みについて学ぶことができ、大変有意義であった。

(歯学部 藤田 真理)

今回のワークショップの課題は関心があり自分自身の学生支援の課題とも感じていたため、とても有意義な時間だった。とくに、心理学部の手書きによる現状把握シートの活用と全教員で欠席学生の情報を把握できる方法が参考になった。

午前中にレクチャーをしていただいた金澤先生に入っただき議論の要点を整理しながら進めていただいたため、グループ内では各学部の現状や考えを自由に発言し、具体的にアイデアを出しながら考えることができた。ワークショップ前に説明があった作業ステップ1～5の通り実施することに縛られすぎると、自由な意見が出なくなると感じた。

今回の検討の結果、初年度の開始直後と定期試験前、実習などの大学生活のストレスのかかる時期に対応する仕組みと学生のメンタルの状況をキャッチする方法、事務局を含めた学生へのサポートのあり方など、取り組むべき課題が明らかになった。グループの検討では具体的な対策を挙げることができたため、これらが実現されることを望む。

(看護福祉学部 宮地 普子)

合理的配慮について、身体障がいとは比較的物理的な環境整備(機器などの設置など)にて対応できるため、配慮も比較的わかりやすいと思うが、近年増加傾向がみられる発達障がいや精神障がいなどは個別的な対応の必要性も多く、しっかりと本人や保護者と対話をしながら合理的配慮を考えていく必要がある。この対話の在り方や進め方について、教員が十分に理解しておくことが必要であると考えます。手順が整理されると良いかもしれない。

また、学生自身が自身の障がいの認識が不十分であったり、障がいということを否定的にとらえてしまう場合があったりなど、窓口や仕組みが整っても、自らの発信が難しく、配慮に結びつかないという課題も考えられ、学生自身の合理的配慮そのものへの理解や意識的なハードル(障壁)をなくしていく取り組み、配慮の必要性を気付かせるアプローチも必要だと感じた。

さらに、合理的配慮の以前に、誰もが学びやすい基礎的な環境が整備されていことで、個別の配慮の度合いを低減することもできるため、そうした環境を整えていくことで、結果として教員が個別に行うべき内容・負担なども減り、効果的に合理的配慮が実施できるのではないだろうか。

合理的配慮に関するワークショップに参加した中で、合理的配慮に関する情報の発信が学内でも見える化してきたのが最近であり、まだ十分に浸透していないことも確認できたため、しっかりと教員や学生が知る、わかることのできる機会を作っていくことも必要であると感じた。

(看護福祉学部 近藤 尚也)

学習方法に課題のある学生の問題として、基礎的な知識の他、読解力や語彙力、思考力、関連付けなどがあり、この多重的な課題をどのように学生自身に気づいてもらうか、学習意欲につなげるかという点で検討する良い機会となった。

私自身は、看護学実習における学習指導が、学生の個別的な課題を明らかにする機会となると考えており、その課題を学生と共有することで学習方法の方向付けや動機付けに繋がりたいと考えている。しかし、人員不足や実習期間が限られているなどの課題があり、継続的な支援の難しさがある。その点に対応するためにも、全体的な学習支援の必要性や効果的方法を検討する必要性について、今回のワークショップを通して改めて感じた。

全体に対する理解度の確認・補足や必要な支援の検討は現時点でもある程度行っているが、成績などのデータを元に根拠と予測をもってある程度系統的に支援することが今後の課題であると感じた。

系統的な全体支援と定期的な個別的支援の双方が必要であり、学生へ個別的なフィードバックを行いつつ卒業年次まで継続的に支援していくような学修サポートシステムを構築することができれば、その時々学生が抱える学修上の課題や対応を検討しながら、学生の学力を伸ばしていくことが出来るのではないかと考える。

(看護福祉学部 伊藤 加奈子)

「要支援学生」と一言でいっても学生ごと多種多様な背景があり個別対応が必要で難しい部分が多いため、午前中に実施された様々な角度からの対応事例報告は大変勉強になりました。

午後からのワークショップでは、普段あまり接することがない他学部の先生方と、各学部での対応の違いや、共通の悩みなど意見交換ができて大変有意義でした。参加したのは「メンタルに課題を抱える学生へのサポート」というテーマについてディスカッションするグループでした。メンタルに課題を抱えた学生への対応はセンシティブな部分を大いに含むため、どのように対応すればいいのか悩むことが多かったのですが、状況把握シートの活用や、結論を急がないこと、情報共有の重要性など有益な話し合いができました。そして、まずは何より学生との関係づくりが非常に重要であると認識させてくれた良い機会となりました。

今後の教育改善に繋がっていきたいと思います。

(心理学部 西牧 可織)

今回の全学 FD 研修(テーマ編)は『学生を中心とした教育をすすめるために～要支援学生への新たな学修サポートシステム構築について』ということで、学修に課題がある学生への対応について、午前中に講義、午後はワークショップ、発表という充実した内容でした。

まず、事前の班分けの連絡や資料の共有など、事前の段取りがすばらしく、前もって資料に目を通し、予習した上で安心して参加できました。午前中のレクチャーはいずれも興味深い内容で、大変参考になりました。特に心理学部の金澤先生のレクチャーで紹介された質問フォーマットは明解で、対応の筋道を立てる意味で非常に有用だと感じました。午後はグループディスカッション

ンをおこないました。歯学部、薬学部、看護福祉科学部の初めてお話しする先生方との話し合いは、当初緊張しましたが、意見交換を経て、徐々に打ち解けていったように感じました。ディスカッションはスムーズに進行し、ほぼ時間丁度でプレゼン作成まで終わらせることができました。テーマは午前のレクチャー3にあたる『合理的配慮が必要な学生への効果的な支援体制』でした。現状では合理的配慮申請への認知度が低く、その存在を学生・教員に知らせることがもっとも重要な事項であると結論付けました。発表は滞りなく行われ、無事この日のFDを終えられました。

FD全体を通して、あらためて学生教育とは何か、という深い問いに教員として丸一日考えることができたのは貴重な体験だったと感じました。

(リハビリテーション科学部 飯田 貴俊)

研修の背景として(自身の課題)

他学部では数年前より学生の低学力化が問題になっておりましたが、所属する作業療法学科ではこの1～2年で大きく学力低下が起こっていることが実感され、このタイミングでの企画はとてもタイムリーであると感じました。

本学に赴任した5年前の当時の作業療法学科において個別対応が必要な成績下位層の学生数は少なく(学年で4～5名程度)、担任が日々の業務の合間に個別指導を行うことは十分に可能でした。しかし現在は当時個別対応をしていたレベルの学生が学年の約半数を占めるようになり、担任や科目担当による個別指導に限界を感じ、新たなシステム作りを模索していたタイミングでの開催でした。

研修内容について

複数学部の教員が集まったのグループワークでは、各々の所属学部での事例を交えて表題のテーマについて議論しました。低学力化については「先行」している学部もあり、新しいアイデアを多数知ることができ大変収穫の多いグループワークとなりました。グループの結論としては全体の報告にある通りですが、先行している学部とリハとでは学生対応のシステム化の度合いが大きく違うように感じました。リハでは各教員が学生に合わせて個別に対策を考えているのみであることが多いのに対し、学生の得意不得意分野や学生がわからなくなったポイントなどを客観的に分析し、また過去の事例との比較を行っていることを知り、ぜひ今後の学生対応に取り入れたいと思いました。

本研修会の企画運営をしていただきました全学FD委員の皆様、教務企画課の皆様にご感謝申し上げます。

(リハビリテーション科学部 西出 真也)

今回のFD研修会に参加させていただき、大変勉強になり有意義なものとなった。

今回のFD研修会ワークショップでは、「学修が十分ではなく、学業不振になっている学生へのサポート」というテーマで他学部他学科の先生から、さまざまな取り組みや現状を知ることができ

た。近年の入学者は、不本意で入学してきた学生や無本意で入学してきた学生が多くなってきており、学修が十分なされていないことなど本学科だけではなく、他学部他学科も同様の状況にあることを再認識する機会となった。

取り組みとして印象にあったのは午前中の講話でも紹介のあった歯学部の「サマースクール」であった。このような取り組みは本学科においても取り入れて行ければ良いのではないかと思われた。

全体を通して、今抱えている問題点を再認識できたと同時に、対策について取り組んで行かなくてはならないと感じた。

(リハビリテーション科学部 中村 宅雄)

今回のWSでは「メンタルに課題を抱える学生へのサポート」について意見交換を行った。

WS内では他学部の状況を知ることができるとともに、心理科学部の金澤先生がグループに入っていたこともあり、専門家の意見やアドバイスを聞くことができ非常に有益な研修であった。

近年メンタルに課題を抱える学生が増加しつつあると感じる。中には自らが「発達障害である」と訴える学生もいる。メンタルに課題を抱える学生と向き合うためには、まずは、『Catch』する(学生の抱える問題を見つけ、学生が援助要請できる環境を作る)ことが必要である。

しかし実際は、面談時に学生の話に傾聴しているつもりが無自覚的に助言、説得、指導をしがちになり、学生の援助要請に気づけなかったりすることが多く、自分自身がこの課題にしっかり向き合えていないため対応が不十分になっているのが現状である。

今後は今回のWSでの学びを生かし、まずは自分自身をもっとメンタルヘルスに関する知識を持って学生を長期的(入学～就職まで)サポートできる体制を整えたいと思う。

(歯科衛生士専門学校 千葉 利代)

F D 委員 感想

令和4年8月4日に、「要支援学生への新たな学修サポートシステムの構築について」というテーマで、令和4年度全学FD研修会がオンライン開催された。筆者はスモールグループ・ディスカッションのファシリテーターとして、「学修が十分でなく、学業不振になっている学生へのサポート」をサブテーマとするスモールグループの議論に参加した。

まず、各学部の参加者より、どの学部でも一定の割合で学修に対するモチベーションが低い学生がおり、学業不振や留年につながっている現状が報告された。その対策であるが、薬学部における学生支援室のように、学生が相談や質問に行きやすい環境を整えることが大切であるという意見が出された。それに対し、そのような環境を整えても、支援を求めず、孤立している学生が問題ではないかという意見が出された。そのような学生は学業が不振だけでなく、友人がおらず、大学へもしだいに来なくなるという現状が紹介された。

討論の結果、対策としては新入生の時からグループ学習を促進して、学生同志で教え合うような習慣を形成するのが効果的なのではないかという結論に達した。一方、優秀な学生に学業不振な学生のサポートをさせるのは、逆に優秀な学生に負担をかけるのではないかという懸念も提出された。

本日の議論は今後の学部教育を考える上で非常に有益であると思われた。

(薬学部 泉 剛)

Bグループ「学修時間は確保しているが、学修方法に課題のある学生へのサポート」のワークショップにFTとして参加した。薬学部・中川先生と20～30代の若い先生3名の計4名によるグループ討議となった。中川先生がリーダー役となり、若い先生方の意見を聞き出す形で順調に進行した。各学部で状況は異なるが、共通して学力低下の学生が増えている中、課題として本人が学修方法自体を理解できていない点が挙げられた。自分のレベルが分からない学生へは、模試の順位や教科レーダーチャートを使用して本人の学修に対する意欲を高めることや、文章の内容を読み取れない学生へは個別に指導し、一緒に探し提示する努力が必要などの意見が出された。ただし、薬学部や歯学部で先行している個別指導が常態化すると教員が疲弊することが懸念された。まとめとして、個別対応した情報を教員間で共有して全体指導に濃淡を加える必要があるとの結論に達した。

私個人としては、少子化ではあるが、入試段階で今よりもレベルの高い学生を如何に確保するかが最重要課題として考えられた。本学の魅力を更に発信する努力が必要である。

(薬学部 小島 弘幸)

今回はFD委員として、午後のワークショップのファシリテーター担当であった。初めて顔を合わせる参加者のために、アイスブレイクとして自らが自己紹介の口火を切り、和やかな雰囲気になる様に心がけた。幸い、グループの役割決めも滞りなく進み、話し合いがスタートした。

テーマに沿っていろいろな意見が出てきたが、画面上での話し合いだとは言え、時間が経つとグループとしての凝集性が出てきたように思う。110分の時間の中で、ちょっとした仲間意識のようなものが育まれたように感じた。ファシリテーターとしては一安心であったが、グループダイナミクスがうまく作用して、プロダクトの完成へと流れていったように思う。

参加者個々人の感じたことは確認できなかったが、ファシリテーターとしての役割は、一定程度果たせたかと思っている次第である。

(心理学部 今井 常晶)

2022年度FD研修会〈テーマ編〉へ参加させていただきまして、ありがとうございました。当日は試験監督業務のため、午後からのワークショップを欠席となり申し訳ありませんでした。

午前での各学部からの教育支援の在り様についてレクチャーいただき大変勉強になりました。昨今の学生の修学能力の低下に対し、学部それぞれで問題を明らかになされ、対応され

ているご様子を伺い、今後の自分の学部ならびに担当している学生たちへの支援に生かしていきたいと思えます。

ワークショップに参加することはかないませんでした、各グループで討論なされたことのプレゼンテーションを拝聴させていただき、勉強になりました。

学生への教育支援は今後も検討する必要がある議題だと思えます。継続した協議をすることでより良い学生支援につながるのではないのでしょうか。

(心理科学部 百々 尚美)

本研修で一番ためになったことは、ワークショップ形式で様々な先生方と話し合いができたことである。学部ごとに学生の特徴や大学でのゴールも違う。また教育や学生支援のシステムも異なる。それらを踏まえて、メンタルヘルスに問題を抱える学生への支援の現状や問題点、具体的な支援の実際などをお聞きできたことが学びとなった。一方で学部横断的な視点での今後求められる支援や見解を見出すこともできたように思う。

具体的には、メンタルヘルスに問題を抱える学生に対しては、いかにそのような学生を見つけるか、そして援助要請をしてもらえるかについての対策が重要ということである。教員はもちろん、大学院生やTA、事務員(学部、学生支援課、就職支援課など)から学生に声をかけるなど相談しやすい環境や状況を作る必要があることの重要性を再確認できた。

(心理科学部 金澤 潤一郎)

午前中のレクチャーは、どれも大変勉強になりました。テーマの(1)と(3)について書きます。

(1)まず、世界規模の歯科医師の状況から、学生の個別対応の状況まで幅広い内容でした。大変、聞き応えのある内容でした。世界規模の視点から、学生の動機付けを考える事も新鮮でした。学部の対応状況も、知る機会がほぼないので、今後の教育の参考になりました。特に、歯学部のサマースクールに関しては、人手さえあれば、どの学部でもすぐに実行できるように感じました。もちろん、相当な準備が必要とは思いますが。

(3)合理的な配慮が必要な学生への言語聴覚学科の対応は、事前配布のPPTだけではポイントがにわかには、わかりませんでした。一方で、講演の内容は、大変本質的で、意義のあることと感じました。確かに言葉で表現するのが難しいテーマでありました。学生の置かれた状況と、大学の学位授与方針との乖離を埋める作業に困難があることを理解しました。それでも、解決策を得たことに、大変感銘を受けました。午後のワークショップでも、多様な意見や問題点が出されており、有意義なものとなったと感じています。

(全学教育推進センター 鈴木 喜一)

総合評価

令和4年度 北海道医療大学全学FD研修（テーマ編） 実施結果（参加者アンケート集計結果）

<実施概要>

開催日：2022（令和4年）年8月4日（木）

開催方法：Zoom

メインテーマ：学生を中心とした教育をすすめるために

サブテーマ：要支援学生への新たな学修サポートシステムの構築について

<アンケート集計概要>

回答者：54名（ワークショップ参加者 22名 [FD委員含む]、視聴参加者 32名）

※延べ参加者数 113名

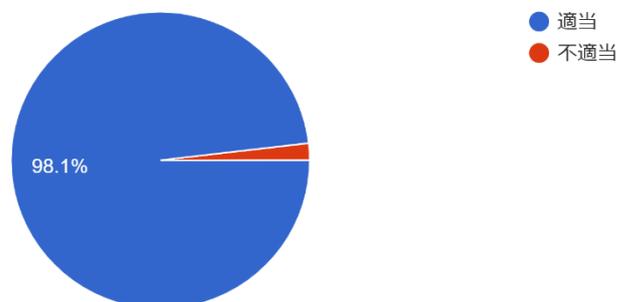
Q1. FD研修の日程について

今回のFD研修の日程は適当でしたか

適当	不適当
53	1

Q1

54件の回答



Q1-2 Q1で不適当を選択した方へ

不適当とご回答の場合はその理由やご意見をお願いします

- ・定期試験期間中のため、試験関連業務と重なってしまう

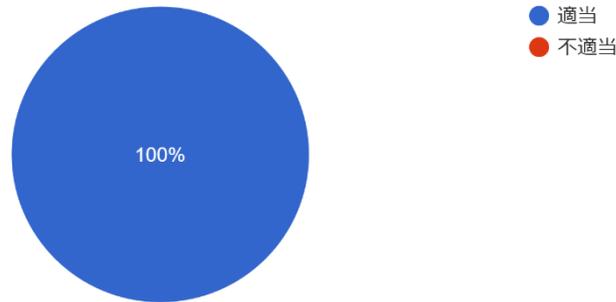
FD研修の時間配分について

Q2. 時間配分は適当だと感じましたか

合計	適当		合計	不適当	
	WS参加	視聴参加		WS参加	視聴参加
54	22	32	0	0	0

Q 2

54 件の回答



Q 2. で不适当を選択した方へ

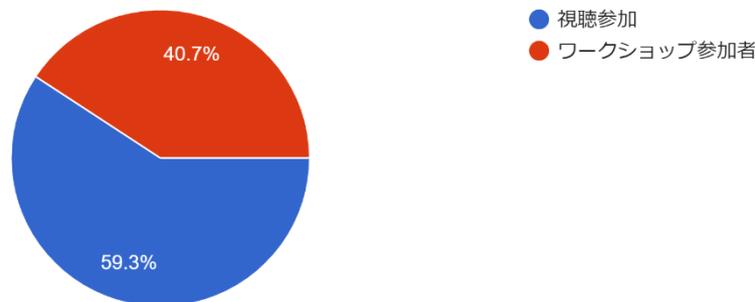
Q 2-2. 不适当とご回答の場合はその理由やご意見ををお願いします
回答なし

アンケート回答者の参加区分について

ワークショップ参加	視聴参加
22	32

視聴参加またはワークショップ参加の確認です

54 件の回答



ワークショップについて

Q 3. ワークショップについてのご意見、ご感想をお願いします（回答はワークショップ参加者のみ）

- ・他学部の取り組みを知ることができた。
- ・時間通りに進めることができました。ファシリテーターの先生のアドバイスが非常に的確でした。ありがとうございました。
- ・とても勉強になりました。
- ・私自身がよく知らないテーマだったので大変勉強になりました。
- ・具体的な意見交換が出来て、とても良かった。
- ・他学部のお話が大変参考になりました。
- ・他学部の先生とコミュニケーションでき大変有意義であった。全体としては非常に勉強になりました。ただ最後の発表者で規定の10分を大幅に超えて発表された先生がいて、その後の質疑応答ができずに残念でした。
- ・教育現場に日常的に問題になっているテーマについて、非常に有益な討論がなされたと思います。

- ・まさに自身が現在直面している問題についてのテーマだったのでタイムリーでした。
- ・要支援学生に対する様々なサポートの有り方を知ることができて大変有意義でした。今後の教育活動に生かしたいと思います。
- ・関心がある内容でしたので、参加してよかったです。他学部の取り組みも聞けて、取り入れたい内容も多くあり、有意義な内容でした。
- ・他学部の会議では上がってこないけれど重要な学生対応など、貴重な意見を聞くことができてよかったです。また、午前中にレクチャーがあったため、話し合いのポイントも事前に整理できたのがよかったです。
- ・知らなかったことが多く、大変ためになりました。
- ・いろんな学部の方針や実際の対応などを情報共有することができ、勉強になりました。遠隔のワークショップは初めてでしたが、プロダクトのまとめはいつも以上に難しい気がしました。
- ・合理的配慮に関する基本的な理解が改めて大切と思いました。すでに様々な取り組みをしているところもあるので、それぞれを整理して共有できると行こうかと思いました。個別に対応すべき点、大学システムとして実施すべき点を整理していくことも必要ではないかと思いました。
- ・興味深い内容だったので学びが深かった。
- ・議論が止まず、テーマの重要性を再認識した。
- ・他学部における要支援学生に対する対策などを知ることができ、今後自身が指導を行うにあたり大変参考になった。全体的な取り組みとしてできると良い事と、やはり個別対応でないといけない面と感じ、人員の問題や共通認識を持って系統的に行う必要性など課題を感じた。
- ・各学部の先生方と話ができて、参考になりました。

FD研修全般について

Q4. 今回のFDでよかった点、悪かった点についてご記入願います

<良かった点>

- ・他学部の取り組みを知ることができて意見交換できたことが良かった。
 - ・具体的な取り組みの例を教えていただけて大変良かったです。
 - ・テーマが良かったと思います。
 - ・Zoomとオンデマンド有り。
 - ・よく議論ができました。
 - ・他の学部の状況、意見が聞けてよかったです。
 - ・少人数で話せる点が良い。
 - ・良い点はQ3同様。
 - ・これまでディスカッションする事がなかった点を勉強できた点が有意義でした。
 - ・特になし。
 - ・特に他学部の先生方とゆったりと話し合いができて勉強になりました。丁寧にご準備くださってありがとうございます。
 - ・時間配分が適正でした。テーマの選択も良かったです。
 - ・他の先生の意見を聞いたり、話し合いを通じて考えが整理され良かったと思います。プレゼンテーションに対する視聴されている先生方の意見が聞けたらよりよかったです。
 - ・様々な要支援学生に対するサポートの現状を知れた点。
 - ・午前中のレクチャーによる導入が良かったです。
 - ・午前中にレクチャーがあったことが良かった。
 - ・テーマが時宜を得ている。
 - ・いろんな学部の方針や実際の対応などを情報共有することができ、有意義でした。カリキュラムや教育支援室の充実など学部間でかなり違うため、全学統一の教育コーディネーターがいるとよいと思いました。
- さまざまな方向での学習支援については各学科で問題になっていると思うので内容としては良かったと思う。
- ・午前中のレクチャーが素晴らしかった。悪い点なし。
 - ・例年一定数存在する学修支援の必要な学生に対し、自分なりに学修支援を行っていたが、改めて考える機会となった。他学部での対応策を知ることによって関わってきた中で迷っていたことの示唆を得られたり、新たに精神面や発達障害学生に関する支援について考えることができた。
 - ・学力低下は全学の悩みだと思うので、今回のFDテーマは良かったと思う。

<悪かった点>

- ・グループにすべての学部の先生がいらっしやらなかったので、学部間の情報の話になったときに情報が少し不足しました。
- ・悪かった点は一部の発言者のタイムマネジメントくらいです。
- ・悪かった点は特にないが、わかっているにもかかわらず実行が難しそうだという事が再認識された。
- ・悪かった点：特にありません（2件）
- ・全てのグループでスライドのフォーマットをそろえた方がわかりやすいと思った。
- ・時間が足りず、プロダクトがかなりシンプルでした。すみません。多様な視点や事例について共有いただけて良かった。全体テーマについていずれかに焦点を当てて、もう少し深めてもよかったように感じた。

<視聴参加者からの意見>

- ・メンタル的サポートについて非常に勉強になりました。
- ・具体的な対応策を提示いただき勉強になりました。
- ・各学部の問題点を共有できたこと。
- ・テーマが良かった。
- ・各学部の様子がわかった。
- ・興味深いテーマをオンラインで気軽に拝聴できて良かった。
- ・他学部での問題点やそれに対する改善点などの具体的な内容を把握することができて有意義でした。
- ・オンデマンドで参加できるシステムは便利だと思いました。
- ・時間超過がいくつか見られたので、もう少し時間厳守をしても良かったように思います。内容的には個別対応が必要な部分が多いため、中々答えは出づらいものであったと思いますが、合理的配慮など、あまり理解していない部分もあり勉強になりました。
- ・良かった点：要支援学生への学修サポートシステムについて議論する機会を設けていただき大変勉強になりました。悪かった点とは言い難いのですが、サポートシステムについて4名の演者のお話は大変勉強になりました。できれば一つ一つのテーマについて掘り下げる時間があればと希望します。
- ・学力以外の支援サポートについて知ることが出来た点が良かった。
- ・色々な観点からの学生の支援の方法を学ぶことができた。留学生への対応についても議論があると良いと思いました。
- ・本学が直面している重要なテーマを取り扱ってくれたのが良かったと思った。
- ・本テーマが私の興味と合致していました。
- ・他学部の取り組みが参考になりよかった。
- ・FDを通して各学部の学習サポートについて少し理解できた。
- ・今後の学生教育、特に入学者の学力低下や学生の質の変化に対応したテーマ設定が良かったと思います。
- ・各学部での取り組み等について知ることができて良かったと思います。
- ・合理的配慮についてよく理解できていませんでしたので、テーマとして取り上げていただくことで触れる機会、考える機会とすることができました。
- ・残念ながら全部を聞けませんでした。学生の担任業務に必要な事が理解できました。
- ・各学部での現状や改善に向けて実際に導入されている取り組みについて理解でき非常に勉強になりました。
- ・テーマがはっきりしていてワークショップの内容がテーマと乖離していなかった。一方でテーマが4つありワークショップの討論時間・発表時間に対して多すぎるように感じられた。
- ・学生のような問題を共有できて良かったです。
- ・メンタル面で不安がある学生に対してのサポートについて専門的な意見を聞いてよかった。
- ・要支援学生に対するケアの具体的な対策が示されており、ためになった。

今後のFD研修に向けて

Q5. 今後のFD研修で取り上げるべきテーマなどのアイデアがあればご提案ください

- ・入学前教育など。
- ・高校生への広報的アプローチについて。
- ・国試合格率アップへの方策。
- ・入学者確保について。

- ・目に見えにくい（他者が認識しにくい）障害を持つ学生への対応について。
- ・今後想定される低学力化の進行、進級基準緩和の容認に伴う卒業したが、国家試験(or CBT)に合格できず無限ループにはまった学生への対応。
- ・今は思いつきません。
- ・今回のような学生対応についての内容はとても良いと思いました。
- ・今回のテーマは今後も検討していく必要のある内容だと考えます。次回も同様のテーマでグループでの討議ができればと思います。
- ・大学のブランド化について。
- ・メンタルヘルス。
- ・事務局員の方々にも学生への窓口対応についてさらに学んでいただけると、学生にとって有益だと思います。内容としては学生対応での態度、メンタルヘルス、発達障害などについて。
- ・本テーマを継続して取り上げて欲しいです。
- ・学生の教育関係、（特に成績が振るわない学生）は続編があっても良いと思います。
- ・「どのようにして優秀な受験生を獲得するか」
- ・カリキュラム改訂について。
- ・すみません、すぐには思いつきません。思いつきましたら学科のFD委員の先生を通じてお伝えします。
- ・配慮の必要な学生だけでなく、学生対応は年々難しくなっています。大学のカウンセラーの先生の話も聞いてみたいです。
- ・特に無し。
- ・テーマではありませんが、今回寮生活という案が出ていましたが、寮と言わずとも、泊まり込みの合宿などは実際のところ可能なかどうかが気になりました。
- ・オンライン授業と対面授業をそれぞれのメリットを生かし効果的に組み合わせるためにはどのように授業設計をすればよいか。
- ・（１）TA制度の活用による教員負担の軽減。（２）学修データ（Formsの小テストなど）の活用方法。効率的に講義内容にフィードバックしたいです。
- ・オフィスアワーの有効活用、Zoomやメールを使った質問対応など。
- ・要支援学生における学生間のサポート体制について。
- ・『選ばれる大学』にするために。



学務部 教務企画課 〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢 1757
TEL:0133-23-1211 / FAX:0133-23-1669
URL:<http://www.hoku-iryu-u.ac.jp/>